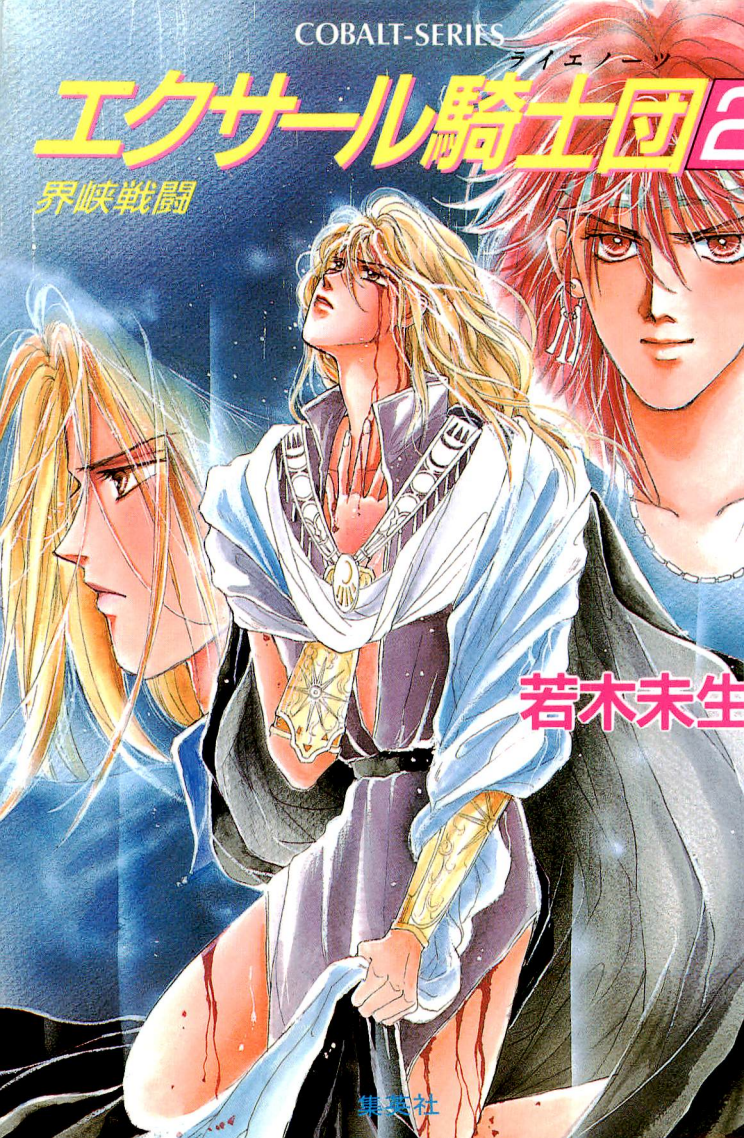
COBALT-SERIES

コバルト

エクサール騎士団2

界峡戦闘



若木未生

集英社

双子の姉ディシスにより荒廃した異世界、琅月界から救い出された巫女へエクサール・レア〉。それがあきらの真の姿だという。同様にこの世界、炯月界に送られた、姉の愛した礼神官アスヴァル＝葉月奏太。彼は琅月界を再興すべく、今は亡きディシスの代わりとしてレアの協力を強要してきた。だが兄たち衛、閃、貢は本来の姿を表しそれを阻む。彼らこそエクサールを守護する騎士団であった!!

恋を夢みる乙女のための小説誌!

[コバルト]
Cobalt

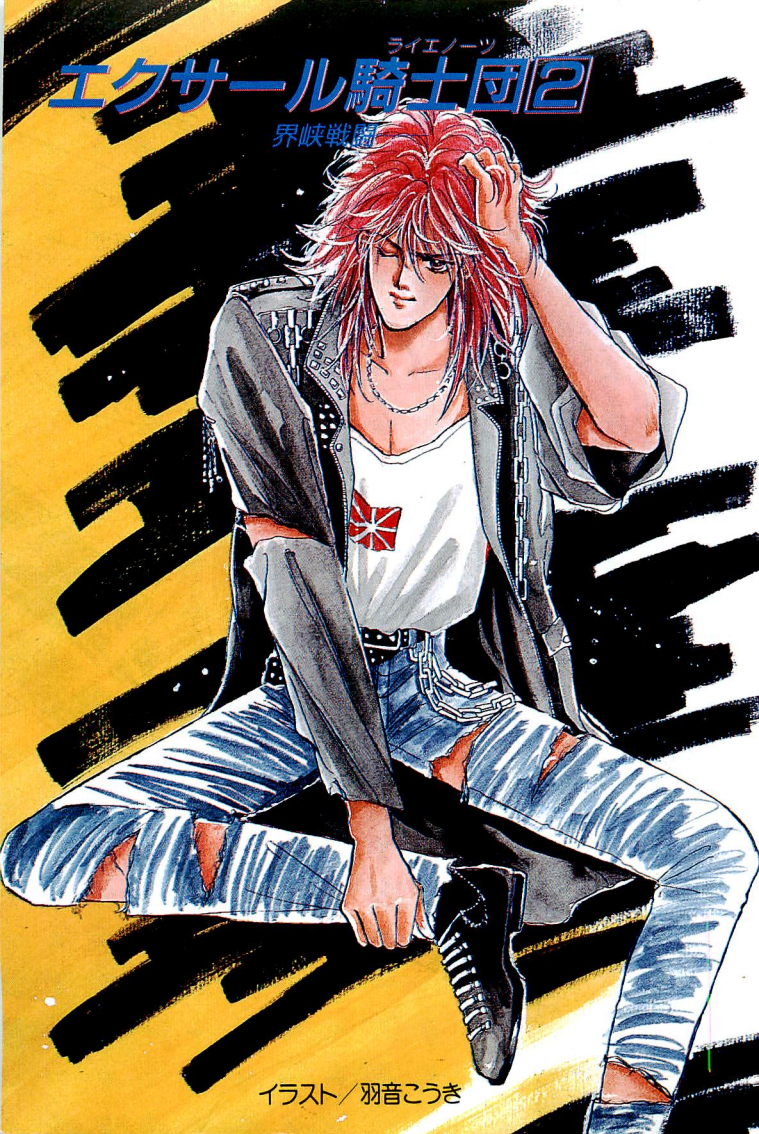
1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売

隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。
あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

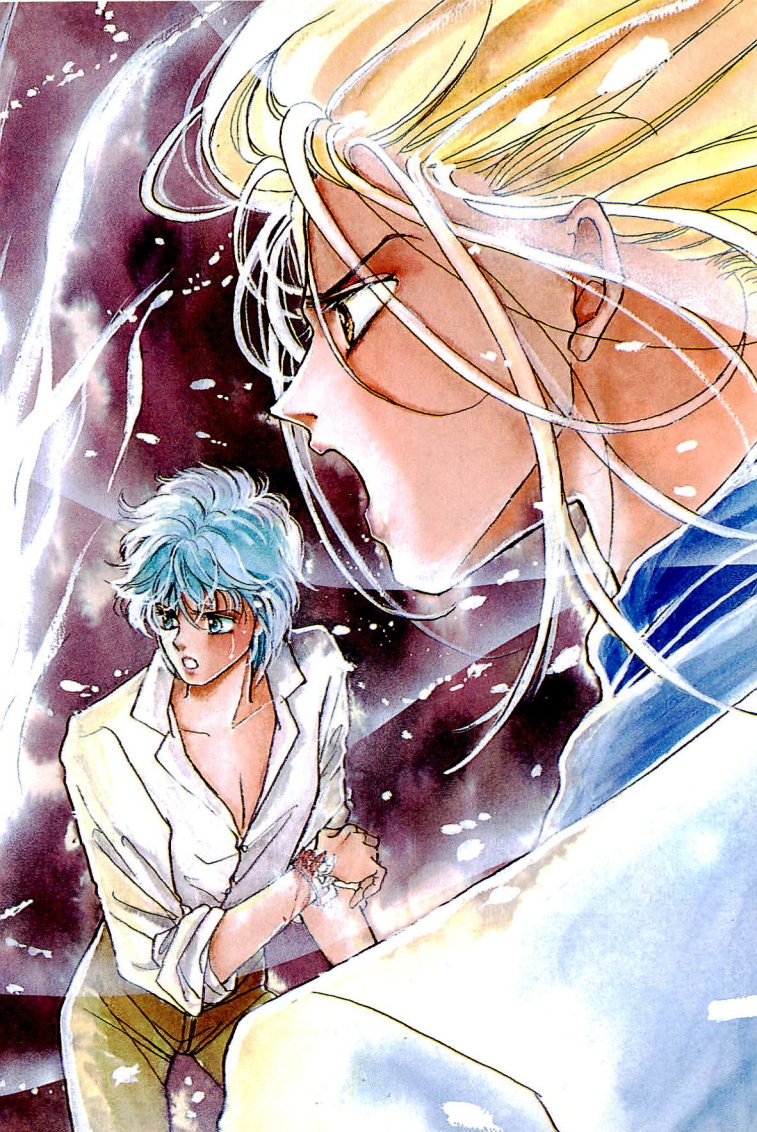
集英社

エクサール騎士団(ライエノーツ)2

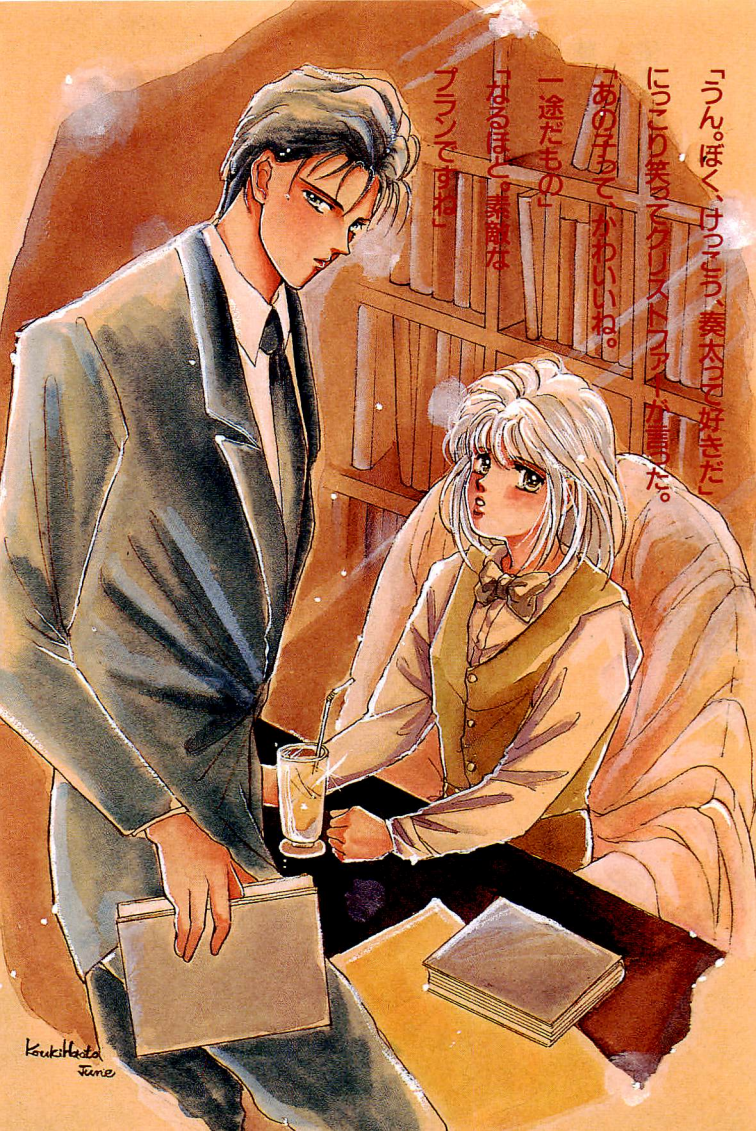
界峡戦闘



イラスト／羽音こうき




「叛逆の徒に滅びへの道を
ひらくがいい!!」
「よおおお――ッし、
いい度胸だ!!　燃えくされ
軟弱野郎ッ!!」
使鍵の響きが場を圧した。


「うん。ぼく、けっこう、葵大つて好きだ」
にっこり笑って「クリストファ」が言った。
「あの子って、かわいいね。一途だもの」
「なるほど。素敵なプランですね」
Kaoru Hasada
June



COBALT-SERIES

エクサール騎士団(ライエノーツ)2

――界峡戦闘――

若木未生

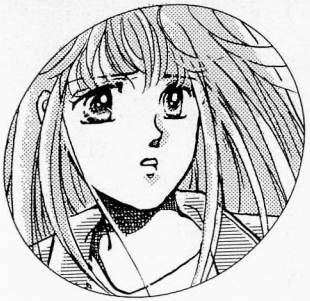
集英社

目次

エクサール騎士団（ライエノーツ）[2]——界峡戦闘——

序……12
第一章　ソニー・W・エクセル……18
第二章　透視図……57
第三章　メビウスの眩惑（げんわく）……83
第四章　回天……123
第五章　界峡戦闘……153
用語解説……195
あとがき……197

登場人物紹介



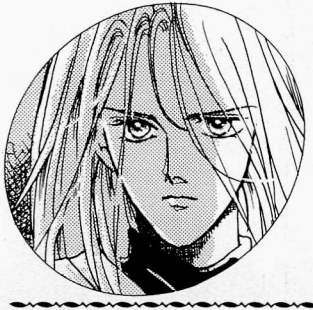
来生あきら

来生家の長女。14歳。またの名をレア。実は異次元の世界〈琅月界〉からやってきた巫女（エクサール）であるが、本人はレアとしての記憶を失っていた。アスヴァルの罠により〈晶月界〉に連れ去られてしまい…。



来生　衛

来生家の長男。19歳。またの名をライア。エクサールの守護を使命とするライエスのひとり。光を操る能力がある。優等生ぶっているがけっこうなエゴイスト。アスヴァルとの戦いでS駅を爆破し地下に閉じ込められて…。



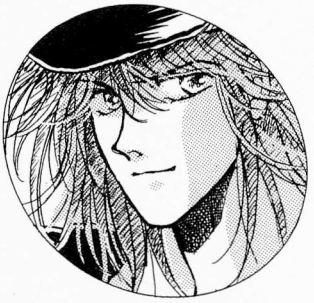
来生　閃

来生家の次男。17歳。またの名をイオ。風を操る守護者である。無口で無表情なため、一見孤高の哲学者ふうだが、実は不器用で口下手なだけだったりする。ユーマとともにあきらの救出に南小学校へ向かうが…。



来生 貢（みつぐ）

来生家の三男。16歳。またの名をユーマ。水を使う守護者。中性的なルックスで、巧妙に母性本能をくすぐるタイプ。家事一般をとりしきり、来生家の家計を握る実力者(?)である。



ソニー・W・エクセル

またの名をガディス。炎を使う守護者。ヴァーミリオンの瞳に錆色の髪を持つ直情的な異端者。〈琅月界〉が圧壊した際、ライアたちとは別の場所に転移していた。4年の歳月の後、はじめて彼らの前に姿を現した理由は…。



葉月奏太（はづきそうた）

あきらと貢が事故から救った少年。実は〈琅月界〉の礼神官アスヴァル。彼の野心のために〈琅月界〉は圧壊し、あきらたちがこちらの世界（＝炯月界）に送り込まれた。あきら＝レアの能力を復活させようと企んでいる。

イラスト／羽音こうき

エクサール騎士団（ライエノーツ）2
――界峡戦闘――

序

澄んでいた。

なにもかもが透明に澄みきって、まるで底がないようにどこまでも薄紫に染まっていた。

上空に広がるのは闇だ。

透明な大地。地平の彼方まで。

不思議と、ここの地平線はまったくの直線にみえる。一枚板を連想させる。それも水晶を削りあげた一枚板だ……。

果てのない大地のうえには、寂しげな門、ひそやかな泉、そして透明な塔だけが存在している。

天に届かんばかりに、その塔は屹立していた。闇の色を映し、やわらかい光を含み、静かに。

——とても静かに。

門はこの狭く小さな界への入り口。
泉は光の源。
闇空は異界との境となる防壁。
水晶塔はそれらすべてを見守り、ただひっそりとそびえていた。
ここは〈晶月界〉。
なにものも拒まず、なにものも迎えない。
いま、空と大地はともに冷たいほどの沈黙を保ちつづけている。

＊　＊　＊

晴れわたった青空に、グレイがかった土煙がたなびいているのが見える。倒壊がおきたのは半時間ばかり以前のことなのだが、おだやかな天候のせいで景色はなかなか変わらない。
「案外、しつこいな……」
直射日光に、彼は顔をしかめる。
この丘陵からのぞめるS区の全景は、まだ遠すぎてちっぽけなパノラマだ。あの街で異常事態が頻発し、自衛隊、報道機関、その他お役目ご苦労ないくつもの団体と人々が出動して騒ぎに輪をかけ、そしてあげくのはてに中心地に新築されたばかりの私鉄S駅がほぼ全面的にぶっ

こわれた——などという現実は、ここから見るかぎり大笑いの大嘘としかおもえない。
しかし派手にやったものだ。
さぞかしたいへんな労力がはらわれているだろう。労力の無駄遣いともいえるが。
「要するに馬鹿なのさ」
ジーンズのポケットに小型の双眼鏡をねじこみ、彼はそう結論づけた。
古着のあちこちにつけたアクセサリーがぶつかりあって音をたてる。ゆるんだTシャツの襟元には、ついでのように細い銀鎖がのぞいている。
街を眺めやる瞳の色は、あざやかなヴァーミリオン。
気まぐれに伸ばした髪は、錆色の赤。
もとよりこの国には縁がない……。
来るつもりもなかった。
なにしろ面倒だ。メサイエ・エクサール・レアなんて鼻持ちならないお転婆娘の世話もごめんなら、あの鬱陶しいライエノーツの連中とかかわるのもごめんである。
……礼神官アスヴァルが罠をしかけた。連中に教えてやるべきだろうか？
それもまた面倒である。それにしてもあのエクサール、もうすこし利口になれないのか。
ため息をついて、彼は足元にころがしてあった帽子をひょいと蹴りあげた。髑髏の印をあしらった黒い帽子が器用に手中に舞いおり、それを目深にかぶりなおしつつ、彼は丘をくだりは

じめた。
　腑甲斐なさすぎる。なによりも、奴……あれではとても、光使の称号をいただくライエスの動きとは思えないではないか。

＊　＊　＊

「簡単な仕掛けだ……」
　少年は闇空を仰ぐ。
　なんという平安か。なんという静寂か。
　荘厳たる、界のはざまに彼は立っている。妨げる者の姿は、すでにどこにも見られない。
「だから、ここまで君を連れてくるのが先決だったのさ。なによりも、ね……」
　少年――葉月奏太はそう呟く。水晶のドームをすかして闇を見つめながら。
　いまごろ、あの三人の守護者たちは、主君を奪われたうえに混乱のつづく〈炯月界〉にとりのこされ、さぞ苦労していることだろう。
　この『界境』……晶月界まで転移することは、彼らにはできない。そこまでの能力は、一介のライエスごときに許すわけにいかない。
　エクサールが界を操るための聖なる地。それが晶月界である。

訪れるものはエクサールの乙女と、そして上級の神官のみ。
うつくしい闇の世界……。
粗暴な戦士たちに踏みこまれるべき場所ではない。
葉月奏太はゆっくりと視線を足元へと移す。水晶塔の頂点にあたるこのドームには入り口も出口もない。複雑に光を屈折させる壁面で全方位をかこまれている。広い床は楕円をえがき、なめらかに彼の姿を映している。
彼の瞳は、その冷たい床に横たわるひとりの少女の姿をとらえて止まった。
濃褐色の長い髪が彼女のまわりに広がっていた。彼女はまだ眠りの内にある。
「簡単な仕掛けだ。司杖の力さえあれば、とても簡単に実行できる……」
彼は静かに片ひざを床につく。
手に入れた乙女、メサイエ・エクサール・レア。
「転移の術をガースの解放と連動させておくだけでよかった。あれは君の隙だな、レア」
元来、ガースはエクサールを求めて狂っていた。主を失った孤独に耐えきれず。その衝動をときはなつことは簡単なことだ。ましてそれを手にするエクサールに自覚がなければなおのことだ。
「だからこそエクサールの乙女は孤独になるべきではなかった。君のように勇敢なエクサールにも、心の隙とは生じるものなのだね……やや意外な気分だ」

その原因はあの光使か？　だとすればそれはあのライエスの失策だ。
心惑わされたか？　光使ライア。エクサール・ディシスを守護するものよ。
「無理もない」
彼女の髪に指を触れて、少年は呟く。
「あまりにも似すぎている……」
なにも知らず眠る横顔も、その髪の色あいも。
触れたときに胸を走る戦慄さえも。
「何故……」
何故この娘が君ではありえなかったのか、ディシス。
心からの叫びをおしころし、彼は頭を垂れ、唇を噛む。
礼神官アスヴァルは長いことそうして、凍りついたように、彼女の傍らにひざまずいていた。——たったひとり生き残ったエクサールの、傍らに。

第一章　ソニー・W・エクセル

I

金褐色の髪をひるがえし、風使イオは目的の地に向けて走りつづけていた。混乱する街のなかをつっきり、風にのって南を目指す。

水使ユーマとはあえて別の経路を選んだ。司杖を有する葉月奏太が――アスヴァルが、こちらの追跡を知って移動したときのことを考えると、二手にわかれていたほうが対応しやすい。思いのほか南側は静かだ。戸外に出ている人影がないということだ……。人目に触れずにすむのはありがたいが……。

「何？」

イオは足を止める。客はおろか店員さえ姿を消したスーパーマーケットの、ちょうど真ん前だった。

追っ手がないのか……？

左手の中指に光るのは銀の指輪。ディレイ・ザード。風を統べるその使鍵が、彼に告げる。

妙、なのだ。

風が変わった。

ざわついていた異様な気配が消えている。不快な、異生物の蠢動する空気が。

それがいったい何を意味するのかは、まだわからない。

立ちつくしたまま、イオは周囲に目を走らせた。

開きっぱなしになった踏切が、路地の先に待ちうけている。遠くから消防車のサイレンが届く。空をゆくヘリコプターの影が落ちる。穏やかに晴れた空。

穏やかに？

指輪を耳元に近づけ、その声を聞いてみる。駄目だ。使鍵も迷わされているらしい。読みきれない。

この穏やかさが本物であれば、問題は何もない。しかし……。

凶兆でないとなぜ言いきれる？

破壊された駅を離れてから、ライアと完全に連絡がとだえてしまっている。それがなにより気になる。

彼の名を呼んでも無駄なことは知っている。このもどかしさが常に心を騒がせる。相手が水使ユーマであれば、必ずどこかでつながりあえる。通じあえる。だが光の使鍵と語りあえるのはディレイ・ザードでもディレイ・ミンスでもない。あの、炎の使鍵だけだ。

せめてもうわずかでも光使ライアの動きを理解できたなら、こんな迷いは生じないのだが。

指輪が輝いて、水使ユーマがかなり先行していることを主に告げた。

突出するのも危険だ。新たな憂いが、美しい風使の面をいろどった。

不確かな勘にわずらわされている時ではない。おそらくまた、その心配性と空想癖をなんとかしろとユーマに苦言を呈される。ユーマのそんな性格をイオは愛していたが、ともかく盟友に遅れをとるべきではなかった。

「おまえも俺も似ているようだ……ザード」

左手の指輪に唇をよせて、イオはささやかに微笑した。

「小さなことに気をとられ、迷ってばかりいる……」

S区の外辺ぎりぎりを、身軽に駆けぬけていく小柄な影。それが、水使ユーマだった。

何を間違えたか4トントラックが中央分離帯につっこんで、国道は上下線ともに大渋滞の真っ最中である。ユーマは舌打ちした。車道ぞいにまっすぐ行くのがいちばん近道なのだが、青い髪はいやでも注目を浴びるし、だからといって化けるほうに余分な力はつかいたくない。

「駄目だなあ、もうっ……車なんか乗ってる場合じゃないだろっ!?」

ぼやきながらもユーマは律義に方向転換して裏道へとびこむ。関係ない一般人の皆さんをこれ以上、変事に巻きこみたくもないのだ。——関係ないくせに口出しされるのが何より困るの

だが。

「どうもぼくたちってば貧乏クジ引きまくってる気がするなあ、ミンス！」

ブロック塀の上を器用に走りつつ、ユーマは自分のディレイ相手に愚痴をこぼした。

確かに四人のライエノーツのなかで最も年少、おまけに使鍵は水を司る——すなわち防御型の——ディレイ・ミンスだ。小細工なら得意なのだが。どうも、派手な局面になると。

「やっぱり炊事洗濯に酷使しすぎたのが祟ったかな……環境の問題は大きいぞ、まったくっ。今度から少しはあきらにも家事やらせなきゃっ」

——あきら。今どこにいる？　どうしている？

気ぜわしい独り言とはうらはらに、胸を占める思いはひとつきり。

ライアは愚かではないだろう、とイオが言う。それはわかる。

だがあの優等生の長兄は——首席の光使は——無謀というよりも、ずいぶんと刹那的なのだ。ユーマがイオと意見を異にする点は、そこである。いつもいつも命を捨ててかかっているのだ、ライアは。イオはそれを彼の強さだと評価しているのかもしれないが……。

イオは素直すぎるし、ライアはひねくれすぎときている！　しかも自分にはそれを変えてやれるほどの影響力がない。もっと時間さえたてば、きっとあきらが鍵になるのだろうけれど……。

つまりあきらが無事でいなければ自分たちは総倒れもおなじなのだ。そのあたり、あきらに

しっかりわかっていてもらわないと困る。

そしてライア。

彼を信じないとはいわない。大事な仲間のひとりであることに変わりはない。それでも不安は残る。別の次元のこととして。

今の彼は……かつてのライアとは違う。それはどうしようもなく真実で、事実だ。

彼は生命のすべてをディシスにかけていたのだから……。

「壊しも壊したり……だ」

足元に堆積した瓦礫と頭上でねじくれまがった鉄骨を見くらべ、彼はそんな感想を漏らした。

私鉄S駅跡、である。

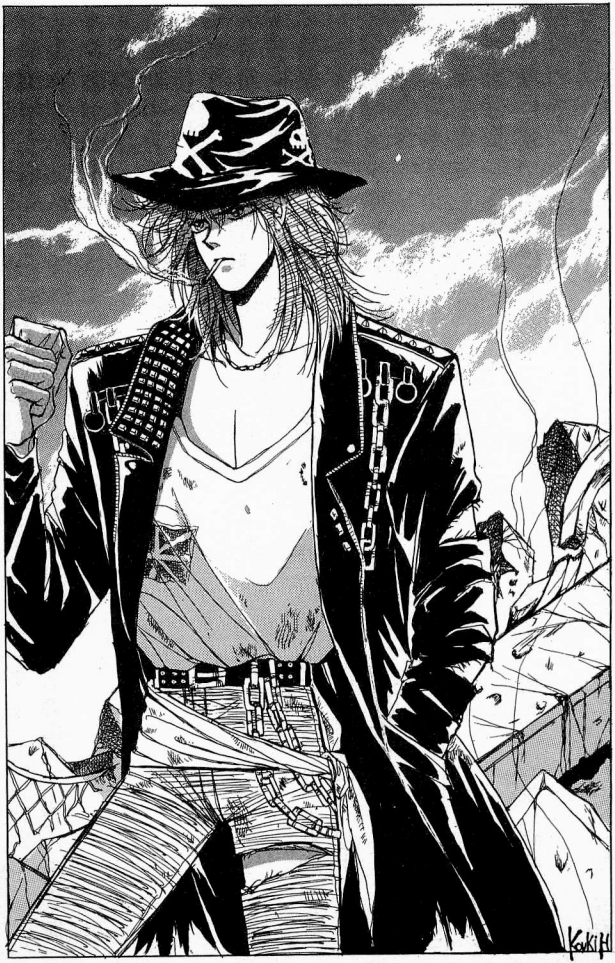
新築だったのにもったいない、などとはもちろん彼は考えない。

「当っ然、助からねーよな、生き埋めになっちまったら……」

気軽に言って、ジーンズのポケットから煙草をひっぱりだす。ひしゃげた箱に残っていたキャメルは三本。無造作に火をつけ、吐息まじりの一服。

「ハンパに壊れてやがるから、わざわざ掘り出そうとする奴なんかもいやしない」

彼の指がキャメルをはじき、火の残った煙草は瓦礫のなかに落ちこんで姿を消した。間をお


KAKIH

かず、彼は二本目を箱からぬいて火をつける。

帽子の鍔の下で、ヴァーミリオンの瞳が細められる。勘を刺激する要因が……なんとなく読めてくる。

血の匂いか。

二本目が投げ捨てられる。今度は反対側に。

「気に入らねえ……」

三本目をくわえて彼は呟く。

「おい、きみ！　この辺りは封鎖地域だぞ！」

背後から突然そんな声が飛んできた。煙草のはしを噛みつつ、彼はのっそりと振り向いた。警備員か警察官か、はたまた軍隊の人間か、こちらの国に慣れていない彼には、相手の立場を見分けるだけの知識がない。わかっていることは、要するに――邪魔が入ったということだ。

二人組。制服姿。銃を保持しているようだが。

「ガイジンみたいですよ」

赤い髪と瞳が、連中には忌まわしく見えるらしい。囁きあう二人組を彼は呑気に眺めた。

「スパイかもしれんぞ」

大まじめにそんな台詞を吐いている。こりゃ軍人じゃねえな、と彼は可笑しくなった。田舎

者の警官どもめ。

「そこ、動かないように！　平田くん、英語つかえんかね、ほら！」

「はっ。あー、ドントムーブ！　フーアーユー!?」

三本目の煙草を放り出し、彼はこらえきれずに声を殺して笑いはじめた。Fuckin' great な奴らだ、まったく。

「よお、ローザ」

帽子を片手で押さえ、どこへともなく呼びかける。

「派手に頼むぜ、派手に」

ドンッ、と地鳴りとともに周囲の三点から火柱がたちのぼった。彼の姿は舞いあがる土砂に包みこまれた。

爆風に飛ばされそうな帽子の下で、これみよがしにウィンクする彼を見たのが最後だった。二人組の警官は思いきり吹っとんだうえ、コンクリートの塊に抱きとめられて、しばらく眠りにつかざるをえなかった。

三角形を描いて——火を宿した状態の、煙草の落下地点を頂点とする三角形である——瓦礫を掘りぬいた彼は、続いて横穴造りに着手した。

勘に誤りがなければ、このすぐ近くに空洞がある。

「うまく見つけろよ、ローザ」
袖をたくしあげ、暗い地中でまわりをさぐる。落とし穴に閉じこめられたような気分を味わえる……。
「俺が閉所恐怖症でも暗所恐怖症でもなかったことを、感謝するべきだな」
あった。
朱色の瞳に、いたずらっぽい光がよぎった。相変わらずの波長だ。あきれるほど変わらない。
とりあえず生きている。なるほど。
「とりあえずね……」
鉄筋コンクリートの残骸が、がらりと押しのけられる。勢いでいくらか土砂が流れ、そこに生まれた空洞の片隅に小山をつくった。
彼は敏捷な動きで、空洞の内側に身をすべりこませた。時間はかけたくない。
血の匂いは、まぎれもなく本物だ。ここまで来ればいやでもよくわかる。
さて、どうするか。
死体になりかけている奴なら、目の前にころがっている。とりあえず。
見るだけは見にきてやった。その先は未定だ。とりあえず。
なにが親切かと自問すれば、回答はおそらくすでに出ている。彼は腰を屈め、ひざを折り、

そして手をのばした。
倒れ伏した影の、胸元に。
「ディ……？」
不意に彼を呼ぶ声が発された。伸ばされた指が、止まった。
彼は顔をしかめる。闇のなかで。
「おい、勘違いしないでもらうぜ。俺にはソニー・W・エクセルって立派な名前があってなァ、そう気安く嘘っぱちの名前で呼ばれたくないんだよなー、ったく、しっつれーじゃねーかよ、人の名前をよー」
「無駄だよ。すぐにわかる」
会話が意図したとおりに運ばない。いまいましげに彼――自称ソニー・W・エクセルはため息をついた。
「わからないはずがない……」
もう一度、かすれた声が告げる。
ディ、と。
炎使がディスをそのように呼べる者は、ただひとりだ。いかなる世界にも。
「……俺が見えるのか？」
冷静に彼は問いかける。

「いいや……」

そう答えることを、ライアはまるで楽しんでいるようだった。

「だろうな。いくらてめえでも死ぬぞ、この傷じゃ」

ライアのもつ琥珀の瞳は、どんな暗闇でも、わずかな光さえあれば対象をとらえる。見えないはずがないのだ、普通の状態なら。

目茶苦茶な戦い方をしたことなら一目でわかった。しかも駄目押しまでくらっている。

エクサールの空間転移には——界をわたる儀には——何人も介入してはならない。強力な負の力がその者に返ることとなる。たとえそれが守護者であろうとも。

知っていてレアの転移を妨害し、当然の報いをうけたわけだ。すべて承知のうえで瀕死の傷を抱えこんだのだ。愚かとしかいいようがない。

「ディ」

「遺言なんざ言い残したって駄目だぜ。伝えてやる気がねえからな、俺には」

ジーンズに結んでいたスカーフを、彼は手早くほどく。包帯には分量が足りないが、ないよりはましである。

「ディ、頼む」

「エクサール・レアの面倒なんざ二重にごめんだぜ。てめえが馬鹿やったせいで攫われたってことはわかってんのさ。いまさら責任とりきれねえな、俺には」

スカーフで傷の近くを縛りつつ、そっけない口調でソニー・エクセルは言い捨てる。
「変わらないんだな……」
苦笑するしかなかったらしい。どこか懐かしげにライアが言う。
「そっちはずいぶん変わったみたいだぜ」
ソニーの言葉に対する返答はなかった。
答えたくなかったのか、答えられなかったのか、あるいはその声さえすでに届いていなかったのか。ライアはただ、冷えきった腕をもちあげてソニー・エクセルの肩を抱き、一言だけを友に残した。
「無事で、よかった……」
炎使ガディスは沈黙を守った。彼の腕が力を失い、やがて静かに落下するまで。
このままではおそらく彼は……死ぬのだろう。それも単なる犬死にである。もっとも大きな失策の責を身に負ったきり。なにもかも八方塞がり、礼神官アスヴァルに花を持たせてジ・エンドというわけだ。
「わかってねーな、ライア。俺にはそっちのほうが都合がいいんだぜ?」
低い声で、ガディスが独白する。聞く者はない。
迷うのは性にあわない。
決断に時間はかからなかった。彼は結局いつもの主義を通すことに決めた。

炎使ガディスの主義は昔から不変である。やりたいようにやって成り行きにまかせるのだ。

II

何かを置き忘れてきたらしい。
とても大切なものを。
誰もがたったひとつ、守りつづけて生きてゆくもの。すべてに与えられ、すべてから奪われるもの。
……わたしは何を失い、何を求めて生きているのか。
ガース。
何ノタメニ、ドウシテワタシハヒトリデイルノカ。

『使鍵（ディレイ）を得ると同時に、ライエスとなる者は、それぞれの本質に応じて新しい称号を……名前を授けられることになる』
そう説明したのは、来生閃（きすぎせん）だった。閃……またの名を、風使イオ。無口で、繊細で、傷つきやすい人。
『忘れはしない。捨てるだけだ。昔の名前も、家族も、故郷も、自分とは関係のないものにな

るだけだ』

平然とそんな風に言いきれてしまう、彼の不思議な強さ。

『立ち止まるな、行くんだ!!』

促したのは貢。水使ユーマ。気がきいて、優しくて、いつも身近にいる。そんな彼でも……

『ぼくらはライエスだ！　だからあきらの重荷になんかなれない。それがぼくらの誇りだ！』

激しくなれる。厳しさを秘めている。振り返るなと、前だけ見ていろと言える。何を犠牲にしても。

『あきらにはあきらだけの役目があるだろ!?』

役目がある——本当に？　本当に？　たとえそれが自分の望んだことではなかったとしても？

『ひきずられるな、あきら！　自分の目で見て考えるんだ！』

……誰？

はっと我に返ると、あきらはひとりでドームの床に座っていた。周りには誰の影もなく、静かな闇が天を覆いつくしている。鏡のようになめらかな床は透明に光っている。この部屋に扉

はなく、この塔に階段はない。壁の向こうに見えるものは、門と、泉と、空の闇。

「晶月界(しょうげつかい)だ……」

よく知っている場所。

なじみが深すぎるほどの景色だった。庭のようなもの……いや、庭の奥にこっそり作った秘密の花園のようなものだ。誰にも邪魔されず、いつ訪れても美しく穏(おだ)やかな場所。

界と界をつなぐ、架け橋。

あらゆる界に属さず、そしていかなる界にも害されない。だからこそ、ここの景色は今も変わらず美しい……。

「晶月界?」

あきらは愕然(がくぜん)とする。

もう一段階、我に返りなおして。

何故(なぜ)こんなところに自分は来ているのか。いつから。どうやって。

司杖(ガース)はどこにも見えない。手中に収めたと思ったのはただの幻覚だったのか。

もしかしてこれもまだ夢の中?

「困った……」

頭のなかがぐるぐるしてきた。なにがなんだかわからない。優しかった景色が急に遠ざかったような、ジェットコースターから放り出されたような目茶苦茶な気分だ。

「困ったぞおおっ……」

べしゃっと床に額をおしつけてあきらは呻いた。つぶされそうだ。身体が縮んでいってしまいそうだ。小さく小さく……このまま一寸法師になりそう。

自分は誰でどこから来てそしてどこに行くの？

誰がどこにいて誰を待っているの？

考えなければ。自分の目で見て、考えなければ。少しずつ削れていって、いつかゼロになってしまう。

何かを置き忘れてきた。とても大切なものを。誰もがたったひとつ、守りつづけて生きてゆくものを。

「困ったときは、まず……」

上体をおこし、落ちかかってくる髪をかきあげ、混乱した頭のままあきらは呟いた。

「本当に困ってしまったときは、まず、手持ちのカードを確認すること……」

もうだめだと思ってしまうのは、自らカードを手放したときだ。

――どんなにつまらないカードでも、使い方ひとつで切り札になるんだよ。そのためにはまず自分のもっているカードが何なのか知らなければ、勝負にならないだろう？

「怪我……してない。おなか、すいてない。眠くもない。――うん、元気だ」

手足をのばしてみて、確認する。

自分の持ち札——戦力は、この自分ひとりだけ。

「誰も頼れないときは、まず自分を頼ること……」

ただし、それには条件がひとつある。

——誰だって、見るからに弱そうな人間や、嫌いな相手を頼りたくはならないものだ。だから自分を弱く思ったり、自分を嫌いになったりしてはいけない。あきらには簡単なことのはずだ……。

「……誰だっけ?」

誰の言葉だったのか思い出せない。誰が教えてくれたことなのか。

眼鏡の似合う、穏やかな笑顔の……誰?

誰?

空白の意識に沈んだまま、また長い長い時間を見送ってしまう。昼も夜もないこの晶月界では、時の流れもまったく計れないのだけれど。

「考えなきゃ……」

急に寒さを感じて、あきらは上着の襟を両手で引き合わせる。

考えなければ。

ただのぬけがらになる。自分が。

「あきらって、誰?」

なにげなくこぼれた呟きが、心臓を一瞬、止めた。
来生あきらって誰？
がばっと腰を浮かせて、あきらは透明な床を見つめた。きらきらと小さな光を内側で反射する、水晶の鏡。そこに映っているのは、確かに、男の子のような格好で鏡をのぞきこむ十四歳の――来生あきら。
「ばかものっ！」
いきなり鏡面の自分に向かってあきらは怒鳴り声をたたきつける。
「ふざけろよなあっ!!　あきらの大まぬけ、大嘘つき、根性なし、たわけものっ!!　忘れてる場合かっ!?　あきらはあきらだって決めたのはどこの誰なんだよっ!!」
ばんっ、と床に平手打ち一発。かなり痛かったが気にしないことにする。
「ちゃんと憶えてなさいよ！　忘れてんじゃないよ!!　甘えてんじゃないよっ!!　来生家に父っちゃんとみっちゃんとせんちゃんとえーちゃんがいるかぎりっ、あきらはあきらじゃないかっ!!　だってあきらなんか、あきら以外の何にもなれるわけないじゃないかっ!!」
来生家に彼らがいるかぎり。彼らが。
あきらは声をとぎらせる。……そうだ、彼だ。
「……えーちゃんだったんだ」
語りかけた言葉の主は。

あきらはそろそろと自分の掌を見る。かすかに残るのは、血の色ではなかったか？

ライア。光使、ライア。

彼は傷ついていて、けれど自分はその制止を耳に入れずに——何をした？

「じゃあ、やっぱり夢じゃないんだ……ガースはいたんだ、ちゃんと……」

間違った方向にガースの力を解放してしまったのだ。アスヴァルの狙いどおりに。まんまと自分ひとり晶月界までやってきてしまって。

帰らなければ。

ライアの——衛の身が気になった。何事もなかったはずはない。いてもたってもいられない……。かといって、行くあても取るべきすべもなくて。

ふと、あきらはぐるりとドームのなかを見わたした。なにかが心にひっかかった。

「!?」

壁面の一部に、色彩がいくらかゆらめいて消えた。見誤り、ではない。あきらはころがるように壁に走り寄り、水晶のなかに目をこらした。

「……違う、そっちの世界じゃない」

ひとりごちて、場所を変える。壁をなぞりながら、複雑な光の反射に意識を集中する。

「炯月界の……昼の部分。そっちでもない……違う、ここじゃない」

光る壁の内側でゆらぐのは、微妙な映像。この晶月界と接する世界が、気まぐれに影を映す

のだ。それもわずかな時間だけ。
どうすれば目指す界の景色を追うことができるのか、あきらは承知していた。そんなこと、知ってる。簡単なこと。
「！　そこだ、そっちがわ！」
あきらの目にとびこんできたのは、くっきりとした青の色だった。
青の髪と、碧の瞳。
「みっちゃん……？」
水使ユーマは、どこかに向けて急いでいるようだ。浮かびあがった彼の像をあきらは必死で見守るしかなかった。
ユーマに——貢に伝えなければならない気がする。自分がここにいることを。でないと貢自身になにかよくないことが起きる……多分。
せめて声が届くなら。言葉を交わせたらいいのに！
咲き狂った桜の枝が、像を結んだ。あきらは息を呑んだ。
アスヴァルが、ガースを囮にして見せた光景と同じだ。空間をつないで強引に自分を招きいれた、まさにその場所だ。
今、ユーマはそこに足を踏み入れようとしているらしい。……いやな予感がした。

III

不意に甲高く響きだしたチャイムに、イオは思わず足を止めた。
始業のチャイムだ。誰もいない校舎と校庭に、いつもと変わらない鐘の音だけが不似合いに鳴りひびく。
S区区立南小学校——。校名の記された門をくぐり、イオはゆっくりと校庭に踏みこんだ。すべり台のむこうに見えるのは、小さな砂場だった。無人のグラウンド。何事もないように感じられる。一見したところは、だ。
「どう思う？　イオ」
先にたどりついていたユーマが見返る。鉄棒の支柱に片手をついて。
どう思うと訊かれても、イオに答えられることはひとつしかない。
「妙だと思う」
「……それって初めからわかってたりしないか？」
「罠、だろう」
表情は変えぬまま、イオが続けた。
咲き乱れた桜の枝の下、小さな砂場の片隅に、まるで忘れられたように置き去られたのは黄

金色の短刀。
　ガースだ。
　……イオの視点は正しい。
「使鍵で見極められないかとも考えたけど、だめだ。波動だけだったら本物のガースそのものなんだ。たしかに、これみよがしにガースをこんな所に放ってあるなんて、いかにも怪しいさ。罠だと思わなきゃライエスじゃない。そうだろ？」
　自分に言い聞かせるような早口でユーマは補足説明し、だが、もどかしげに眉をしかめた。
　それだけできれいに終わらせられる話ではない……。
「問題はあきらなんだ！　あきらがここにいなくて、ぼくたちの目の前にガースがあって、アスヴァルの影もかたちもなくて、それってつまり何なんだ!?　あきらが今どこにいて、どんな状況で、どうしてるのかなんて、ぼくたちには何もわかってない!!
　今頃になって気づいたってあんまりばかだけど、ぼくたちはかなり迂闊だよ……！」
　イオは無言でユーマのことを見遣った。ユーマの言いたいことを認めているのかいないのか、彼の態度にはまったくあらわれずじまいだ。
「いやな感じがするんだ。……ぼくたちはライアに期待しすぎて何かを見失っているんじゃないか？」
「期待？」

「ああ、ぼくだって今までそんな風に考えたことはないけどね！」

頭をひとつ振って、ユーマはアクアマリンの瞳をあげる。

「イオ、わかってるんだろう？　ライアが完全無欠だったのは昔の話だ！　ぼくたちが当然だと思ってることが、今もそのとおりに通用するとはかぎらない。レアの守護者のくせに、ぼくらはそんなことすっかり忘れてライアに全部おしつけてきてる。堕落だよ！　罠が目の前にあるってのに、それでどうしたらいいかわからないでただボーゼンとしてるだけなんて、我ながらくだらなすぎて涙が出るよっ！」

「……投げやりになるのは、もっと危険だ」

イオが静かに呟く。

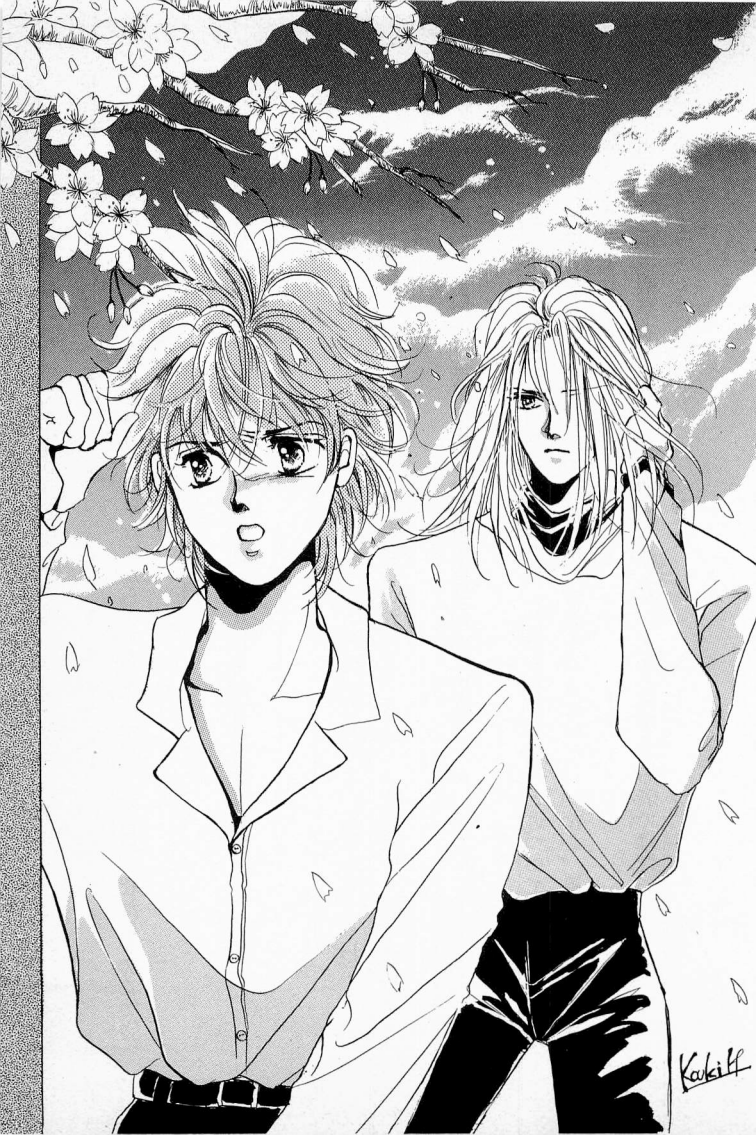
「投げやりになんかなっちゃいないさ！　自慢じゃないけどぼくは現実的だからね！　ぼくが考えてんのは、虎穴にいらずんば虎子を得ずってことくらいだよ！」

厳しくユーマが言い放ち、イオはかすかに両眼を見開いた。罠であろうとあえて手を出してやると、ユーマは言っているのだ。

「無謀な策は、おまえには似合わない」

うまく制止できる言葉など、イオには語れない。ただ思いのたけを可能なかぎり声に乗せようと努力するくらいしか。

「悪いけど、年下の弟としてはね、わがまま言わせてもらわないとね！」


Kakiki

「……わがままも似合わない」
「いいんだよ！　これから似合うようになるから！　たまには花くらい持たせたらどうなんだよ、兄貴だろ!?」
「俺は……」
言いかけたイオをユーマは強引に片手でさえぎり、そしてふと微笑した。
「兄貴、だろ？」
「……」
共倒れを避けたいという意図はよくわかる。この状況を打開したい気持ちもよくわかる。ユーマが本当に危険を冒すつもりなら、それは彼の決断だ。中止せよと命令をくだす権限は、イオにはない。
だが、何か……何か、無視できない要素がまだ残っている。
「見てろよ」
ひらりとイオに手を振って、ユーマは落ちついた足取りで砂場へと近づいていった。イオは動かずに彼の背を見守った。ざっ、と強い風が校庭を吹きぬけていったが、風使に伝わる言葉はまったく含まれていなかった。
当然だ。風は観察者であり、智恵者でもあるが、未来を予言する者ではない。
歩きながらユーマが右の拳をかためる。

その細い手首を包んで銀光をはなつ腕輪があらわれたのは、次の瞬間のことだった。ディレイ・ミンスである。

腕輪はさらに姿を変え、小ぶりな盾となって彼の右手によりそった。盾でありながら鋭いエッジを有する、攻守両用の装剣――。

「……ユーマ」

イオはあることに気づき、愕然とした。

違う。迂闊なのは自分だ。レアの守護者であるべき二人がわかれて行動することの危険を、忘れ去っている自分だ。

いつの間にか来生閃としての自分の立場が、風使イオとしての義務を侵しているのではないのか!?

「ユーマ、待て!!」

叫んだ声はわずかに遅れた。

ユーマは振り返ろうとしたらしい。しかしその時すでに黄金色のガースは彼の手中にあった。――ユーマが息を呑んだ。

「！　幻像だ！」

彼の手が触れた瞬間、短刀の輝きは失われ闇の色がそれに代わった。とっさに身を遠ざけ、ユーマは右腕で空を裂く。流星のように装剣がきらめきガースを両断した。砂上に落下したの

は、ガースではなく――中央から切断された桜の枝。
「ありがちな仕掛けじゃないかっ！」
ユーマが舌打ちする。跳躍してその場を離れようとした足が、なぜか止まった。
ずるり、と砂が低く鳴った。
「ユーマ？」
イオが呼ぶ。ユーマは自分の立っている場所を、思わず見まわした。何の変哲もない小さな砂場。砂。
――この砂が。
「イオ！　この砂は結界のっ……!!」
すべてを言いきらぬうちに、砂の波がユーマの脚をくわえこんだ。バランスを崩してユーマが倒れ、待ちかまえていたように左腕も呑みこまれる。底のない蟻地獄。
「ディレイ・ザード！」
説明は不要だった。この砂は結界への入り口だ。閉じこめられる。鋭い声でイオは使鍵に命を発した。
「ユーマを救え、何をしてもかまわない！」
「無理だ、イオ！」
ユーマが叫び、風は悲鳴をあげた。

嵐の刃も、竜巻の力も、一粒の砂さえ動かすことができなかった。ガースの護りを利用して作られた結界にライエスの能力など通じるはずはない。強烈な抵抗にあい、ザードの導いた風は逆流してイオに返る。

暴風に身をさらし、自ら放った攻撃をイオは強引に防いだ。ユーマはすでに半身を砂に沈めている。時間がない！

「ザードの誘導にミンスの波長をあわせるんだ。急げ！」

イオが促した。互いの使鍵は長いこと対をなしてきたのだ。均衡をとることくらい簡単にできる。結界の内外で使鍵を響きあわせれば、あるいは突破口もひらけるのではないか。

「ミンスが……」

首を横に振り、ユーマが答えた。

「切り離されてる……ディレイ・ミンスは封じられてる！　いいからおまえは行ってライアを捜すんだ！　それからあきらをっ!!」

「切り離された!?　――水か！」

結界が、水との交信を阻んでいるということだ。

「この程度で死んだりはしないだろ!?　とにかくこっちはこっちでなんとかするっ!!」

ずぶずぶとユーマは砂に呑まれてゆく。右腕のディレイ・ミンスからは光が失せている。

この程度では死なないとユーマは言いきる。だがイオは去らなかった。ディレイをつかえな

いライエスなど、普通の人間と大差ない。
ユーマを置いていくのは、見殺しにするのと同じことだ。
「……俺は」
呟いて、イオは左手の指輪にふれた。
「俺は、もう少し、強欲だ……」
「おまえっ……！　ばかっ!!」
その声を最後にユーマは砂中にひきずりこまれた。迷わずイオはそれにつづき、砂の底に身を投じた。二人の姿は完全に地上から消えうせた……。

IV

エクサール――それは因果力を導く者。
百五十九代目のエクサールは、異例のことながら、双子の姉妹であった。よって四名の守護者たちは神殿の命により、直属すべき主を定められることとなった。
妹のレアに属するのは、水使ユーマ、風使イオ。
そして姉のディシスに属するのが光使ライアと炎使ガディスである。
使鍵を得ると同時に、ライエスはそれぞれの本質に応じた称号を与えられる。ライアは〈守

護する者〉、イオは〈姿なき者〉、ユーマは〈恵与する者〉との意を、その称号の内にもっている。

炎使ガディスの称号は、やや特殊なものであった。

その意を〈還らざる者〉という。

束縛を知らぬ、自由と戦乱と勝利を愛する放浪者……それが、炎をあやつるライエスの姿である。

皮肉なくらい良い天気だ。ソニー・W・エクセルは大きくのびをすると、行儀の悪い姿勢でカウンターの椅子に座りこんだ。

木目をいかしたカウンターと、飾りけのないスマートな椅子。悪くない趣味である。少々せまい店という気はするが。

店の名前も、まあ他愛ないといえば他愛ない。喫茶店『海』——命名者はよほどの面倒くさがりか、よほどのロマンチストだろう。

「昔、船乗りだったりしたのかい？」

「いや、とんでもない。私はただの医者だよ」

「ケンジツな人生ってやつかあ!?　つっまらねーなーっ!!」

「おいおい、その堅実な人生に大どんでんがえし！　があったからこそ、こんな店を建てたわ

けじゃないか?」

のんびりとカウンターの内側から答えるのは、店主の来生芳秋氏である。そうかそうか、そりゃそうだよな、とソニーは納得して頷き、頷きがてらに持ちあげたカップからコーヒーを一口すすり、今度は派手にのけぞった。

「ちょっと待て、おっさん! これってまさか、アメリカンじゃねえのかっ!?」

「ご注文どおりのアメリカンだが?」

「……うまいぜ。俺が知ってるなかで二番目にうまいコーヒーだ」

感動して涙が出ちまった、などとつぶやきつつ、ソニーは上着の袖でごしごしと顔をこする。……妙なところで感激屋らしい。

「それはありがとう」

マスターはにこやかにそんな台詞を吐く。……この呑気さもただごとではない。

「こんな見事なアメリカンがあるんなら、さっさと海こえて来るんだったぜ。ま、そんなことはどうでもいいや。……あんたもかなり変な人だな」

「そうかな?」

「だってあんた、こんな大騒ぎな日に店やってたって客なんか来るわけねえだろーが。家だってけっこう派手にぶっこわれてるみたいだろ。にこにこ笑ってる場合か?」

「家のなかが大変だから、店にいたほうが落ちつくってこともあるだろう?」

「落ちつきすぎてっから不気味なんだよ！」
「デリケートなんだなあ」
ごほっ、とソニーは小さくせきこんだ。
「……変なおっさんだぜ、つくづく。道理であいつらなんかとやってこれるんだ……」
そもそも、赤い髪と目をした青年がひとり、いきなり瀕死の怪我人をひきずって現れたら、普通は驚いたり怪しんだりするべきである。
そうでなくても水使ユーマや、風使イオや、そしてエクサール・レアの身に現在ふりかかっていることを心配すべき立場にいるはずだ、この人物は。ソニー自身にはまったく関係のないことなので、彼らが今どうなっていようと——実は今どうなっているのかしっかり知っていたりするが——別にどうといった感想は抱かないが。
「ガディスはいくつなんだい、今の歳は？」
琅月界での名前や、界を移行する際におきる逆時流の事情まで、あっさり口にしてしまえるこの神経が信じがたい。ソニーは咳払いをした。
「ちょうど二十歳ってところだな」
「衛よりも上じゃないか。困ったな」
「なにが困るんだよ」
「兄弟の順番が全員ずれこむじゃないか」

がたっ、とソニーはカウンターに片ひじをぶつけてしまった。
「なんだそりゃ!? 俺がいつあいつらと一緒に暮らすって言ったよ、ええ!?」
「せっかく頭をしぼって名前を考えたんだが」
「さっき自己紹介しなかったかっ？ 俺にゃソニー・W・エクセルって名前がきちんとなあっ」
「来生凱、なんてどうだい？」
「……おっさん、実はグレイトなセールスマンの素質があるみたいだぜ」
「初耳だねえ」
「とにかく俺はno thank youだ。先約があるんでね」
ため息をつきながらソニーはひらひらと手を振る。
「そう、その先約が気になっているんだよ。おまえさんは、ちゃんと良い人に拾ってもらえたんだろうね？」
大まじめに来生芳秋が尋ねたのは、そんなことだった。
なにしろ、四年間の空白がある。
まずライア——衛があきらを抱えて来生家にころがりこみ、一週間ほど経ってからイオ——閃がやっとのことで来生家を探しあて、そしてさらに一週間後、大変な苦労をしてユーマ——貢が来生家にたどりついた。ただ使鍵の導きだけを頼りに。
炎使ガディスが生きているなら、彼もまたいつの日かあきらを追って現れる。三人はそう信

じていたが、いくら日を重ねてもガディスが訪ねてくることはなかった。四年の間、一度も。

「拾うの拾わないのって、犬じゃないんだぜ」

「犬一匹養う程度ならともかく、人間ひとり養おうとするのはあまり一般的な人じゃないと思うんだよ」

「あんたが言ってると説得力があるんだかないんだか……」

「向こうの国で待っていてくれてるのかい？」

はぐらかそうとするソニーに、あくまでマイペースでマスターは問いを重ねた。ソニーの朱色の瞳に、一瞬だけひどく冷たい光が宿って消えた。

口をひらきかけて、彼は不意ににたりと笑った。たちの悪い笑い方で、首をねじまげ背後を見返る。

「よお。裏切者」

「……末期の夢じゃなかったんだな」

左肩を片手でおさえながら姿を見せたのは、確実に死ぬはずだった怪我人である。いくら来生芳秋が外科医術にすぐれた人物であろうとも……。

黄金の髪と琥珀の双眸を偽装しようともせず、炎使ガディスがよく知っているままの姿で。

「夢ならよかったってのか？　そいつは残念なことをしたなあ」

「……ディ」

光使ライアはそう呟いたきり、ソニーを見つめてしばらく沈黙した。
どこか不安定な表情が含まれている。告げるべき言葉を決めかねているような。椅子の背にそりかえってソニーは相手を観察する……冷静に。
「おい……睨みつけられてると気分が悪いぜ。なにか俺に恨みでもあんのか？」
「そんなつもりじゃない」
「そこで良い子になるからおまえは坊やなんだ、いつまでたってもさ……」
「成長に縁がないのはディのほうだろう」
「命の恩人に言える台詞かよ、それが？」
「俺がディの命を助けたことなら七回、ディが俺を助けるのは五回目だ。俺にはまだ貯金がある」
「嘘をつけ！　俺が六回、てめーが四回だろーがよっ！」
「都合よく記憶を改変しないでくれ。ディの悪い癖だ。いつもいつも」
「都合よく嘘つきになる野郎よりはマシじゃねーのか」
「嘘は方便だけど健忘症はただの迷惑だよ」
「嘘も立派に迷惑だっ！　つくづく社会の害毒だなあ、てめえって奴はっ！」
「ディは正義の味方らしいな」
ライアは微笑する。そう言われればガディスがムッとすることを知っているのだ。

何が嫌いといって、正義と英雄ほど嫌いなものはない。

「……元気そうでなによりだぜ」

思いきり嫌味にソニーは呟き、カウンターの内側で見物人と化しているマスターに目をやった。

「おっさん、こいつの性格に何か変な影響、与えちゃいないのかよ。昔に輪をかけてかわいくない奴になっていやがる」

「いや、普段から極道な子なんだが、おまえさんが相手だと可愛く見えるよ」

「あのな……」

「親父様……」

あまりといえばあまりのコメントに、ソニーもライアもまったく同様の反応しか返せなかった。二人の視線にはおかまいなしで、来生芳秋氏はのんびりと立ちあがる。

「店を頼めるかな？　私はそろそろあの悲惨な台所を片づけたくなってきたぞ」

「……ご指名なら」

ライアが頷く。――来生衛として。ここで席を外すことが養父の気遣いであるのはわかりきっている。

「本当だよ。おまえさんはもともとしっかりしているから安心だが、たまにはそれくらい可愛くなってくれるともっと安心する」

店と家を区切る扉に手をかけ、マスターはそんな言葉を残した。
「俺の迷惑はどうでもいいわけね」
頬杖をついてソニーがひとりごちる。扉が閉まるのを見送ってから、ライアは彼をふりむいた。
「俺が可愛かったらディは嬉しいか？」
「気味がわりーだけだ」
「だろうな」
「愚問だ」
明快な返答に、ライアはあっさり笑ってみせる。そして。
「ガディス」
その瞬間から何かが変化した。
ライアの声も、ガディスの態度も、それまでとさして違わぬようでありながら。
初めから、語るべきことは決まっていた。戯言で時を消費していただけだ。そんなごまかしにも限界がある。避けられない問いかけが待っている。
「あまり時間をかけてもいられない。端的に訊きたい」
「前置きのぶん、また余計な時間がかかってんじゃねえのか？」
ガディスがまぜかえす。正論だろう。ライアは静かに口をひらいた。

「おまえが来た理由は何だ？」
今になって、何のために。
無事に炯月界（けいげっかい）までたどりついていながら一度も姿を見せずにいたガディスが、アスヴァルとほぼ時を同じくして現れる——それは奇妙なことではないのか。
「俺の目的かい」
不敵な表情でガディスは肩をすくめた。首にかかる銀鎖を、指でじゃらりともてあそぶ。
「んなこと考えなくたってわかるだろうが」
銀鎖が無造作に引きぬかれたのは次の瞬間だった。光をはなつ鎖は彼の手中でみるみる変形し、新たな姿を得た。
炎使ガディスはくつろいだ姿勢さえ変えず、銀の弓に炎の矢をつがえてライアのことを眺めた。
ディレイ・ローザ。炎を司（つかさど）る使鍵。その戦闘形態が、今、ガディスの手におさめられている。美しい銀の弓として。
「こういうことだよな」
ガディスが言う。ライアは無言でディレイ・ローザの輝きを見つめていた。
銀弓につがえられた灼熱（しゃくねつ）の矢は、まっすぐに光使ライアの心臓をねらって——解放される時を待っているのである。

——画像が失われたのはその時だった。

「あああああ、何でっ!!」

水晶の壁面に拳をたたきつけて、あきらは悲鳴をあげた。今、まさに炎使ガディスが矢を射かけるところだったのに。

「お楽しみかい?」

かつん、と足音が背後で響いた。

勢いよくあきらが振り返る。鋭い目が彼の姿をとらえて止まる。

悠然と腕を組み、そんなあきらのようすを、葉月奏太は興味深げに眺めていた。

第二章　透視図

I

不思議な空気が葉月奏太を包んでいる。この状況を楽しんでいるようでもあり、憂いを含んでいるようでもある。十二歳の少年の姿をとりながら冷徹にさめきった瞳をしている——その二面性を象徴するように。

「私は狩人ではないよ」

壁に背をつけたまま動かずにいるあきらを見遣り、奏太はそんなことを言って微笑した。

「それでは、まるで追いつめられた兎だ。君には似合わない。月狼の君であればわかるだろう……ここは晶月界だ、私たちを妨げる者はどこにもいない。警戒など無用だと気づかないか？」

「……」

レアの名は月狼の別称。月狼に授けられた精神は——誇りと独立。

怯えは敗北。あきらは奏太を見据えながら、静かに立ちあがる。決して目をそらしてはいけ

ない……。

守ってくれる人たちは、今ここにはいない。それどころか彼らのすべてが危機に陥っていることを晶壁の像は告げる。絶望してはいけない。考えねばならないのは、せめて彼らの負担にならずに——戦いをつづけること。

自分には自分の役目があるはず。自分だけの戦いが。

「紳士的に言うよね……よく言えるよね……」

背筋をのばす。震えそうになる両手はわざと腰にあてる。気圧されてなんかやらない。

絶対に負けてやらない。

「礼神官アスヴァル」

あきらが呼びかける。

「確かにここは晶月の宮。妨げる者は立ち入るべくもない。そう知りながら炯月界に罠を残してくるあなたのやりかたは卑劣ではないのか？」

「……それは私にとって痛い言葉ではないな」

あきらの態度が微妙に変わったことに気づきつつ、少年はむしろ堂々としてそう答えた。

「汚れた者に咎めは心地良い……」

「アスヴァル、あなたは——」

「急くこともあるまい、メサイエ・エクサール・レア」

奏太は小さな肩をすくめるようにして、あきらに背を向け、ドームの片隅へと歩きはじめた。

「レア。君は真実を知るべきだ。君のお守り役がどんな拵え事を語ったか、興味はないが……エクサールともあろうものが記憶を閉ざされ虚言に惑わされては、その名も汚れよう」

「守護師団を誹謗するは、エクサールを貶めるも同じこと。わたしが心動かされると思うなら、それはあなたの増長というもの！」

毅然として言い放つエクサールを、奏太はちらりと見返る。

「頼もしいものだ」

ドームの一点――楕円を描く床の、一方の頂にあたる――に、いつしか壮麗たる造りの石座があらわれていた。透璃石を削り出した、王を迎えるがごとき席である。そこへ少年は身軽に腰をおろし、脚を組みあわせて、そしてあきらを見た。

「実に、頼もしいね……」

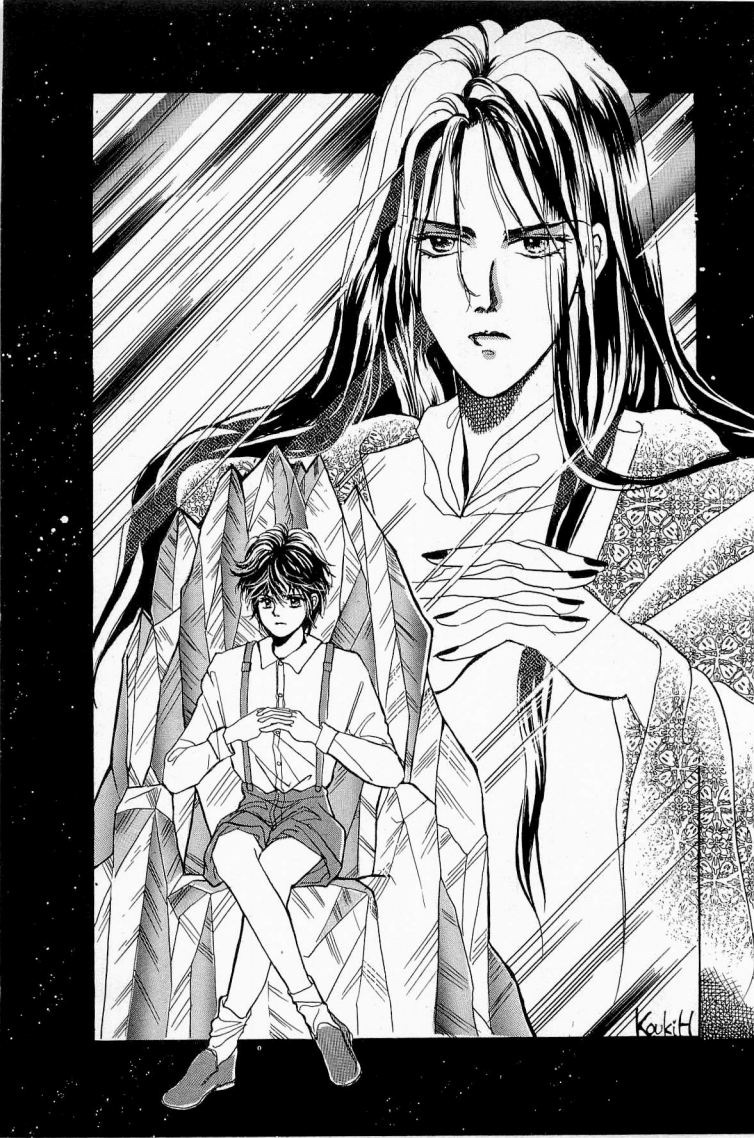
ひじをつく奏太の姿。はっとあきらは目を見開いた。

少年を静かに映す水晶の壁。映った影。

忠実な鏡像が奏太のしぐさを追う。だがそれと重なるように壁の内側でかすかにゆらめく、もうひとつの像がある。

ひどく不安定に、浮かんでは消えて。

黒髪の……青年。
身にまとうは、清めを意味する灰斎衣。
瞳を染める色は青？　いや、深い紫のようだ。闇に近い紫。
謎めいた表情で遠くを見つめている。静寂の似合う、端正な貌つきで。
自分にしか見えない像なのだろうか？　あきらは自問する。それはこの界境の塔が見せるささやかな悪戯。しかし誰を映して？
誰？
「……あ」
あきらの内の何者かが告げた。――彼こそが真なる礼神官アスヴァル。
琅月界にありし時の、偽りなき彼の本質。
知っている。よく憶えている。そう自覚すると同時に、ふと胸をよぎる感情。あきらは心の耳をすました。
――懐かしい……？
どうして？
「アスヴァル」
心の奥底が求めるままに任せ、あきらは口をひらく。
勝手に喋らせてみたかった。もうひとりの自分に。なにかが摑めるかもしれない。なにもわ


Kaoru

からないけれど。

「アスヴァル……ディシスは知っていたはず」

ディシスの名を出されて、唇を結んだ葉月奏太はその視線だけをあきらに向ける。

「ディシスはちゃんと知ってた」

あたたかい意識があきらの内で語る。かすかに響く。

知っていたわ、レア。

知っていたわ、私。

「神官とエクサールが出会うのは容易なこと。けれど愛しあうことは禁忌」

あたしも知ってたわ、ディシス。

ディシスは優しい人。優しくて儚くて、汚れた者をすら許すことも裁くこともできない。

「……禁忌。そう、罪深き行いだ」

あっさりと奏太は頷いた。水晶鏡の内に浮かぶアスヴァルの像もまた、同時に。

「それは何故か？　勢力の問題さ。力の均衡……すなわち権力者たちの保身術だ。王家、司政官、神殿、そして守護師団を擁するエクサールの乙女……純粋な『力』だけを問うならエクサールが極端に突出することは目に見えている。神殿はライエノーツに勢力を脅かされることを恐れ、司政官は神殿を警戒し、王はエクサールに実権を奪われはしないかと危惧した。愚者たちの疑心暗鬼が、戒律の名のもとにエクサールと神官のつながりを断つこととなった。――そ

れが君の言う禁忌の正体だ」

「……」

明晰にアスヴァルは説きあかしてみせる。

戒律に神意などありえない。そんな現実を。

「誤った戒律なら正すのがあなたの務めではないのか？　見ぬふりをするのがあなたの流儀か？」

「誤りなら正せようが、腐敗は救えまい」

「腐敗？」

「清く正しいものにしか興味がなかったとでもいうのかな、君は」

問い返したあきらの身を、奏太は冷ややかな目で貫いた。

「気づかずにいたはずはない。神殿にたちこめていた腐敗の空気を。仮にもエクサールであるなら、見逃しきれたはずはない。でなければ君を軽蔑することになるだろう」

あきらは沈黙した。奏太の目を避けようとは思わなかった。

央界神殿。美しい聖地。

そこに集う多くの人々……。

「堕落した神殿に、精老の声を聞く力などすでになかった。より高位の官職に執着するばかりの俗物が、もっともらしく儀式を弄んではその場しのぎの『奇跡』をエクサールに強要してい

ただけだ。

王も司政官もおのが身の無能を恥じもせず、政事が行き詰まろうとすれば二言目にはまた『奇跡』だ。選ばれた『至高の地』であれば当然の恵みとばかりに。

だがエクサールの恵みを濫用すれば、必ず琅月界そのものの因果力に限界が訪れる。初めからわかりきっていたことだ！　幾度、大神官たちに警告をかさねたか知れない……目前に滅びが迫っていると……早くて二世代後、遅くとも八世代後には、完全に崩壊すると！

二世代……たった二世代だ！　それを承知で神殿は事実を黙殺した！」

「黙殺じゃない！」

あきらはかぶりを振る。

「あれは努力……！　あの人たちは努力してたんじゃないか！　すぐには実を結ばない努力だったけど……無駄だったのかもしれないけど……どうすればいいのか考えようとしていた！　甘えも弱さもあったけど、それだけじゃないっ！」

「衆愚のもたらしたものは時間の浪費だよ。すべては結果でしか語れない。決断する能力が彼らにはなかったということだ」

「アスヴァルは急ぎすぎてる……自分ばかりが正義の主役になってる！」

「君のそんな潔癖さも我々にとっては障害となったよ、レア」

奏太は笑う。整いすぎた微笑には冷気がひそんでいる。

――アスヴァルは確かに犀利な男だ。その才気により独裁を望み、そのためにディシスを利用した。

あきらはそう聞いている。記憶はその核心に近づけば近づくほど不安定なものとなり、真っ白く欠落している。

――君の姉さんは、アスヴァルに殺された。

では何故ディシスはアスヴァルを愛していたのだろう？　何故？

「我々って言ったね……」

あきらは奏太の言葉をくりかえした。

「我々の障害……。誰のこと？　何が目的だった？」

「単純なことだ」

問われることを待っていたように、奏太は答える。

「琅月界が衰えたなら、新たな生気を注げばいい。幸い、琅月界と近接して、因果力の性質がほとんど一致する界がひとつあった。

因果力をとりこむことは琅月界に負担をかけるが……両者の因果力を全面的に交換してしまえば話は別だ。琅月界は若返るのさ。界の寿命をとりかえてしまえるのだからね」

「……そんなことをしたら……」
茫然として、あきらは呟いた。
「そんなことをしたら、相手の世界は――」
崩壊してしまう。無関係のはずの界がひとつ、身代わりとなって。
「そんなことのためにディシスを利用したのか、あなたは!?」
「利用などしていない。私たちは協力したんだ」
激しい声をぶつけたあきらに、奏太もまた臆することなく言いきった。あきらは奥歯を強くかみしめる。ここにいないディシスをどう語ろうと真実は闇の内にしか……。
「独善じゃないか……」
怒りとも口惜しさとも何ともつかない憤りが、わきあがってくる。
「正義どころか……アスヴァルの独善じゃないかっ」
「君の理屈こそ安易なヒロイズムさ。己を生み育んだ世界を愛さずに、何がエクサールか。何が神官か。君自身は琅月界が滅ぼうと生命を落とすこともなく、ライエノーツの保護を得つづけている。だからこそふりかざせる、ご立派な正義だ」
守られている立場だからこそ。
その指摘は、言葉の陥穽である。認めてしまいたくなる。だが論点は個人的な自分の事情よりももっと大きな――倫理であるはずだ。あきらは心にそう言い聞かせた。

人として、許せることと許せないことがある。それだけが重要なのだ。
あきらはそっと口をひらいた。そして言った。
「……ディシスにはできなかった……それが道理というもの」
「正しいな」
奏太は頷いた。
「その点では、君が正しいのだろう……」
計画は失敗した。心優しいディシスにできたことは、ただ、罪を一身に負い、ぼろぼろに荒廃した琅月界から自分の妹と、そしてアスヴァルを、炯月界へと送りこむことだけだった……。
皮肉にもアスヴァルが実行した計画によって、琅月界には計算よりもはるかに早く、虚無の大気が押し寄せることとなったのである。

II

「琅月界を離れる意思は、私にはなかった」
奏太はその瞳を伏せたまま、言葉を続けた。
「初めから我々は決めていた。万が一エールの操作が成功しなかった場合は、決してその咎を

逃れることなく我らの故郷と命運をともにする……。

だがその仮定が現実となったとき、ディシスは盟約を破って私ひとりを脱出させた」

彼女がどんな思いでそれを行ったのか、真実を知るすべはない。

「私はこの四年間、ずっと考えつづけてきた……。ディシスは私を生かすことによって、私に何を託したのか。私に課せられた役割とは何なのか」

「役割？」

アスヴァルの言葉にあきらは違和感をおぼえる。

ディシスは彼に何かを求めただろうか？　目的などあっただろうか？

もしも自分がディシスだったとしたら――。

「そして君を発見した。エクサール・レアが生きて炯月界にいると確認したとき、ようやく私にははっきりとわかったのさ」

奏太がゆっくりと面をあげた。

解放感に似た空気が、彼の内から湧出してくるようにあきらは思った。

有無を言わせぬ確信……彼に力を与える何らかの確信が、アスヴァルの心にはあるのだ。

「まだ何も終わっていない」

彼は呟く。

「レア。君の力さえあれば琅月界を救うことができる。君はそのためにここにいるんだ」

「――え？」

一瞬、何を言われたのかあきらにはわからなかった。

自分の力さえ――エクサールの力さえあれば、琅月界を救うことが……

救う……？

「！　あなたは……！」

愕然としてあきらは叫ぶ。ひらめきが告げた。彼はまだ何も捨てていない。

「まだ諦めていないのか!?　ディシスにそんな思いをさせておいて!?」

「違う。これはディシスの遺志だ。今度こそ失敗はしない。君は誇りたかい月狼のエクサールだ、己の使命を自覚すべきではないのか？」

「そんなの嘘っ!!　それはアスヴァルの勝手だっ!!　そんなことのためにディシスがアスヴァルを生かしてるなんて、ディシスを侮辱してる！　ディシスをけがしてるじゃないかっ!!」

「ではなぜ炯月界なのだ!?」

声の調子を高め、奏太が反問した。

「この宇宙に界は無数にある。なぜ君も私も炯月界へ送られた？」

「……どういうこと？」

いやな予感がする。あきらは身を硬くして立ち尽くした。

もしかして……。

「……もしかして、琅月界の身代わりになるのは」

琅月界と近接したうえエールの共通する、そんな好都合な世界は。

「そのとおり。琅月界を救えるほどのエールに満ちた世界は、炯月界以外にない」

「……」

だから、炯月界を犠牲にするしかないから、そのためにディシスは自分たちを炯月界へ送ったというのだろうか。

今一度、計画をやりなおすために？

だとすればアスヴァルは思い違いをしている。

「間違ってる。アスヴァルのほうが間違っている！　性質の近い世界でなければ無事にあなたを送りこめるか不安だったから！　だからディシスは炯月界を選んだんじゃないか！　せめて豊かな世界にたどりついてほしかったんじゃないか!!」

先走るあまりに彼は最も大切なことを見落としているのだ。

ディシスの願い。ディシスの心。

「あなたに生きてほしかったんでしょう!?」

胸が震えた。どうしたら伝えられるのか。こんなに熱く、真摯に、はっきりと、ディシスの心が自分にはわかるのに。

なのにディシスは今ここにはいない……！

「生きてほしくて選んだ！　そうでしょう!?」
「感傷だ」
「新しい世界で！　あなたに生きてほしくて！　それだけなのにっ!!」
「くだらない感傷だ！」
「アスヴァル!!」
壁に向けて声をはりあげるような空しさ。通じない。届きもしない。
奏太は立ちあがる。冷ややかに。
「ディシスは聡明な女性だ……」
「同じだよっ！　頭、良くたって！　悪くたって！　大切な人のことだったら誰だって！」
「君は冷酷だな」
一言、彼は断定した。あきらは目を瞠った。
「私はディシスを愛している。私の故郷を愛している。ところが君はどうだ……」
「……」
「まだ何も終わってはいない。我々は琅月界へ還りディシスを取り戻す……それをどうして君が拒む？　私たちは協力しあえるはずだ、レア。君が、君の生命を救った姉を、そして君を育んだ世界を、君を愛したものたちを、同じように愛せる人物であればね。
おそらく君はふりかえりたくないのだ。新しい、安穏とした世界に浸りきっているのさ。忘

れたほうが好都合——琅月界を滅ぼしたほうが、君にとっては好都合ということだ。私にはそうとしか見えないな」

「好都合なんてっ……そんな風になんて思ってない！」

声はどこかで引っ掛かる。

愛？　過去への愛……？

記憶とともに欠落したのは、アスヴァルが指摘するとおり、人として失ってはならない愛なのだろうか？

自分はディシスを愛していない？　わからない。わからない。遠すぎて。

——けれど。

瞳をひらき真実を見るがいい。

瞳をひらき真実を見るがいい。

心に命じられたまま、あきらは頭上の天を仰ぎ見た。

水晶塔の頂から丸天井ごしに見渡せる闇の空。

闇をうつす透明水晶。

瞳をひらき真実を見るがいい。

真実は、たえずすぐ近くにあるのに。

いくつもの世界が、ドームに映しだされ、浮かんでは消えてゆく。
目をこらせばいい。祈りをこめて見ればいい。信じて瞳をひらけばいい。
ここは界の狭間。あらゆる界の様子が見てとれる。
エクサールの乙女であれば。
ゆらりと影が動いた。歪みが生じた。
美しく澄んだドームを、暗灰色に染める濁りが……。
それは星雲のように、竜巻のように、海流のように、鈍く重く回転していた。秩序はなく形もなかった。ただ乱れた重力と原子が唸りながら回転しているのだった。高密度で、不安定な、質量のかたまりだった。
信じられぬほど、醜い渦であった。
「カオス状態……」
乾いた声で、あきらは独白していた。
原始の混沌。滅び、すら、過ぎて。
どろどろと流れるだけの暗い影。
すでにひとつの界として成立していない。

それが――〈月斎の地〉、清逸たる琅月界の、行きついた末路だった。

III

〈還らざる者〉――それが炎使ガディスの称号である。

異端であることがすなわち彼の価値となっている。彼はなにものにも縛られない。組織にも、理念にも、利害にも……ただひとり、彼が認めた主君たるエクサールの命をのぞいては。光あれば闇が寄り添うと同様、守護者の名には負の本質も隠されている。守護者がその本分を失い堕落した場合にたどりつく姿を、ひそかに暗示するものだという。

ガディスを例にとるなら、その暗示は〈反逆〉。

ユーマであれば〈侵略〉。

イオは〈暗殺〉。

そしてライアは〈背信〉――裏切者の暗示を秘めている。

「俺は暗示がどうとかって決まりごとは嫌いなんだ」

きりきりと弓弦を引きながら、ガディスが言った。

椅子にかけたまま不安定な姿勢でかまえたディレイ・ローザは、しかし狙いを一点に固定したきり微動だにしない。

「だからこいつは俺の真っ正直な気持ちってやつだよな。――てめえは裏切者だ」
ライアの瞳は至近距離の炎矢を見やり、そしてガディスへと移った。
平然とした態度と沈黙。まるで命の危機など感じていない。
ガディスの言葉の意味は、彼にもはっきりとわかっているはずだった。ともに一人のエクサールを主君と仰いだ者であるならば。
エクサール・ディシスを忘れ、恥知らずにもその妹であるレアを当然のように新たな主として認めた。彼の罪状は、その選択にいささかの躊躇も含まれていないことにある。
「それだけのために？」
ライアが確認した。
「他に何がある？」
ガディスが反問する。ライアはわずかに口許をほころばせ、ゆったりと両腕を組んだ。
「そこまで律義かな、おまえが」
「馬鹿にされるのは心外だぜ。てめえの悪い癖だ、世界中の人間を見下していやがる」
そしてガディスのもっとも嫌いなことは相手に舐められることなのだ。
「ならばその矢を放って確かめればいい」
不意にライアがそう促した。
「もしも俺がライエスとして堕落した者ならば、その矢はたやすく俺を殺すだろう。やってみ

るがいい。それで俺を殺せると信じているのなら」

弓を支えた腕はそのままに――ガディスは彼を見つめかえす。

「……詭弁かよ？」

「何故？」

惑わせる、琥珀。ガディスはかすかに舌打ちする。光使ライアが何を考えているのかなど、どうせ自分にはいつもわからない。しかしだ……。

自分の目的を考えれば、ここでライアという駒がひとつゲーム盤から退場するのは純粋に好都合である。風使イオと水使ユーマは二人して結界の餌食だ。あの連中はただ放っておけば自動的に消えてくれる。

簡単に王手、だ。

あとはエクサール・レアのほうをうまく処理することができれば……。

何も問題はない。面倒な役目はさっさと片づけるが勝ちである。本国で退屈している坊主とその腰巾着は、さぞかし喜ぶだろう。

――しかしそれだけだ。

「つまらねえんだよな……」

顔をしかめてガディスはそう吐き出す。

「嵌められたぜ。制裁って名目があればきれいに死ねるんじゃねえか、そっちは」

「返り討ちという名目で死にたかったのかな、そちらは」
　完全無欠のポーカーフェイスで、悪魔的な台詞をライアは口にする。歯軋りしたくなるほど核心をついているのだ、それが。
「やっぱり思いっきり詭弁を弄してんじゃねえか、てめえはっ!!」
「表現が違わないか？　ガディス。俺が利かせているのは単なるハッタリだよ」
「……おまえ、ここで殺しといたほうが世のため人のためって気がしてきたぜ」
「正義の味方には逆らえないな……」
「うるせえなっ!!」
　その手には乗るか。いまいましげにガディスは声をはりあげた。正義の二文字ほど憎らしいものもないが、相手の思惑どおりあっさり殺してやるなんて、この天邪鬼な自分にはとても我慢できない。
「ったく、因果な商売もあったもんだ。死にたいときに死ねもしない、そのくせ命は懸けろとさ……ふざけてやがる。なーにがライエノーツだっ」
「おまえなら、そんなものにも縛られずにいると思っていたんだ。俺たちは」
「冗談じゃねえ、俺はディスのライエスだぜ、馬鹿野郎。ディスの命令ぶっちぎるわけにいかねーだろ。俺の考えることなんざ、ディスはお見通しだ……」
　ディレイ・ローザが光を失い、炎の矢は姿を消した。荒っぽい彼の語調に、だがそれまでの

威勢の良さは欠けている。――エクサール・ディシスの名を契機として。

「そうか……」

ガディスのように直情的な――ある意味、もっとも守護者らしい――男であれば、主を失ったと認識するより、壮烈な殉死を選ぶのが、なりゆきとして自然である。

本来、エクサールを失うということはライエノーツそのものの死を意味する。とうに楽になっているはずの彼を縛るものは、もうひとりのエクサールの存在、などではあり得まい……。

ガディスを御するには、もう少しひねった材料を必要とする。光使ライアはそのことをよく知っていた。

ではディシスは彼に何を課したのか？

銀の鎖をじゃらりと指で鳴らし、ガディスが勢いよく椅子を立った。沈みそうになる空気をわざとはねのけるように。

「仕方ねえ、この場は預けてやる。知ってたか？　さっきからミンスとザードが耳元でぎゃあぎゃあ騒ぎやがって、気が散ってたまんねえんだよ、俺は」

「何？」

その時初めて、ライアの表情に驚愕の影が走った。

ユーマとイオに異変があったということだ。光の使鍵――ディレイ・ルナクではとらえきれない二人の動向を、なぜガディスが察知しうるのか。

一歩踏み出しかけて、ライアは左肩の傷を再び掌でおさえる。痛みがあるのは、体組織が生きているということでもある。完全に死ぬはずだった身体がこうして生きながらえている……それは何らかの力の作用を意味するのではないか？

使鍵を統轄するもの。ライエスに力を与える存在。――それはすなわち。

「……ガースか？」

短く、ライアが尋ねる。

ガディスは答えなかった。

沈黙は肯定。少なくとも、炎使ガディスの場合には。

「おまえがガースを持っているなら、これまでの説明はつく」

「解説なんかしてる暇はあんのか？」

皮肉っぽくガディスが言い、足元から黒の帽子を拾いあげる。

「先に行かせてもらうぜ、ライア。連中のまぬけ面を見てからでも遅くはねえや、今後の身のふりかたを検討するのはさ」

「ガディス！」

目深に帽子をおさえつけて踵を返そうとしたガディスに、ライアの鋭い声が飛んだ。面倒くさそうにガディスが見返る。

「ガディス、あの二人を傷つけるなら――おまえであっても」

「殺すか？」
にやりとガディスは笑った。
「それほど生易しくないさ」
それがライアの答えだった。
「そいつは楽しみだ」
くすくすと笑いながら、ガディスは店の扉をひらいて外へ出てゆく。次の瞬間、彼の影はそこから走り去っていた。
落ちつきというものを知らぬ奴だ……昔から。
「ディレイ・ルナク……」
なりをひそめていた光の使鍵を、ライアは呼び出す。
「炎の使鍵を追うんだ……できるな？」
いくら空白の時間があろうと、対をなした使鍵の存在を忘れることはない。力強い反応が、ディレイ・ルナクからは返ってくる。懐かしげな波動に、ライアはわずかに表情をやわらげた。その感覚は安堵に似ている。
だが……。
「ガースか……」
呟きが、彼の貌つきを軍師のそれに変えてしまう。策謀と知略の世界に彼を引き戻す。


Kouki H

二人のエクサールが誕生した以上、ガースもまた二本存在する。黄金の聖光石により造られた、全能の短刀が。

その一振りが礼神官アスヴァルの手にわたり、そして残された一振りが〝放浪者〟ガディスに託されているということは……。

炎使ガディスの殉死を禁じるためにディシスが課した条件があるとすれば、想像はつながる。ガースの警護、だ。ディシスの半身ともいうべきガースを預けられ、あの炎使にそれを放りだすことはできない……。

アスヴァルが握るのは、レアのガース。つまり彼はディシスに許しを得てガースを手にしているわけではない。おそらくガースのほうが、望まれぬ持ち主に対して反発をつづけているだろう。……となれば、まだ勝ち目はある。

「……切り札だ」

ゆっくりと、ライアは微笑を浮かべる。

裏切者の本領を発揮するのは、これからだ。

傷も痛みもすでに忘れた。ざわりと熱に似た空気が彼の身を包み、そして光使ライアは走りだした。

使鍵の導くままに。

第三章　メビウスの眩惑

I

にぶい地響きが、遠くから近くから、重なりあうように聞こえてくる。

滅びを告げる神の警鐘なら、おそらくあんな音をたてる。その響きさえ美しいと感じてしまう自分は、すでに正気を失っているのか、それとも幻を見ているのか。

天の中空に浮かぶ央界神殿は、あざやかな赤光を浴びて、壮烈なまでに美しくかがやいていた。

よりによって王立祭の当日だ。神殿を構成する人員のほとんどは、地上に降りたち、祭事の進行にあたっていたはずだ。……その隙をまんまと狙われるなど……ライエノーツの失態としか思えない。

礼神官アスヴァルの不穏な動向は、以前より気になってはいたのだ。どうして今日この事態を招くまで、何もできずに見過ごしてきてしまったのか。どれほど告発すべき材料をそろえようと、何も行動をおこせなかったなら無視したも同じことだ！

優しさなど何の役にもたたない。情けなど後悔しか導かない。

予測できたのだ……急進派のアスヴァルが、いずれ強引な手段に出ることは。

防げなかったのは、知っていたからだ。エクサール・ディシスの秘めていた、礼神官アスヴァルに対する心を。彼女が傷つくことを恐れてしまったからだ。

なんと愚かな迷いであっただろう……。

本当に大切なものが何であるのか、自分には初めからわかりきっていたのに。

逃げまどう人々の声から遠ざかり、風使イオは岩場を駆けのぼった。大気が異常な乱れ方をしている。息苦しい。圧迫感。

このままでは風が失われる。急がなければ。

足場は小刻みに揺らぎつづけていた。もろくなった岩盤が崩れる。歯をくいしばり、突き出した岩に指をかけ、全身に力をこめて、イオは丘の頂をめざした。一歩ごとに汗が流れ、体を支える指先からは血がにじんだ。

苦しいのは、空気が減っているからだろう。

界の裂け目が、すぐ近くに見える。恐怖はなかった。それよりも、今は。

なによりも、今は——レア。彼女のことだけだ。

「ザード！」

風の妨げられない、丘の頂上までたどりつき、イオは叫んだ。

「ザード、神殿へ！」

天に浮在する神殿までは、特殊な力を用いなければ、行き着くことができない。高位の神官であれば自在に転移もこなすが……ライエスである風使イオに許されるのは、〈光路〉を使った方法だけだった。

ディレイ・ザードの声を神殿に据えられた円鏡が聞きとどけ、イオの立つ位置まで光の道をのばして中空へと導き寄せる。荒い呼吸をととのえようとしながら、イオは光の流れに身を委ねた。

がくん、という衝撃が彼を襲ったのは、そのわずか数瞬後だった。

神殿の床に、イオは不意に投げ出された。不自然なタイミングで光路が断たれたことはわかった。

一歩誤ったら、宙の高みから地表まで落下していたところだ。

「……ザード？」

身を起こしながら、彼はそっと呼びかける。不気味な静寂が、そこには残った。

ディレイ・ザードからの応えはない。

愕然とする思いで、風使イオは立ちあがる。使鍵が無力化したというのか？

ライエスの力が失われるということは……エクサールの不在を意味するのではないのか？

そんなことがあってなるものか……！

イオは周囲に目を走らせた。
ここは神殿の西極、円鏡の間。
祭壇が近い。ガースは守られているのか。
透青石の柱が大きく揺らぐ。何度も何度も。
イオは身をひるがえし、祭壇をめざした。使鍵が沈黙したとなると、自分より遅れたはずの水使ユーマは、おそらく神殿まで戻れずにいる。
エクサール・レアと彼女のガースを守るべきライエスは、この自分ひとりきりだ。
それにしても、この静けさは何事なのか……。神官たちはいったいどこへ消えたのか。己の足音と息遣いだけが回廊にこだまする。他者の気配というものがまるで失せている。
「……逃げたのか？」
独白は、ひどくこっけいなものに思えた。
逃げる？　どこにそんな都合のよい場所がある？
二本の円柱の間を走りぬけ、イオはそこで足を止めた。
巨大な評議場にそびえたつ漆黒の祭壇が、まず目に入った。その最上部に据えられているはずの短刀――ガースは、忽然と姿を消していた。二本とも、である。
冷気が背後に這い寄ってくるのを、イオは自覚する。
晶月の宮へ去ったきりアスヴァルの所在は知れず、エクサールのガースは消え、ディレイ・

ザードは交信を拒む。
いまだこの自分にとるべき策が残されているかと問えば、否としか言えないではないか。
「か……風使っ」
うわずった声が祭壇の後ろ側から聞こえた。鋭い表情でイオが振り返る。
「風使イオかっ……た、助けてくれっ」
祭壇のかげからまろびでてきたのは、一人の老いぼれた神官であった。
かっ、とイオの瞳の内に稲妻がひらめいたように見えた。
「に、逃げ遅れてしまったのだ、わしはもうどうしていいかわからん、いったいこの世はどうなってしまったのだっ」
すがるように老人はにじりよってくる。階位にもついていない、下級の神官だ。大股にイオは老人へと近づき、にわかにその胸ぐらをつかんで引きあげた。
「なぜ神官が神殿を離れたのだ!?」
「ひいいっ」
イオの言葉に明確な怒りを感じとり、老人は呻いた。
「なぜ神官ともあろうものがっ……!」
「そのようなこと、わしに言われたって困る！　大神官の定めなされたことだっ！　それよりおのれらこそどういうわけなのだ、エクサールの監視はおのれらの役目ではなかったのかあ

っ」

「……監視ではない！」

噛みしめた歯の間から、イオはおしころした声を吐き出す。

ライエノーツの不備は痛いほどわかりきっている。

「ではエクサール・ディシスと礼神官アスヴァルが共謀していたのは、事実なのだな？」

「そんな噂は耳にしておるが、わしにはわからんっ。わしは本当に何も知らんのだっ！」

老人は悲鳴をあげた。もとからさえない風貌が、この瞬間だけで一気に老けこんだようだ。なんの情報も得られそうにない、落ちこぼれの小物だ。イオは悲痛な確信をつよめながら、ゆっくりと老人からその手を放した。

アスヴァルの行方はつかめまい……永久に。

あの才気走った礼神官とエクサール・ディシスが力をあわせれば、彼ら二人、どこへでも逃げられる。この美しき琅月界を捨てて。

故郷を滅びに追いやっておきながら……！

「……あの方は」

老人を見下し、イオは乾いた声で問いかけた。

「レア様はどちらに？」

「レ、レア様なら、先刻、光使ライアがお連れして……」

「ライアが!?」

予期せぬ名が、イオの呼吸を止めた。

「ライアが何故!?」

ディシスを連れていくならわかる。光使ライアが、なぜ主君でもないエクサール・レアを連れ去らねばならないのか。例によっての独断専行か？　だがそれにも限度というものがある。レアのために動いているときではあるまい、彼は！

「それは……それは、真実、レア様なのか」

「いくらなんでも、レア様とディシス様を見誤ることはなかろう！　とにかくわしはそれしか知らぬ！　た、頼む、わしを安全な所まで逃がしてくれいっ」

双生児のエクサール、月華と月狼。たしかにその容姿は完全に重なる。

だがあまりにもはっきりとわかれた個性。彼女たちが姉妹であることを忘れさせるほどに。間違えようがない……。では何故？

何を考えているのか、ライアは!?

ごおん、と天空が鳴った。小刻みに震動が壁をつたわる。老神官がうろたえてじたばたと床を這いまわった。――もう駄目だろう。

終末の時は目の前までたどりつき、運命の扉をくりかえし叩いている。

老神官には気の毒だが、安全な所などイオは知らない。

「私はライアを捜す。貴様は自力でなんとか自分の身を守ることだ」
「そ、そんなっ」
「……残念だが」
それきりイオは老神官を見捨て、神殿の深部にむけて走りだした。
この神殿から去るすべは、自分にはない。
ディレイ・ザードを失ったこの身で、エクサール・レアを守れるとも、すでに思わない。
ただ、走らずにいられなかった。追わずにいられなかったのだ。祭衣をなびかせ、金褐色の髪をひるがえし、風使イオはただひとつの願いにつき動かされて、走りつづけていた。
エクサール・レアよ。その姿を我が目に、今。
虚無の暗黒がすべてを呑みこんでしまう前に、ただ一度でいい。
こんな無力な、こんな残酷な別れが最後なら、これまでの生に一片の意味もない……！

II

「イ、オ……イオ!!」
耳元で叫ばれて、はっと風使イオはその双眸をひらいた。
間近に貢の——いや違う、水使ユーマだ——アクアマリンの瞳が見えた。のぞきこむ表情

は、やや気遣わしげだ。予想外に若いその姿に、イオはかすかな違和感を覚える。
「ああ……」
吐息には複雑な響きが含まれた。記憶の混乱が起こっていたようだ。
遠い過去の夢だ。
今の自分が思いわずらうような事柄ではないはず……。
「大丈夫か？」
ユーマが問う。
じりじりと神経がその働きをとりもどす。上下左右の見極めがつかないのは、あらゆる方角が灰白色の壁に閉じられているためだった。
痺れののこる指で邪魔な髪をかきあげ、イオはその上体を起こした。見たくもない夢を見てしまった。あれほどの絶望は、もう二度とくりかえすまい。レアを失ったと確信したあの瞬間、自分はすでに一度、命を落としたも同じなのだ。
「大丈夫だ……」
「嘘ついてないだろうな？」
ユーマが重ねてそんなことを尋ねる。信用などあったものではない。
「結界にはまった張本人のほうが心配されて然るべきだろう……」
「言うなよ、どうせぼくがヤケになってばかを見たんだからさ！　でも一蓮托生パターンに持

ちこんじゃったのはおまえの責任なんだから、反省してくれよっ！　無茶な真似してさっ！　もし結界に入りそこねて次元のひずみにでも落っこってたらどうする気だったのか知りたいよ、まったく……」

「そういうことにはならないつもりでやったから、事故のことは考えていない」

「あたりまえみたいに言うなってば！　気合い一発で世間わたっていくにも限度ってもんがあるんだよ、おまえみたいな発想ってときどき危険だよっ。基本的には尊敬するけど！　――泣いてたのか？」

ふとイオの額に片手をのばし、ユーマが急に話をねじまげた。不意をつかれたようにイオは口をつぐみ、かぶりを振って彼の手を払った。

「気にしなくていい……」

「昔のことだろ？」

ユーマにはすべてお見通しだ。よほど自分の反応はワンパターンであるらしい、とイオは自嘲ぎみに考える。

「いいんだ、今は関係ない」

そう、もはや悲しむ時ではない。この炯月界においてメサイエ・エクサール・レアとの再会が果たされた以上。

永遠の忠誠と永遠の愛を彼女に誓う。二度と手放しはしない。

そして彼女のためにも、今はユーマとともにこの結界から――灰白色一色に占められた狭苦しい空間から――脱出することだけを、考えねばならない。

アスヴァルの残した罠は、ごく一部、最上級の神官しか知らぬ秘技である。

ライエスの能力を抑えるためにつくられた結界……いや、正確にいうなら、ライエスを滅ぼすための結界、だ。

「この秘術については、昔、神殿で聞いたことがある……。理論的には、この内部は真空状態と同じだ。あらゆる自然現象から隔絶されている。だから、使鍵が働かない」

「真空？　真空にしちゃ快適な条件だね」

悪い冗談だよ、とユーマはひとりごちる。

呼吸はできる。生命活動は維持される。それでいて守護者の能力を完全に封じている。……なにもできぬまま飢え渇いて死ねとでもいうのか。

手首に装着された腕輪――ディレイ・ミンスの化身は、光を失ったきり沈黙している。

「聖光石の名前が泣くんじゃないかな、こんなんじゃ……」

「アスヴァルは有能すぎる」

呟くようにイオが言った。

「礼神官にしては知識が深すぎる……。切れ者であることはわかっていたが、こんな結界を残せるほどの力があって、なおかつガースを握っているなら……奴はすでに無敵だ」

「だから何だって？　もうかないっこないから諦めようなんて言い出したいわけじゃないんだろ？」

自然、ユーマの言葉には熱気と戸惑いが含まれた。降伏はイオにこそ似合わない。

「知らなかったのか？　無敵なのは、ガースを手にしたアスヴァルだけではないさ……」

「え？」

イオの態度はまるで謎かけである。

淡々とした口調のまま、イオが続けた。

「真の強さを有するものは、エクサールに忠誠を誓い、信頼と盟約によって結ばれたライエノーツだ」

「……」

ユーマは声を失う。それは当然といえば当然の解答ではあったのだが。

「精老がその名においてライアを首席と認めたならば、俺たちはいかなる境地にあってもそれを信じなければならない。たとえ困難なことであっても、たとえライア自身に酷なことであっても、たとえ絶望的な局面におちいったとしても、首席に立つ者は信じられつづけねばならない。なぜならそのことがライエノーツの力の根源であるからだ」

「……」

「変わったのはライアだけではない。俺もおまえも、昔とは違う自分を――炯月界における自

分を――無意識に受けいれて、順応しようとしている。だからといってライエノーツの本質を見失ってしまったら、俺たちは最後だ。俺はそう思う……」

過剰な期待、ではないのだ。ライアに向けられたものは。

疑われることなく、同情をうけることもなく、ライエノーツを率いる存在であるべき者。それがライアだ。

エクサール・ディシスが失われたことばかりに拘泥している時ではない。目前にたちはだかる相手が強敵であればあるほど、ライエノーツに必要なものはただひとつ――真実の結束だ。

「……おまえらしいよ」

ユーマが小さく息をついて、言った。

「だからおまえは……おまえは、生まれついての守護者だっていうんだよ。また尊敬したくなっちゃったじゃないか、くやしいなあっ」

「……おまえには、馬鹿にされるかと思ったが」

「あのね……ぼくのこと、ただ怒鳴ってるだけのうるさい奴だとか思ってたりしないか？」

「いや、違う。つまり……まだ本題を言っていない」

器用な話運びほど、イオと無縁なものはない。慣れていたつもりながら、だったら要するに何なんだ、とユーマは目で促さざるを得ない。

「ザードを置いてきた」

ぽつんとイオが言った。
「……は？」
「指輪を外に残してきた。この結界へとびこむ前に」
ユーマは耳を疑った。冗談ではすまない。
「使鍵と離れたっていうのか!?」
「そのとおりだ」
「落ちついて言わないでくれっ！　自殺行為じゃないかっ!!」
「ザードとミンスは呼びあう。ライアがそれを発見して、結界の外から誘導してくれれば、タイミングを合わせて脱出することができるはずだ」
経文でも唱えるような調子で、無謀このうえないプランをイオは語る。
「おまえの発想って、やっぱり……」
唖然としたきり、ユーマはしばらく石像と化してしまった。
命運のすべてをライアに賭けたというわけだ。……それはいい。これまでの話の展開で、イオがその決断にたどりつく理由は明らかになっている。
しかし、だ。
「無茶苦茶だよっ！　だったらイオが結界にとびこむことはないんじゃないか!?」
「水がない」

身をのりだしたユーマの瞳を見つめかえし、イオは短く答える。
「おまえひとり閉じこめても、水の供給源がない」
「……何の話だよ？」
冷えた感覚を胸に抱きながら、ユーマは尋ねた。
純粋すぎるこの盟友は、その純粋さゆえに危険なのだ。
「……時が来れば言う」
「本当だな？」
念を押すことしか、今はできない。言わないと決めた以上、イオは頑固だ。
「ひとりだけで捨て身にならないで、少しはぼくにも仕事を残すんだぞ！　なんたってぼくなんか、結界にはまった張本人なんだからさ！」
少々投げやりにユーマが言うと、イオはかすかにその目を見開き、そして微笑のかけらを垣間見せた。
「気に病まれるのは、心外だ。俺は、おまえの叱り声を聞かないと、生きている甲斐がない。こんな所でおまえを失うわけにはいかなかった。それだけの成り行きだ」
「……そんな甘いこと言われてぼくがあっさり負けると思ったら大間違いだからな」
ユーマは意地を張るが、本気ではない。
「年上の言葉にはしたがうべきだ」

「よく言うよ！　なんだかばかばかしくなってきたぞっ！　年上の意見をとりいれて焦らず落ちついて一蓮托生状態だけどライアの出方次第だけど運を天にまかせて希望を捨てずに待ちの姿勢に入ってやるからっ、ぼくの精神統一を乱すような言動はひかえてくれよ、いいねっ!?」

一気にまくしたてたと思ったら、ユーマはすとんと灰色の地面に横倒しになって、イオに背中を向けてしまった。

ただ待つという作業も、実はたいへんな苦痛をともなう。ユーマが覚悟を決めたなら、妨げずにおくのがイオの義務である。イオは黙って彼の背を見遣り、そして自分は片膝を胸元に引き寄せて静かに座しつづけた。

迷いは、もういい……。

早く楽になりたい。すべての戦いを終え、あらゆる疑いを忘れ、彼女と、父と、兄弟と、優しい日々をずっと永遠に……。

四年前、深い傷を悟られぬよう、怪しまれぬよう、息を殺して人ごみをさまよい歩いていた自分は——まるで野良犬以下の存在だった。

痛みも飢えも、真の喪失感の前には何の意味ももたない。そんなことも、このとき初めて知った。絶望だけでは死ねないことも、人の目を拒んで生きるのが案外簡単であることも。

前触れもなく自分をとりまく世界が変換し、約九年分の肉体年齢低下にも順応をせまられ、

誰ひとり知る者のない街に放りだされて――それでも、狂いもせずに生きていられる。
それは、己の強靭さを物語るものでは、決してあり得ない。〝生き恥〟――そんな言葉が、もっとも相応しかった。あの時の自分には。
死ねなかったのではない。
死ななかったのだ。自分は。
因果力に満ちたこの世界で、ディレイ・ザードは見事にその機能を回復していた。使鍵とともにある安心感が、自分の生き方に作用しなかったとは思えない。希望も、目的も、意志もないまま、ただ漫然と生きて。
あの時、ディレイ・ザードに呼びかけるかすかな波動をとらえるまで。
それはごく微弱な声。
同胞よ。君を待つものはここに在る。
友よ。流離える君を迎えよう……。

扉がひらかれた瞬間のことを、イオは忘れない。
『イオ……』
変わりはてた姿にもかかわらず、彼は一目で、そう名前を呼んだ。
この自分の名を。

もう二度と呼ばれることなく消え去っていたかも知れぬ、その名前を。
彼の姿もまた、時間の逆流によって若返り、そのときおそらく十五歳程度の容貌と化していただろう。だがそんなことは関係がなかった。彼はあくまで彼としてそこに存在した。
すべてを見透かすような、琥珀の瞳。
何も失われてはいなかった。ライエノーツを掌握すべき、彼の本質も。
イオの衣服がどれほど汚れ、破損していようと、その身が裂くような傷に覆われていようと、彼は何も言わなかった。何も問わなかった。
わずかに痛ましげな表情を浮かべ、だが微笑して、彼はこう告げたのだ。
『……おかえり……』
それが光使ライアという少年について、イオが抱いている最初の記憶だった。

「――――!?」
どれほどの時間が過ぎたのか知れない。不意にユーマが弾かれたように体をおこした。
「……何だって？」
独白には驚愕の念がひそんだ。イオが視線だけで彼に問いかけた。何事が起きつつあるのか。
「ミンスが反応している。そんな力、残っていないはずなのに……」


Kouki H

眉をひそめてユーマが呟く。右手首の腕輪にぼんやりと光が宿っているのだ。
不規則に、それは明滅しているように見えた。涸れた力を無理やりひきずり出され、苦しんでいる。イオにもユーマにも、使鍵をそのように——ある意味、暴力的に——めざめさせる能力はない。
外部から、なにものかがディレイ・ミンスを刺激しているのだ。
はっ、とイオが上方を仰いだ。
これはガースの影響ではないのか。
「ガースが、近くに……」
「え!?」
ユーマが問い返したときだった。イオの見つめる灰白色の天井のあたりから、いやに明るい笑い声が降ってきたのは。
「なーんだ、おまえら、恥っずかしいなあ。いい眺めだぜ、よく見えるわ、おまえらの相変わらずまぬけな面がさ」
歪んで反響するその声に、イオとユーマは思わず同時に目を見合わせていた。
炎使ガディス、である。

III

自称ソニー・W・エクセル――炎使ガディスは、南小学校の校庭に立っていた。
人気のたえた地味なグラウンドに、彼の姿がひときわ派手である。遅れてたどりついた光使ライアが彼の背を視界にとらえるのに、時間はまったくかからなかった。
ちっぽけな砂場の前で、行儀悪くジーンズのポケットに両手を突っこみ、ガディスはくすくすと笑っている。楽しくて仕方がないようだった。
「喜劇をとおりこしてシュールだ」
肩ごしにライアをふりかえり、そんなことを言う。
「同窓会にゃ素晴らしい舞台設定だぜ、おい」
「懐かしくてはしゃぐ気持ちはわかるが、馬鹿笑いはやめてくれ、ディ」
「誰がはしゃいでんだっ。目がわりーんじゃねえのか、おまえ。俺はなァ、虫酸が走ってんだよ、思いっきり！　笑わずにいらんないほどうんざりしてんのさ、キミもワタシも昔のお仲間、だから助けあいましょベタベタって強制的なおまえらの考え方にだ！」
歯を剝いてガディスが荒々しい声を吐き出した。単なる虚勢ではない。
一歩先に足をのばせば、踏みこむことができる――何の変哲もない砂場。だがそこに巧妙に

張りめぐらされた結界の罠を、炎使ガディスの目は見抜いている。偽装された空間の内側に閉じこめられた二人の姿も。

炎使としての能力だけでは、感知しきれない域の幻。ガディスにそれを見せているものは、彼がひそかに携えた黄金の短刀であろう。

ガディス自身は言葉を用いて誘うことなどしなかったが、ディレイ・ローザのほうは雄弁だった。対をなす使鍵同士の交流は、声で語りあう以上に直截的だ。ディレイ・ルナクヘディレイ・ローザが感覚の架け橋をつなぎ、ライアの〝瞳〟にガディスのとらえる像を送りこんできたのだ。

イオとユーマの姿を。

同時に、ガディスの抱える苛立ちの気分も、その伝達には含まれていた。彼は憤っている。それもずいぶんと、本気で。

「おい、俺はなァ、はっきり言っておまえらなんざと金輪際、顔を合わせるつもりはなかったんだが、そりゃおまえらがどうなろうと俺にはどうでもよかったからさ！　けど気が変わったぜ！　腹が立つぜ、俺は！　守護者が二人もそろっといてお兄様の迎えを待ちわびてるってのは、まぬけを超越して、見るに耐えねえ。おまえら全員、恥を知らねえ。醜悪すぎて……どうでもいいなんざ言ってらんなくなっちまったぜ！」

「ガディス、おまえが傍観者であるなら口出しは無用だ。おまえが当事者でありたいと望むな

ら、おまえのとらえる一面のみで状況を語るのはよせ」

冷ややかに、ライアが告げた。

きっ、と鋭い表情で、ガディスは彼を見返す。

「理屈じゃねえんだよっ！　わかってんのか、ライア……こいつらはエクサール・レアをてめえに押しつけただけじゃ足らなくて、自分たちのケジメもつけられねえまんまで兄上の助けをのうのうと待ってやがる！　てめえは筋金入りの根性悪だが、こいつらはそれに輪をかけて甘えくさった腑抜け野郎どもだっ!!」

ヴァーミリオンの瞳が、灼熱の怒りに輝いている。これまでのガディスとは何かが――感情の質が、違っているようだった。ライアはそれを見つめ、だが沈黙を保った。

無関心とルーズな態度は、炎使ガディスらしいと言えば言えるが、今までのそれはどこか不自然なのだ……何かを隠しているために。

「もうやめちまえ、ライア。この炯月界、どこに行ったってたいして変わりゃしねえが、俺の言うとおりにすりゃここの三倍くらいは面白い所に連れてってやれるぜ」

「黙って聞いてたら勝手なことを次から次へとよく言えるもんだよ、まったく！」

真っ先に反発したのはユーマのほうだった。姿も見せぬまま罵詈雑言ばかりを降らされては、こちらの立場というものがない。

「ガディス！　ぼくの言葉がそっちには聞こえてんだろうね！　確かに結界にはまったのはぼくのミスだ、そのことについてどう言われたってそれは仕方ないさ！　だけどイオとライアを侮辱する権利は、おまえにはない！　ライエスとしての務めを捨てたおまえに、ライエノーツの矜持を語る資格はないんじゃないのか!?」

「俺はなんにも捨てちゃいないぜ、ここにいる坊やとは違ってさ」

凄みのある声が、灰色の壁ごしに返ってくる。

「節操ってもんがあるんだよ、俺には！」

「ディシスの守護者なら、レアのことなんかどうでもいいってわけか!?　そんなのが、今までまるっきり連絡もとらずにいた理由になると思ってるのか!?　ライエスってのは、エクサールを守る者のことをいうんだ。ディシスもレアも関係ない、今のエクサールはあきらだ。あきらのための戦いを捨てた以上、おまえはライエスなんかじゃない、ただの亡霊だよ！」

「その台詞、エクサール・レアがいなくなっても言えるのか、おまえら」

低く、ガディスが問いかける。

「あきらがいればね」

息を殺すようにして、ユーマが答えた。イオが無言で、彼の横顔に目をやった。

イオの意向をたしかめることなく、独断で話を進めている自分を、ユーマは自覚している。だが……いちいち気にかけていたら、ガディスとの会話などできたものではない。

「……ほほう、そりゃおもしれえや」
かすかに、ガディスが笑ったようだった。
愚弄した響きがある。ユーマが唇を噛み、さらに口をひらこうとした時だった。ガディスが言った。
「教えてやれよ、ライア。こいつらにさ。おまえのせいでエクサール・レアならとっくの昔にアスヴァルにさらわれちまったってことを」
「!?」
とっさに何も言えぬまま、血の気がひくのをユーマは感じた。
不意に、力強く右の肩をつかんだ手があった。
イオの掌だ。
めまいに近い感覚から、ユーマは現実に引き戻される。イオは何も言わず、静かに上方を見つめたきり表情を変えもせず、ユーマの隣に立っている。
ただ、肩に伝わる力は尋常な強さを超えていた。その痛みを避けようとは、ユーマは考えなかった。
「……ライア」
イオが、その名を呼ぶ。
「俺の姿が見えているか?」

繊細な彼の美貌は、そのとき、決然とした力をそなえていた。澄んでいながら硬質な、金剛石の化身のように。

「ああ」

ライアからは、短い返事があった。

「よく見えている」

「……ならば、頼みたいことがある」

「何なりと」

「結界の外に、ディレイ・ザードが残されている。ここの景色を、ザードにも伝えてやってほしい。それでおそらくディレイ・ミンスを導くことができる……」

「使鍵を離れたのか？」

ライアの反応も、ユーマと同じである。使鍵を手放すなど、ライエスとしてあってはならないことだ。だが何より、風使イオがどれほど自分の使鍵を愛しているか——そのことをライアは知っている。

しばしの沈黙があり、やがてライアが言った。

「わかった。少し待ってくれ」

その声を聞き、イオは視線を降下させた。どこか遠くを——別の世界を見ているような瞳が、ユーマを不安にさせた。

砂場の周囲は、狂い咲いたあげくに散乱した桜の花弁で埋まっている。アスヴァルが遊び半分で成長させた植物たちは、今やすっかり枯れはててしまった。自然の摂理にさからえば反動が来るのは必定だ。

その桜の絨毯から、ライアが指輪を拾いあげる。光なき銀の指輪を。

「忠告を聞く気はまるっきりないってわけだな」

いまいましげにガディスが呟いた。

「カッコつけて良い子になるなよ、つまらねえだけだぜ。無理したって結局ボロが出るんだ。おまえがディシス以外のエクサールのために、その力、使いきれるはずがないのさ。あんな失敗してアスヴァルに出し抜かれんのも、そのせいだろうが」

「そうかな？」

ライアの返事には真剣味というものが足りない。

「おい、こっちを向け、俺を見ろ、ちゃんと人の話を聞けっ!!」

癇癪をおこしてガディスが怒鳴りつけた。

琥珀の瞳が、彼を見返す。

「そんな指輪、捨てちまえ！　レアのことなんざ忘れちまえ！　アスヴァルの始末ならこっちでつけてやる。俺と来い！」

「……」

ガディスがここへ来た目的を、ライアはまだ聞いていない。

「……おまえは、俺を殺しにきたはずだったが？」

冷静に、ライアが尋ねる。

「やめた。気が変わった。面白くねえからな。実はこいつらがもう少しマシな連中だったら、紳士的なお話くらいしてみようかって気にもなってたんだぜ。がっかりだ」

「紳士的に――何を？　誰がアスヴァルの始末をつけてくれるんだって？」

「……むやみやたらには言えねえ。義理ってもんがある」

「義理？　ソニー・W・エクセルの義理かい？」

ガディスは腹立たしく舌打ちする。

「ディ」

ふと、ライアの口調が変わった。

あしらうのではなく。

「ちょっとした、例え話をしよう……」

底の見えない態度だった。一瞬、ガディスが威圧されたほど。

「我々の守るべきエクサールは、双子だ。同じ姿、同じ能力、同じ司杖……。二人を見分けるのに、我々は彼女たちの人格を基準としていた。では、仮に、その人格が白紙と化したならど

うなる？」
「……何？」
「それが例え話さ。我々はどうやって、彼女を見分ければいい？」
「……」
意図をつかみそこね、ガディスはただライアを見つめた。
何を言おうとしている？
ディシスとレアを、彼女たちの個性以外で見分けるなど不可能である。
不可能。不可能であるなら……？
「そして彼女は記憶を失っているのさ」
ライアがそうつけ加えた。
口をひらきかけたガディスが、呼吸を失った。愕然（がくぜん）と。
「……この、悪党め……」
「俺は何も言っていない。たしかめてみたらどうだ？　ガディス」
「……んなこと言ったって、おまえ……彼女はアスヴァルごと晶月界（しょうげつかい）……」
「ガースがある」
あっさりとライアが言う。
「おまえの持っているガースと、俺たち四人の力が」

「……信じねえぞ、俺は」
唸るように、ガディスは声を押しだした。
「俺は信じねえぞ！　てめえは昔っから大嘘つきの性悪野郎だからな！　あの女、どっから見たって正真正銘エクサール・レアだ、それ以外の何だってんだっ!?」
「おまえがそう信じるのなら、それはおまえの自由さ」
「そういう態度がいちばん卑怯だ、わかってんだろ!?」
「俺は可能性と仮定の話をしただけだ」
鉄壁のポーカーフェイスは、まったく崩れそうになかった。ガディスは片足の踵で地面を蹴りつけた。なんてことを言いだすのか、この〝裏切者〟は！
「……海の向こうの言葉じゃ、ライアってのは『嘘つき』って意味なんだよな」
「海の向こうに落ちるとは運がなかったんだな」
「おかげさまでソニー・W・エクセルさ。んなこたどうでもいい。……たしかめろっていうんだな、この俺に」
声に力をこめ、ガディスが言った。
「自分の目で見て、自分の悔いない道をとればいいということさ」
ライアが答えた。ひそやかな微笑とともに。
そしてライアは、再び意識を切り替える。それは仮面をすりかえる作業に似ている。

彼が守護者ライアである以上――。
「イオ……」
呼びかける声に含まれた響きを、聞きとる者はない。あってはならない。
裏切りでも。罪でも。エクサールを守る、ライエノーツの首席に立つ守護者はひとりしかいないのだから。
「待たせてすまなかった。今、ザードに像を伝える。……導けるか？」
「けどミンスのほうは死にかけてるみたいだぜ」
横からガディスが口を出した。
「息もたえだえって感じじゃねえか。今さら何したって無駄じゃないか？」
「水を断たれたからだ……」
イオの声が返ってきた。落ちついた調子で。
「今、回復する」

その瞬間、驚愕以外の反応を、ユーマは選べなかった。
「おまえっ……!?」
制止できなかった。ユーマの右手首――銀の腕輪をイオが無造作につかみ、そして。
鋭利な装飾がきらめいた。ざくり、といやな音とともに。溢れだす鮮血の色をユーマは見

た。

ユーマの腕輪を用いて、イオは自分の手首を深く傷つけたのである。

「何てことっ……こ、こんなことされてっ」

掌で流れる血を受けとめ、震える声でユーマは叫ぶ。

「こんなことされてぼくが喜ぶとでもっ……」

だがそれによってディレイ・ミンスは生気をとりもどしている。血液とて立派な流動体——水だ。理屈と現実はユーマにもわかる。

理屈なら。

「おまえのこと信じたりしたぼくが悪かったよ！　こんな馬鹿だって知ってたら絶対にっ……」

「機をのがしたら最後だ」

痛みさえ感じていない表情で、イオが言った。かっとユーマは激昂する気分を味わう。あまりにも——無鉄砲ではないのか。

「わかってる、わかってるさ!!」

「怒らないでくれ。これが最上の方法だと、俺が考えた」

「ひらめのは考えてるって言わない！　畜生！　呆れたっ！　ミンス！　このぼくの気持ちを感じとれるなら、持ち主に恵まれてないディレイ・ザードの悲しみの声を聞いてせいぜい同情

してやれっ!!　頭にきてる水使ユーマが命ずる！　伝信の術、異境の転換、紅の水に宿りて呪縛の綱をとけっ！」

ふわっ、とディレイ・ミンスを銀光がつつんだ。ザードの意志が伝わってくる。主の帰還を待ちこがれている波動だ。まったく気の毒でならない……。

光は強さを増し、強烈な輝きに成長する。精神をディレイ・ミンスに集中し、ユーマは叫んだ。

「結界が何だ、死ぬ気で破れ!!　ここで勝てなかったら水使ユーマなんかじゃないぞっ!!」

耳鳴りとともに周囲の圧力が変化した。急流がイオとユーマの身を呑みこんだ。

灰白色の壁が崩れ、風がイオの頬をかすめた。

陽炎をすかして見るように、おぼろげな景色が断片的に浮きあがってくる。

砂の色と、空の色。

——外の世界だ。

IV

かたん、とレモネードのグラスが卓上に戻された。

「やだな……」

呟いたのは、一人の少年。
十二歳と半分。同年代の子供たちより、ずいぶんと幼く見える。
さらりと流れた、くせのないプラチナブロンド。
エメラルドの色を薄めたような、淡いグリーンの瞳。
クリストファー・ローディン・ジュニア。それが、彼の名前である。
「美味しくありませんでしたか？」
部屋の隅のデスクから、黒髪の青年が問いかけた。世界地図帳のページに片手の指をはさみつつ。
「ちがうよ、レモネードじゃないよ。ぼくが言ってるのは、だから……」
「えっ？　おや？　もしかして私、何か勘違いをしたのではありませんか？」
今度は耳から国際ラジオにつないだイヤホンを引き抜いて、青年は少々慌てた声を出す。
「もしかして今夜はホットチョコレートが、でなければレモンスカッシュが、あるいはペプシコーラがいいと、そのようにリクエストを受けておきながら私がすっかり忘れていたりとか、そういったことではありませんか!?　大変だ、だったら今すぐ私が――」
言いかけて、彼はふと口をつぐんだ。
少年も、ただ黙って、窓際の安楽椅子にかけたきり、じっと彼を見ていた。
広い書斎の二点――互いの存在の間に、数秒の静寂があった。

「――では、なくて、他のことが『やだ』なのですね？」
青年が、そう続けた。
「うん」
こっくりと、クリストファーが頷く。今の数秒間に何が起きたのか、知っているのはこの両者のみである。
「凄ーく、いやーな感じ。わかるよね？」
ね？　と首をかしげる仕草が、少女のように可愛らしい。
「いやーな感じ、ではありますが」
こちらは冷静に分析する表情で、青年は胸に手をあてる。
「いつものクリス様のいやーな感じレベルと比較すると、今回は、その印象は強いのですが、内容がもやもやのぐらぐらでわかりにくいように思えます。つまりこれは確定した未来ではなく、変化にむけての一石が投じられた結果、波紋がどばーっと広がっている状態を暗示しているのでしょうね」
「……エドウィンって、喋るの上手いなあ」
「からかっていらっしゃいませんか？」
「どうして？　どうしてぼくがエドウィンをからかうの？　ぼくの唯一の味方で、すごく頼りになって、かなりハンサムで、エドウィンがいなくなったらぼくなんか何もできないのに？

だからぼく、エドウィンをからかうときには、エドウィンにわからないようにしか言わないよ」

「感謝感激雨あられ、でございます」

「それ、どこの方言？」

「さあ……」

エドウィン・アーサー・カンナギ・クレイトンは両の手を広げてみせた。

「私、先天的に博学なものですから」

四つ以上の民族の血を受け継いでいるエドウィン・アーサーは、たしかに国籍不明の容姿をしている。二十五歳。ハイレベルで鳴るK大学を優秀な成績で卒業した前途有望な青年が、なぜ『ローディン家のお坊ちゃん』のお目付役（めつけやく）になどおさまっているのか……。

「変化か……」

小さい掌（てのひら）であごを支えながら、クリストファーは遠い目をする。

「変化があるのは楽しいけど、あんまり一方的なのはやだなあ。ぼくが思うに、この元凶って、あの神官（プリースト）でも、エクサールの彼女でもなくて、嘘つき（ライアー）のライトマスターだよね？」

「人間関係をぐちゃぐちゃにひっかきまわしている張本人ですね？」

「たまにいるじゃない、もとからそういう気性の、迷惑な人って。でも、彼の場合、そうでもないんだもん。わかってるくせにああいうことされると、腹が立つな……きらいになっちゃっ

た」
「抹殺したいですねえ」
のんびりとエドウィン・アーサーがそんなことを言った。このケーキおいしいですね、と言うときとまったく同じ口調である。
十四時間の時差――。この土地と、エクサールをめぐる騒乱がくりひろげられている現場との、距離を示す材料がそれだ。
だが地球の反対側で起こっている事件の一部始終を、全世界でただひとり、クリストファー・ローディン・ジュニアだけが完全に把握していた。
「そのうち抹殺しようよね。今はだめだよ、ウォークマンが怒る」
ふう、とクリストファーは小さなため息をつく。
「彼も正直ではありませんね。ファイアマスターとライトマスターは敵同士だと聞いたおぼえが、私にはございますが」
「いやよいやよも好きのうち、なんだよ」
「……どの国のことわざですか？」
「さあ。ことわざなの？　これって」
ファイアマスター――炎使ガディス。
三年前に拾った面白い魔術師を、少年はずいぶんと気に入っている。エドウィン・アーサー

はそのことを承知していたが、しかし自分はそれほどあの野蛮人を好きでもないのだった。嫌いではない。そこまで関心を向けていない。

飽きっぽい性格のクリストファーが、三年たっても興味を失わずにいるのだから、それ相応の魅力はある男なのだろう——。エドウィン・アーサーが彼に対して抱く認識は、その程度のものである。

おそらく、あの名前が決定打だったのだ。

思い返して、エドウィン・アーサーはちょっとした疲労感を味わう。いいのだが、別に。突然ころがりこんできた物騒な奴に、便宜上、即席で、どたばたと決めねばならなかった名前だが。クリストファーが気に入っているのなら、それで。

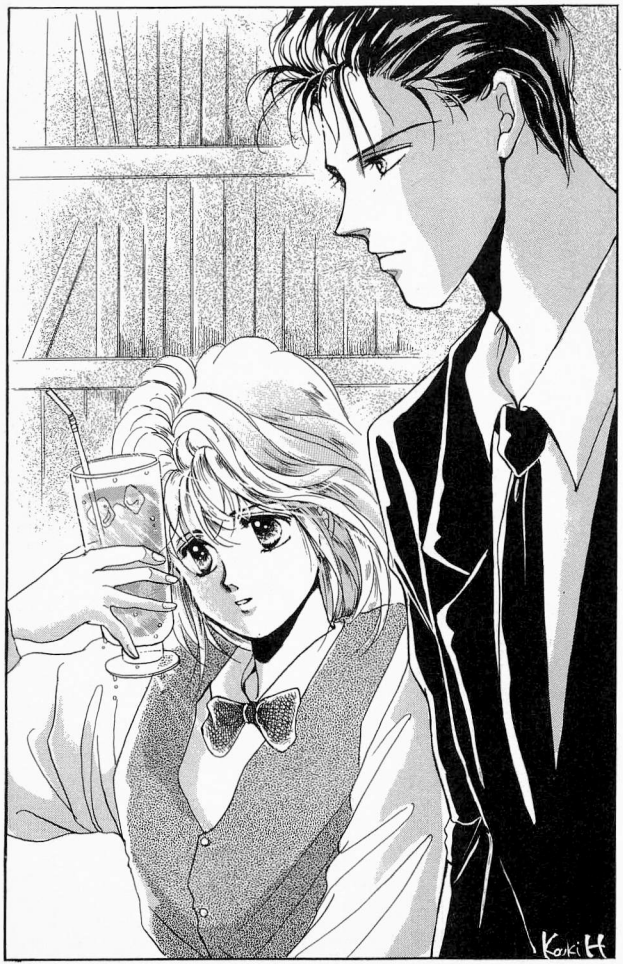
「つまり、わかったよ。ライトマスターの策略のせいで、ウォークマンが迷いはじめてる。それが〝波紋〟その一。だけどあの手札を見せちゃったら、今度はウィンドマスターのほうの舵がとれなくなると思わない？　ライトマスターは大きな賭けをしたみたいだ」

大人びた表情で、クリストファーはグラスの中味を見つめる。液体をすかして彼方を読みとるように。

「つついてコケさせてみたくなりますね」

「ぼく、自滅してポシャるのを見てるほうが楽しいな」

「では、その間に、ファイアマスター以外の駒を探して次の段階にそなえたほうがよろしいで


KAORI H

しょうね」

「うん。ぼく、けっこう、奏太って好きだ」

にっこり笑ってクリストファーが言った。

「あの子って、かわいいね。一途だもの」

「なるほど。素敵なプランですね」

エドウィン・アーサーもまた、にこやかな笑みを少年に返す。

なにしろ壮大にして崇高な野望は、まだスタートを切ったばかりである。始めたばかりということは、どんなプランを選んでもいいということでもあるのだ。これは——非常に楽しい。むちゃくちゃ楽しい。

「きっと彼もクリス様の魅力にノックダウンのクラクラとなりましょう」

「そしたらぼくたち、力を合わせて世界征服だよね」

お気に入りのヘッドホンステレオを膝の上ではずませて、クリストファーが安楽椅子から身をのりだした。

四年前、出会って間もない頃に、エドウィン・アーサーが初めて彼にプレゼントした、今となってはこれといって能のない旧型のヘッドホンステレオである。

側面に、商品名が記されている。

〝SONY WALKMAN EX〟と。

第四章　回天

I

完全なる閉鎖球の内面を大地とし、その中央を天となす。
天のさらなる中央に浮在するは央界神殿（おうかいしんでん）。
神の祝福を約されし〈月斎（げっさい）の地〉。
美しき我が故郷。……遠ざかる母なる大地。
どこへ？
滅び去り、死にゆく生命たちは、どこへたどりつくのか。誰がそれを救えるのか。鏡に映った自分の像がふりかえる。笑いながら。哀れむように。懐かしむように。戸惑ったように。
『私はあきらよ、お馬鹿さん』
あれはディシス？　それとも……。
すとん、と水晶の床にあきらは両膝をついていた。全身の力がすべてぬけてしまったようだ

った。

「アスヴァル……！」

目の前にいる少年は、三人の兄を傷つけ、父のいる炯月界を滅びに追いこもうとしている——敵対者。

だがこの時だけ、あきらは彼を敵とは思わなかった。同じ世界に生をうけ、同じ世界を愛する者として。

この事実を分かちあわなければ。

「アスヴァル!!」

顔をあげ、そう呼びかける——叫ぶ。わかるはずだ、彼には。この痛みが。この悲しみが。

それは思考ではなく、感覚。

心臓の訴える悲しみ。指先の知っている喪失感。知らぬ間に——自然に溢れだす涙。

声がつまり、話せない。床に座したきり、何も言えない。涙だけが勝手に流れて止まらなかった。

「何を見た?」

少年の声にも微妙な変化が含まれた。

冷ややかに問いつめるばかりの、それまでの調子とは違う。

「レア……話してほしい。何が見えた?」

あきらの前まで歩み寄り、ひざまずいて彼は尋ねた。真摯な表情で。気づかうような響きが、そこには確かにあった。

「……混沌」

自分がそう答えるのを、あきらは他人の言葉のように聞いている。

「カオス状態……。あの界はすでに、存在を失っている」

「存在？　存在とは何だ？」

「死者の復活は、あるいは奇跡として為されることもありましょう。病んだ者であれば、力によって癒すこともできましょう。荒廃した地であれば、衰えた地であれば、因果力を用いて救うすべもある。けれど『無』は救えません。存在しない者を癒すことはできない……」

「……」

「琅月界は因果力の乱れに耐えきれず、圧壊し、変質して、今や残っているものは原始の混沌のみ。千億の、百億の時を経ていずれ新しい界の母胎となる――ただそれだけの渦。いくら活気あふれた因果力を注ごうと……もう、手遅れ……うけとめるべき器がそこには存在しないのですから」

残酷な結末。それが真実。

あらゆる論議が、意味のないものとなる。

還るべき故郷はすでになく……愛しき人とも二度と会えない。

永遠に。

「……君は」

見開いた瞳をあきらへと向け、静かに、囁くように、少年は呟いた。

「君は、そうやって、ディシスと同じ姿をして、ディシスと同じ声で……」

「……」

「ディシスと同じ言葉で……私に」

静けさが二人の間を支配する。水晶の世界を凍らせる。

涙はもう流れなかった。あきらは彼の瞳の内を見ていた。紫の影を。

「アスヴァ……」

「では君は、私に絶望を告げるため、そこにいるのか!?　そのためだけに!?」

言いかけたあきらの声をさえぎり、アスヴァルが叫んだのはその時だった。

「無力と失意の象徴として!?　それだけの存在なのか!?」

「アスヴァル……!」

「不可能は不可能として終わらせるのか!?　敗北を運命と言い換えるのか!?　ディシスは哀れな犠牲か!?　哀れんで泣けばそれで満足なのか、エクサール・レア!　それが君に課せられた役目だというのか!?」

「やめて、やめて、やめてよっ!!」

激しくあきらは首を横に振る。
「ディシスがかわいそうだっ……！」
「……いやだ。私はディシスを哀れまない」
冷気を漂わせ、アスヴァルはそう宣言した。
「そんな哀れみは、愚かな自己満足にすぎない。忘却のための自己弁護にすぎない」
「そうじゃない！　あきらが言ってるのはそういうことじゃない!!　誰の気持ちをいちばん大切に考えるかってことだっ!!　アスヴァルの気持ちにがんじがらめにされてばっかりだったら、ディシスの意志なんて消えちゃう!!　そんなのかわいそうだっ……!!」
「君はディシスのことなど知らない。君の解釈を語っているだけだ――他人として」
「そうやってディシスを一人占めすれば、自分の間違いを認めないですむんだ!?　それってアスヴァルのプライドを優先してるんじゃないの!?　でなければ罪悪感!?　自意識!?　そんなものの裏返しで愛されても幸せになんかなれない!!」
ぎらり、とアスヴァルの背後に怒りがひらめいた。
不意に横なぐりの強烈な力があきらを襲った。目に見えぬ腕に打ち倒され、あきらは水晶の床に左半身をたたきつけられる。凄じい勢いだった。
「……失礼だな」
薄い笑みを浮かべて少年は言った。低く、ひそやかに。

「これほど失礼な言葉を聞いたのは初めてだ」
あきらは彼を見据えた。今の力が何なのかは、まだわからない。……ガース？
「礼を言おう……。君を憎むことができそうだ」
「腹が立ったら、今度は力任せなんだ？」
手をついて床から起きあがりながら、あきらは尋ねる。
「君だって怒りに狂えばガースを共鳴させるだろう。君のお守り役たちこそ、エクサールを力任せで束縛する野蛮な人種ではなかったのかい？」
「降りかかる火の粉は払わなくちゃ、火傷する。そういうこと。先に仕掛けたのはそちらでしょう？」
ガースはどこにあるのだろう。アスヴァルが身につけているのか。
「さて、そうだったかな。ライエノーツの諸君は、私の姿を目にした瞬間から、私を殺すことを目的としているように思えるが」
「……」
ふと、初めてアスヴァルと——葉月奏太と相対したときの、三人の反応をあきらは思い出した。
そこにあったものは憎しみと殺意。
自分のように記憶と過去を——それも都合のいいことに重要で大切なことはすべて——失っ

ているなら、話は別だ。彼らは忘れない……決して。そしてアスヴァルも。
憎悪と怒りと悲しみと不信と誤解が永遠に消えないとしたら、いったいどうすればこの狂的なアスヴァルの挑戦を終わらせることができるだろう？
いったいどうすれば元通り、あの三人と幸せな日々をとりもどせるだろう？
どうすれば本当の意味でディシスを救うことができるだろう？
何が琅月界のためで、何が炯月界のためで、自分はいったいどちらに属する者として決断を下さねばならないのか。どうすれば選べるのか。肝心なことは何も憶えていないままで。
……不可能だ、絶対。無理だ！
「個人的に、計画を放棄するわけにいかぬ事情も、少々あるのでね」
ついでのようにアスヴァルが言う。あっさりと。
「私には時間がない。君と違って、新しい世界で美しい未来を夢見るというわけにはいかないのさ」
「時間？」
「私の姿を見て、不審には思わなかったかい？」
十二歳の、少年の姿……。
幼すぎる年齢。界を渡る際におきる時間の逆流は、決してすべての個体に一定のものではない。だが——葉月奏太の場合、それだけでは説明できない現象が付加されているのだった。

「私の時間は逆流を止めていない。四年前から、この身は若返るばかりだ」

「……」

一瞬あきらは想像が空白と化すのを感じ、それからぞっとした。若返る……？

「忠実に、進む時間の分だけ……私だけが引きはなされてゆくのだよ。このあたりがそろそろ限界だ。そう思いはしないかい？」

少年は邪気のない笑い方をする。……何かが歪んでいる。何かが不自然で、異質な表情。

……ディシス。

涙が乾いていく。あきらは何処とも知れぬ彼方へと語りかけた。胸の奥で。

本当に癒やされねばならないのは、彼の魂。

あまりにも苛酷で、不条理な運命の数々。彼が狂気に走ったとして、何の疑問があるだろう。

心優しいディシス。

あなたさえここにいれば、彼の魂を救うことすら、きっと容易なことであろうのに……。

II

ざっ、と膝が砂につく感触があった。

ユーマは顔を上げ、そして強い色彩の源を見た。日光だ……！
空間の急な変化に、神経が一瞬とまどう。適応するまでに時間がかかる。ゆらりと視野がズレるような錯覚。
イオが平衡を失ったのも、その錯覚の作用であったはずだ。少なくともイオ自身は、それが大量の出血によるものとは思わずにいた。が――。
「！」
不意に腕をつかまれ、イオは砂場の内から引き出された。ひきずりだされた、というほうが近い。
「無理に動かそうとするな。神経を傷める」
一言だけ告げたのは――ライア。
イオは彼を見つめ、だが無言で、ライアが促すままに歩を進めた。痛むほどきつく右腕をつかまれている。切り裂いた手首から溢れだす血の流れを、そうすることによって抑えているのだ。
「ディ」
傍観しているガディスを見返り、ライアは空いているほうの掌をさしのべる。いかにもあっさりと。
「おまえなァ……」

錆色の前髪をぐしゃっとかきあげ、ガディスは呆れた声を出した。相手が何を要求しているかはわかるが。

「てめえに臆面の二文字は……ないわけね、やっぱり」

「あるものは存分に活用しなければ勿体ない」

「活用するったっておまえ、いったい誰の持ちもんだと……」

「出せるのか？　出せないのか？」

古びたベンチにイオを強引に座らせつつ、ライアは問う。物騒な物言いである。ガディスは舌打ちをした。どうして自分はこんなに嫌な奴のいうことを聞いてしまうのだろう、と不審に思わずにいられない。

アクセサリーでじゃらじゃらと鳴る上着の内側に、ガディスは片手を突っこんだ。

ユーマが目を瞠った。

あらわれたのは、鞘に収められた黄金色の短刀……司杖。

「使ったら返せよ、きちんと」

無造作に放られたガースを、ライアは片手で受けとめる。目の前で短刀が鞘から抜かれるのをイオは見ていた。

「残念ながら、アスヴァルが持っているガースとは別物だ」

ライアが言った。

では、ディシスのガースか……。炎使ガディスが保有していたことから、イオはそう結論を導く。するとアスヴァルが奪ったのは……。

「司杖よ。エクサールの僕、使鍵の担い手に汝の加護を求める。我が主君……」

半ばまで抜き身をさらした短刀を手にライアは命を下し、そこでわずかに間をおいた。

「我が主君、メサイエ・エクサール・レアの名において」

そう続けたのはイオの声だった。

静かに向けられる琥珀の瞳を、イオは間近に見つめ返す。ライアには呼べまい……エクサール・レアを主とは。そのことによって彼に負担を強いたくない。

かっ、と短刀から光の滝がほとばしった。

熱のない炎で傷口を灼かれるような実感に、イオは顔をしかめた。これが司杖の光。

「我が主君ね……」

肩をすくめ、ガディスがひとりごちる。

ガースの光にあててやれば、たいていの体組織は死をまぬがれる。大量出血を止めてやるくらいなら簡単だ。

怪我が完全に治るということではない。ある程度は手伝ってやるからあとは自力で再生させろ、というのがガースの基本方針である。ハンパであることこのうえないが、なにしろ使いこなしてくれるエクサールがいないのだ……ガースが拗ねるのも無理はない。

「ガースが節操なしで助かったじゃねーか。感謝してやれよ、せいぜい」
皮肉たっぷりのガディスの言葉に、ユーマが鋭い視線を投げた。とにかく昔から気の合うことがない相手だが——なにせ水と炎である——今ほど最悪の状況で顔を合わせたこともない。
本来、ユーマの究極の目的といえば、ただひたすらに平穏で平和な日々の生活である。
争いの芽を摘みとり、不和は調停し、とにかく楽しく安らかに暮らすのが水使ユーマのあくなき希望なのだ。だというのに。
「ガースがあるなら、もっと早く……せめて三日早く、そう言ってほしかったよ！」
「おいおい。苦しいときのガース頼みってやつか？　ライエノーツが三人も揃っといてそのセリフじゃ、ちょっとばかし情けなくねえか？」
「エクサールとガースを引き離しといて平気でいられる神経のほうが信じられないな、ぼくには！」
「だーれが引き離したんだ。あの阿呆のアスヴァルだろーが、そりゃ」
不本意の一語を顔に書いた者同士で言い争うのも、実は空しい。ユーマは怒鳴りかえしかけて、思いとどまった。深々とため息をつく。
「……足元ふらついてんじゃねーのか、おまえ」
「うるさいな。自分のやってることがあんまりくだらなくて力がぬけたよ」
「せっかくの活力は、有効な目的に向けていただけないか？」

いきなり割りこんだ声は、落ちつきはらったライアのものだった。
この期に及んで未だ仕切ることを忘れていないのだから、救いようのない奴だ。ガディスはうんざりしながら――うんざりも度が過ぎると悲しくなってくる――そちらを振り向いた。
「有効な目的？　面白そうだな、そいつは」
論理的な態度を装ってはいても、どうせこいつが持ちだす策は無謀なものでしかないのだ。頼むからこれ以上ぶっとんだことは言わんでくれ、と予防線を張ったつもりでガディスは彼の続ける言葉を待ちかまえる。
六割ほど治癒した傷を、イオは自分のハンカチで縛り、その先端を歯にくわえて強く結びあわせた。イオはイオで、現在たったひとつのことしか考えていない……。発想の危険性だけを問えば、彼は充分、ライアとわたりあえる。本人に自覚はないのだが。
「ここにガースがある。くどいようだけど、あるものは存分に活用しないと勿体なくてオバケが出ると古くから言い伝えられてもいるだろう？」
「使ったら元あったところに返せっつっただろーがっ!!」
「幸い、ライエノーツの頭数もそろっている。となればとるべき手段はひとつ。『転移』だ」
「ちゃんと話を聞けっ!!　誰が預かったガースだかわかってんのか、てめえは!!」
「目的の地は界の狭間――晶月界だ。一刻を争う。実践するなら今、この場を使うしかないだろう。号令は俺が担当する。異論は？」

見事にガディスの異論は無視しておいて、ライアがそんなことを尋ねた。
「晶月界……」
ユーマが独白する。
礼神官アスヴァルであれば、たどりつける静寂の地。
あきらがそこにいる。ひとりで。誰も彼女を守れずに、炯月界にとらわれていたのに……。
「ちょっと待てよ、おい」
咳払いして、ガディスが冷ややかに声を投げた。
「ただ界の狭間に行くったってあてが知れないぜ。エクサール・レアがきちんと俺たちを導いてくれりゃ話は別だがさ……あの小娘に、んな大任こなせっつーほうが嘘だろ」
「怖気づいてる場合じゃないと思うけどね！」
反論をたたきつけたのはユーマである。ムッとした表情でガディスが彼を睨み返した。
「俺が言ってんのは！　俺はおまえらなんかと一緒に次元の隙間に落っこって心中するくらいだったらここで舌かみ切って死んだほうがマシだぜって話だろうがっ!!」
「ガースは力ずくで奪えということか？」
それまで無言を保っていたイオが、そのときぽつりと口をひらいた。剣呑な一言に、ユーマは尋常ならぬ殺意を読みとって焦る。イオは本気だ。
「力ずくで？　そりゃずいぶん野性的でいいなあ。面白いぜ」

にたり、とガディスも不吉な笑みを浮かべた。……こちらも本気だ。

「殺気立ってる場合でもないんだよ！」

この二人の対決など、想像するだけで心臓が止まる。ユーマはやむを得ず打開策を探し求めた。まったく手の焼ける……！

「相手はあのアスヴァルなんだぞ……ガディス！　おまえだってアスヴァルには意趣のひとつやふたつ、ないとは言わせないよ。こうなったらあえてあきらを助けるためだとは考えなくていいさ、その役目はぼくたちのものってことでね！　目的が違ったって、共通の敵が相手だ、ここでぼくたち四人が協力することくらい簡単なはずじゃないか！」

「……甘いね」

わざとライアのほうを見遣りながら、ガディスは吐き捨てた。

「俺に命令できるのはマイラ・エクサール・ディシスだけさ。寿命が続くかぎり生きろってのがディシスの命令さ。死ぬまでガースの番人やってろってことさ。俺はディシスのガースをむざむざ不毛な虚無空間に捨てるわけにはいかねえ。保証がなくちゃな」

できるのか？　彼女に。

ガディスの視線はライアに問う。試している。彼の反応を。

ディシスの名のもとに誓えるか？　裏切者。

彼女が誰であるのか。

「けど、そもそもライエスの寿命ってのはさ……エクサールが死んだら終わりって決まりになってんだよな？　すばらしいことに」

「……」

一瞬、ユーマは耳を疑った。

足元の土を蹴り、イオが立ちあがった。今の一言は、冗談ではすまされない。

レアが死んでくれたら楽になれる、とガディスは暗にほのめかしたのだ。

ライエノーツの生はエクサールの生と直結する。百五十九代目のエクサールが双生児であったばかりに、現在もこうして機能することを宿命づけられている戦闘集団……。

その形態が不自然であることはわかっている。わかっているが……！

「炎使ガディス」

ふわり、と微熱を含んだ風が金褐色の髪を舞いあげた。左手の中指に還った指輪が強い銀光をまとわせる。

研ぎすまされた美貌に走ったのは妖気の風。

「今の言辞によって貴様の堕落はあきらかとなった……！　もはやライエノーツに炎使の席は無用。貴様を粛清する……ディレイ・ザードの刃のもとに！」

「そのケンカ、買い取った!!」

挑む眼差しをイオに向け、ガディスが応えた。朗々とした声で。


Kouchi

最悪の展開だ。予測どおりとも言えるが。お手上げの状態でユーマはそれでもディレイ・ミンスを呼び出し、両者の激突にそなえた。

立場的にはイオに肩入れせざるを得ない。しかし……そんなことやってる暇はないんだってば、というのがユーマの本音である。炎使ガディスはわざとこちらの神経を逆なでしていたりしないか？

わざと？　何故？

「ディレイ・ローザ!!」

襟元から勢いよく銀鎖をむしりとり、ガディスが叫ぶ。ドウッ！　と高密度の波動が彼の身を中心に発生する。

「暴れさせてやるぜ、ひっさびさになァ!!」

「ザード、この瞬間よりおまえを解放する！」

イオの声と同時に、ディレイ・ザードはその姿を変化させた。銀の指輪から、左手全体を覆う指鞘のかたちへと。

風使イオの全霊をくれてやる――。

「叛逆の徒に滅びへの道をひらくがいい!!」

「よおおお――――ッし、いい度胸だ!!　燃えくされ軟弱野郎ッ!!」

使鍵の響きが場を圧した。

一声咆えて炎使ガディスが銀弓の弦を引きしぼり、業火を巻きあげる巨大な炎矢は目にもとまらぬ速さで空をきった。

盾と刃を兼ねた斬風がイオを包むように広がり、四方から鋭い牙をむいてガディスへと襲いかかる。

両者の覇気は互格。

あまりにも切迫した間合い……割りこむ隙がない！　ユーマはディレイ・ミンスを抑えざるを得なかった。下手な介入はどちらかを確実に傷つける。

勝負は一瞬にして決するかと見えた。

が――。

風神と火竜は、接触することがなかった。まさに互いの攻撃が交錯する寸前、鼓膜を狂わす無音状態が天地をつらぬき、時の流れを凍りつかせた。それは雷光に似ていたが正体はさだかでない。

のおおおん、と大地が唸った。

「！　ちっ！」

ガディスが舌打ちする。

ディレイ・ローザは目に見えぬ壁に阻まれ、悲鳴をあげていた。そして光を放ち地を砕いた当人は、足元に長剣――ディレイ・ルナクを無造作に突き立てて、穏やかに宣言した。

「異論はないものと認める。言ったはずだが？　一刻を争うと」

III

ヴァーミリオンの瞳を見開き、炎使ガディスは数瞬の間、そこに立っている光使ライアの姿を無言で見つめていた。

まったく同格の、それでいて異種の使鍵がふたつ、すさまじい勢いで激突したのは事実である。

その両者の間に介入するのは、まさに無謀だ。その両者の力を完全に受けとめて消し去り、傷ひとつ負わずに立っていられるとなると――無謀を通りこして化け物だ。

ふたつの使鍵の力を、彼はさからわず天と地に方向を曲げて流したらしい。目を灼いた烈光と無残に裂けたグラウンドが、その証拠。地に突き刺さった長剣と、風に流される黄金の髪が。

毅然として立つ、精悍な影が。

他を圧する者。守護の名を得て許される者。

頂点に立ち、その責を負うべき者。

『確かめればいい』

手の内の銀弓が、ふわりと鎖の姿に戻る。
『もしも俺がライエスとして堕落した者ならば、その矢はたやすく俺を殺すだろう』
……そういうことか。
にっ、とガディスは口元をゆがめて笑う。
本当に守るべき乙女のためにこそ、強靱であれる戦士。それをライエスと呼ぶなら。
「信じてみる甲斐はあるってか？」
少なくとも、もう脆弱きわまりない光使ライアの姿に苛立つことはなくてすみそうだ……。
そして彼女のためなら、世界の狭間であろうが果てであろうが、目指すことに否やはない。
可能性？　仮定？　望むところである。不確実性がなければ未来などおもしろくもなんともない。
「……負けた。ガタガタ文句たれるのはやめたぜ、俺は」
一転して明るくなった口調で、ガディスはそう告げた。風にあおられた帽子をぐいと片手で押さえつけながら。
「ガースなら貸してやる。『番人』の俺が言ってんだぜ、さっさと活用していただこうじゃねえか」
炎使ガディスの態度の急変は、拍子抜けどころか不気味である。

とりあえず何もできなかったことが少々くやしい。ユーマはため息をつき、イオと目を合わせた。ともかく短気は禁物だ……。

「すまない……」

ユーマにだけ聞こえる声で、イオが呟く。

「なに言ってんのさ」

あんな悪い冗談を聞かされて、冷静でいろというほうがイオには酷だ。こちらから仕掛けずにいられないことは承知のうえでガディスは挑発したのだ。

……そう、あれは挑発だ。

あらためてユーマは確信する。ガディスは何かを試したのだ。おそらくライアに関係する、何かを。

ビリビリッ、と水晶壁に震動が走った。

静寂と平穏の絶えることがない、晶月の宮に——何の兆しか。

葉月奏太——礼神宮アスヴァルは丸天井の彼方へとその瞳を向ける。透明水晶を染める闇の空へ。

「……他の界の影響か、ここまで及ぶことは……ありえぬはずだったな」

独白して、彼はあきらを見返った。

「他の界の影響……？　炯月界の？」

そうだろうか？　今、身体を伝わった震えは。あきらは自問する。奥深い、記憶の底の本能に。

鳴神……雷。

大地を裂き、星を砕く。

四つの使鍵を束ね、制する者。

その力の真髄が示されるとき、界を超え、空を響かせても不思議はない。

何かが始まろうとしている。ライエノーツの長がその権威を自ら天に訴え、界境すらも揺るがすなら。

「エクサール・レア」

凍てついた声でアスヴァルが告げた。

「余計なことは考えずにいたほうが、利口だ。私を妨げる者を、私は許さない。たとえいかなる手段を用いても……」

「……」

答えずに、あきらは待った。前兆につづく、真のメッセージの顕現を。

迷いが、哀しみが、切なさがいくら目の前を占めても——戦いは終わらない。

無慈悲な運命に、ひとり涙を落としていても、誰の心が救われることもない。

動かさなければ。この〝運命〟を動かさなければ何も変わらない。そのためには何が必要なのか、彼らと語りたい。彼らとともに探したい。――彼らと再び出会いたいのだ。

滅びゆくだけの世界なんて、滅びゆくだけの魂なんて……

「どうしようもないなんて、思わない」

他のことはなにひとつわからなくても、それが自分の信じる唯一の道。

「どうにもならないなんて、あきらは思わないっ……！」

キン、と可聴音域ぎりぎりの高音が晶月界全体に鳴りわたったのは、その時だった。

「痛っ！」

クリストファー・ローディン・ジュニアが悲鳴をあげたのも、まったく同じ瞬間だった。

「エドウィンっ……エドウィン!!　痛いよっ!!」

両の耳を必死に掌でふさぎ、それでも決して和らがない激痛に、少年は声をからして叫ぶ。

「クリス様!?」

エドウィン・アーサーの反応は早かった。床に積まれた本の山を踏みこえ、クリストファーの安楽椅子へと一足飛びにたどりつく。

「クリス様、ご気分を楽にして……！　感覚を遠くに向けすぎたのではありませんか!?　少しずつ私へ戻せばいいんです！　急がないで！」

「痛いよっ……!!」

クリストファーは何度も頭を振った。涙がぽろぽろと落ちたが、あとは叫ぶ以外なにもできない。

「痛いよ!!　痛い!!　戻せないよっ!!　ガースが……ガースが……」

「ガースが!?　ガースのせいなのですね!?」

「エドウィン、たすけて!　苦しいっ……頭がおかしくなっちゃう……!!」

感覚をひらいているところに飛びこんできた波動が、運の悪いことに、クリストファーともろに同調する性質のものだったらしい。

「わかりました、クリス様……あなたの感覚と私の感覚を完全に入れ替えます」

きっぱりと言って、エドウィン・アーサーは少年のプラチナブロンドを自分の肩に抱き寄せた。

何の手続きも必要としなかった。耳の内側で大鐘が百個一度に鳴りひびくような重圧と激痛は、エドウィン・アーサーの一言とともにきれいに消えうせた。クリストファーは両耳から手をはなし、そっと目をあげた。

「エドウィン?」

「大丈夫、ですか?」

抱き寄せる腕に静かな力がこもり、彼が尋ねる。

「うん。ごめんね、嫌なものあげちゃって」

今の痛みはすべてエドウィン・アーサーの内に『移植』されているのだった。遠い海のむこうでガースがこの大騒ぎをやめるまで、彼の苦痛はおさまらない。

「私はかまいませんが……」

本当に平然とした様子で、だが声に微妙な揺れを——怒りをにじませ、エドウィン・アーサーは呟いた。

「こんなに苦しい思いをクリス様にさせるなんて、許しがたい相手ですね……」

「ぼくが勝手に覗いてたんだもの、仕方ないよ」

「いいえ。クリス様はなんにも悪くありません。この世界に変な戦いを持ちこんだあの連中が悪いんです。まったく許しがたい者たちです」

「うんうん。制裁しようよね。早くね。だからあんまり怒ったりしないでよ、エドウィン」

「もちろんです」

大の男が、十二歳の少年になだめられている。エドウィン・アーサーは頷き、そして天に挑むかのように断言した。

「この全世界は、クリス様のものです」

黄金色のきらめき。

司杖（ガース）。

それは今、かすかに、ごくかすかに歌っていた。空気を振動させ、遠くはるかな界境へ向けての歌を。

常人の耳には届くまい……。

ガースに触れる風の共振をイオは聞きとる。風が抱く歓喜と畏怖（いふ）の念も。エクサールの半身を前にしてディレイ・ザードが逸（はや）る気分も。

汚（けが）れなき大地に据えられた短刀は、四人のライエノーツにかこまれ、使鍵の存在にこたえて歌っている。

迷ってはならない。

祈るのは、すでに何度目かわからない。

一度だけかたく瞳を閉ざし、そしてイオはまっすぐにガースの姿を見つめた。

彼女が待っている。

「始めよう……」

ライアが言った。

「頼むから俺をコケさせないでくれよ、一番手」

にたりと笑ってガディスがユーマを見る。

「そっちこそ、ちゃんとぼくについてこれるよう準備体操でもしておいてほしいね！」

負けずに言い返しておいて、ユーマは両の腕をのばす。右腕の手首に宿るのは水を司る使鍵の化身――。

一拍の、空白。

「ディレイ・ミンス!!」

高らかにユーマが叫んだ。

優美な輝きが彼の腕輪と彼自身をゆるやかにつつんだ。なにもかも呑みこみ、あたためる慈悲の波動。

澄んでゆく、透明度を増してゆく青と碧の色。

中性的な彼の面に、神々しさが見えるようだった。彼は命ずる――水使ユーマの名のもとに。

「司杖へ還れ！　万物の恵み、天壌の聖母ミンスに、我、ライエノーツの裁きを委ねん!!」

ぴん、と強靱な糸のごとく、銀の光が彼の腕と短刀とをつなぎあわせた。巨大な力の渦がガースの周囲に発生する。

「ディレイ・ザード！」

間をおかずイオが続いた。

野性の香りを含んだ風が、勢いよく彼を通りすぎてゆく。

声を抑え、彼は命ずる。一語一語に真摯な祈りをひそませて。

「司杖へ還れ……！　寡黙なる賢者、全知にして無私の剣聖ザードよ！　我、ライエノーツの誓いを汝に託すものなり！」

彼の指輪もまた、銀光によってガースとつながれた。鋭利な表情でイオはそれを見守った。

「ディレイ・ローザ!!」

待ちかねたようにガディスが声をはりあげる。

「司杖に還してやる！　放浪の幻、麗しき軍神ローザに、我、ライエノーツの力を与えようっ!!」

ゴウッ、と彼の身から熱気が放たれた。

猛々しい炎の影。ガースをとりまく渦に合流し、成長する。凄味の増した笑みを浮かべながら、ガディスは力の行方を目で追いかける。燃えさかるヴァーミリオン。

銀鎖が強く輝き、短刀と交信する。ずしりと重い手応えがあった。

しかしまだ、司杖と使鍵が結ばれるだけでは駄目なのだ。

ガースにエクサールの居所を、エクサールにガースの存在を伝えなければ、この賭けは成功しない。

エクサールの誘導がなければ……。

「ディレイ・ルナク」

静かに——とても静かに、光使ライアはその唇をひらく。

一触即発のところまで、ガースの緊張は高まっている。
「司杖へ還り、そして導け。黎明の翼、永世の守護神ルナクよ」
ガースを中心とした光が急に大きく広がった。四人すべてを内側にとりこんで。
三人の意識が、ライアひとりに集中した。仕上げがどう運ぶかは彼次第だ。
光に溶けこみ、彼の姿は不鮮明なものとなる。
見えなくなる。遠くへ……惑わされる彼方へ。すぐ近く、妨げるもののない目の前にありながら。
謎めいた微笑……。
「ライエノーツの忠誠を汝に捧ぐ」
かっ、と闇が白く炸裂した。

第五章　界峡戦闘

I

――摑(つか)みとれ！

その声は遥かな上空から。

――誤(あやま)るな、摑みとれ！

力強く発信される。
宇宙をつらぬいて走る。はりつめた時空を駆けぬける。
ただひとりの相手を指向(しこう)して。

――我を導くもの……我を見出(みいだ)すものに告ぐ。摑みとれ、汝(なんじ)の天命を！

光あるもの汝その瞳をひらき真なる戦いを受諾せよ。
選ばれしもの汝その翼を解放し救済の剣となれ。
我が声を聞き届くか。
我が声を聞き届けしか。
誤ることなく聞き届けしか。遠く幽けき我が声を?

「来た!!」
水晶の壁も紫闇の天空も、いや界の境域さえも妨げとはならなかった。
それは——熱い意思。
重厚な存在感。
ゆるぎない共振とまっすぐに伝わる呼び声。
訴えている……はっきりと。
「ガース!!」
拳をかたく握りしめ、あきらは叫んだ。
「ガース、おいで!! ここに!!」
受けとめてやれる者は自分ひとり。ガースの送るメッセージを。

――真理は深淵にあり。

なればこそ切り拓け。汝の身を用いて。

水晶塔の丸天井が、帯電したように異様な気で満ちた。
透明な門が甲高い響きをあげる。震わせる。静寂を。
転移の兆し？
「邪魔を入れようというのかい？」
礼神官アスヴァルはそう呟き、ゆらりと目をあげてあきらを見た。
「それは許すわけにいかないな」
相反する力――負の力が、大きく広がってドームを占め、侵入する気配を拒んだ。

なればこそ立ち向かえ。汝の心に依りて。
偽りと優柔と怯えを捨て、鬨の声をあげ、秘めた力を解き放て。

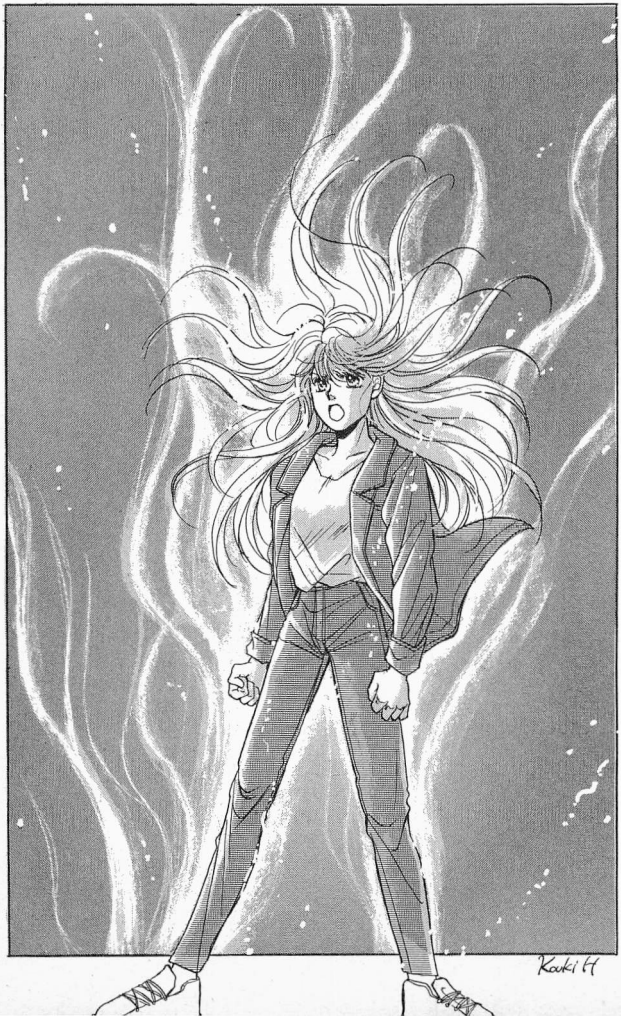
澄んだ泉に、今、ざわめきの波が生ずる。輝きと翳りがせめぎあい、からみあう。

果てなき大地。穏やかな無限空間。だが種子はすでに持ちこまれた。騒乱の火種は。
門が鳴る。
門は啼く。門は唄う。
賛歌を。
界峡の支配者、純粋なる精神のやどりよ。

汝、幾千の傷を得るとも退くことなき王者たれ！
汝、魂に恥じることなき勇者たれ！
修羅と化せ！
戦鬼となれ！
手遅れになる、その前に――。

急げ!!　惑うている時はない!!

「礼神官アスヴァル!!　妨げは無用っ!!」
あきらが叫んだ。ガースを導く気を乱しているのはアスヴァルの仕業！
「それはこちらも同じこと！」


Kouki H

アスヴァルが応じる。
「侵入者は認められない……！」
この晶月界にライエノーツの踏みこむ余地など許さない。
「負けるもんかっ!!」
あきらの全身に熱が満ちた。髪が宙に舞った。ドームの内側に異質の気が渦まく。乱気流をおこす。
水晶壁に宿った負の力は、天から飛来するメッセージと、それを迎える信号とを、ともにがっしりと遮断して動かない。
気の塊がはねかえされ、丸天井に沿って流れおち水晶の床をすべり、あきらの身を巻きこんでなぶってゆく。
いくらでも流れるがいい。
暴風にさらされながらあきらは天を見る。
ためらうな！　戦え！　負けるな!!
「負けるもんかああっ!!」
ドウオオッ!!
華奢な彼女の身体を核にして、堰を切ったように膨大な力が溢れだした。
グアッ、と牙をむき天を目指し疾る闘気の竜。

「無駄なことを!!」
アスヴァルが呪詛の声を吐き出す。
「無駄かどうかはっ……」
あきらが言い返した。雷光が天にひるがえった。
「やんなきゃわかんないっ!!」

歓声にも似た乱気の調べ。

あきらから発された凝縮された力の竜巻は気流を突きあげ輝きをはねのけて、一直線に丸天井を――厚く硬い水晶質の曲面を、撃った。
弾丸となり、打ち砕いた。
水晶塔が七色の虹を反射する。破砕されたかけらが、宝玉となって闇天に散る。
道はひらかれた。交信の旋律。交信の音色。ガース。ガースの呼び声。ライエノーツの。
いかにして彼らがガースと共に在るのか、そんなことは知らない。
いかなるすべによって自分がその呼びかけを察知したのか、そんなことも知らない。
ライエノーツの裁きと誓いと力と忠誠が、すべてを動かす源。まだ自分は――ここにいるエクサールは、彼らの働きに応えていない。だから戦う。それだけのこと。

水晶を通さずに見る暗い空。
「ガース!!」
流れこむ冷えた大気。
「導きの声を聞けっ！　界を超え、おまえだけの信じる扉をひらけっ!!」
たちのぼるエナジーの火柱が孔をぬけて天に届く。
ごおん、と門が震えた。
鐘の音のように、それは遠く高くくりかえす。
「やむを得ない」
小さな肩をすくめ、少年が呟いた。
「多少の制裁は覚悟してもらわねば……」
制裁？
ふわっと身体が軽くなったのはその直後だった。あきらは両目を見開き、事態を知った。
軽くなったどころではない。浮いている。靴の底が、床の水晶から。
浮きあげられている——。
「こんなやり方は、私の本意ではないが」
無表情にアスヴァルは告げる。
「責任は君にある。忠告はしたはずだな、エクサール・レア」

「っ！」

身がまえたが遅かった。不意をついて凄絶な力が来た。

自由を奪われたまま、その身を水晶壁に、超高速でたたきつけられる。がつり、と右の肩が鳴った気がした。くらっと視界を闇がよぎった。

痛みを感じるより先に、呼吸が詰まる。

精神の集中が切れる……！

冷たい壁に身体を預けながら、乱れた髪を透かしてあきらは奏太を見た。衝撃の強さがじりじり手足に広がってゆく。骨が痺れて動けない。

「ガース……！」

「愚かな真似は謹んでくれないか？」

落ちつきはらって奏太が言う。

息を整え、あきらは宙を仰いだ。まだ交信は絶えていない。断たれていないはず。

「ガース!!」

「やめろと言っている！　耳障りだ！」

今度は逆方向の壁に——弾きとばされる。

「君の言葉は常に耳障りだ！　君の姿そのものが常に目障りだよ!!」

背骨がまともに水晶壁とぶちあたり、砕けそうになった。喉の奥で悲鳴をおしころし、ずる

りと壁をすべってあきらは落下する。
「殺さないさ。君は必要だからね」
奏太の声が届いた。
紳士の仮面はどこへ行ったのか……ひどく凶々しい彼の声。それともこれは彼の狂気？
「君は、私の計画に、必要不可欠なエクサールの乙女……殺しはしないさ」
そしてディシスを取り戻す。
アスヴァルの確信は、その一点から決して動かない。
言葉を返したくても、肺がまともに働いてくれなくて、あきらは床にうずくまり何度も咳きこんだ。
アスヴァルが有しているこの強大な念力は、礼神官としての能力ではない。ガースの補助が必ずどこかに作用している。アスヴァルのガースはどこに隠されているのか……。
それは誰のガースで、どのような経緯で彼の手にわたったものなのか。
「大人しくしていたまえ。彼らに転移など初めから不可能だ。次元の間隙に陥り、永劫の漂流者となる運命だったのさ。せめてここから見守ってやることだ、彼らの末期を」
「……！」
たどりつくあてもない宇宙の藻屑。
そんなことになどさせない。絶対にさせない。

激痛の残る背をのばし、全方位へ神経を研ぎすまして——捜す。
「……王の杖……」
アスヴァルには聞こえなかったはずだ。ろくに声にもならなかった言葉。
「ディア・レ・ノス・ク・エストワイア……」
歯をくいしばり、瞳をあげて。
水晶の床に爪を立てて。
「汚されし、王の杖……！」
はっとアスヴァルが振り向いた。鋭く。
「レア……!!」
「我が声に応えよ、贖罪を願うならっ!!」
気力だけで立ちあがり命を下したあきらは、アスヴァルの双眸に正面から見返された。
「!?」
何もおこらない。いかなる変化も。
あるのは、神秘の色を増す紫の沈黙のみ。
「……アスヴァル」
立ち尽くし、あきらは尋ねずにいられなかった。
「ガースを……ガースをどうしたの？」

「……」

一瞬の空白をおいてから、奏太は静かに微笑してみせた。

「ガースは鳴っているよ……君の命令どおりに」

「どこで……」

そんな馬鹿なことがあるのか。エクサールの命をうけて共鳴しているガースが、なんらその場に影響を与えないなんて。

「君にいつまでも切り札を残しておくわけにはいかなかった。その度に退却せねばならないというのも、腹立たしい話だからね」

「でもあなたがガースを手放したなら――」

「誰が手放したと言った？　私が捨てるものか、君と同様、この計画に必要不可欠のガースを」

細い腕を持ちあげ、奏太はその指をあきらの面に向けた。

「残念だったな、エクサール・レア」

ふうっと圧力の渦が彼の指先に生みだされる。

「いずれそのことは改めて語ろう。我々は時間をかけて、ゆっくりと話しあうべきだ……我々の幸福のために。我々は協力できる。ひとつの故郷を分かちあう者として。そうだろう？」

「あきらを飼い慣らそうなんて考えても無駄だからね」

「無駄？」
今度ははっきりと、奏太は笑った。
「君の言葉だよ。無駄かどうかはやらねばわからない、と」
「そういうことはっ……そういう言葉は、人の心を曲げようとするときに使うものじゃなくて……！」
揚げ足のとりかたが卑怯だ。あきらは怒りを覚えながら、かすれる声を押し出した。
こんな相手の思い通りにされるなんて、絶対に認められない。
指先に気を集中し、奏太が告げる――。
「今の君は少々危険だ。やはり、しばらく眠っていてもらおうか？」
あきらは答えなかった。
アスヴァルの力が自分へ向く瞬間。それが最後のチャンス。本当に最後の。
だったら利用するしかないじゃないか！
瞬間を逃さないで。
ただ一度の声を逃さないで。
おまえは導かれる者。迷わずに、遅れずに、波をとらえ飛び乗ればいい。

ヒュッ、と耳元で風が鳴った。あきらは目を瞠った。気流ではない……風だ。
来ている。すぐそこまで。
「せんちゃん……？」

「君はよくやったよ」
アスヴァルの声。
「では——良い夢を」
彼の指先から不可視の砲弾が放たれる。優しげに。
それはドームの内から妨害の気が失われる一瞬。
あきらは天を見る。水晶の彼方に門を見る。必要なのは一言だけ。
ガースへ。愛する守護師団へ。
誤るな、摑みとれ。
半身よ。汝を待つものはここに在る。
戦士たちよ。彷徨える汝らを迎えよう——。
「それは今だっ!!」

ひときわ激しく、門が鳴りひびいた。

強烈な気の塊があきらの心臓を直撃し、一直線につらぬいた。
アスヴァルは勝利に酔おうとはしなかった。彼はその瞬間に悟っていた。変異を。
「してやられたか！」
月狼のエクサールは不屈の勇者。侮ったはずではなかった。
一枚上手ということか。怖れを知らぬエクサール・レア。
ゆらりと舞うように彼女の身体は宙に泳ぎ、ゆっくり——まるで時間の流れに狂いが生じたがごとく——水晶の床へ倒れてゆく。
奏太の瞳はそのスローモーションを見つめ、気流にゆらぐ彼女の髪をとらえ、そして……見た。
すべりこんだ少年の姿。
彼女が倒れる寸前に、その身を抱きとめる。素早く無駄のない動き。マリンブルーの髪とアクアマリンの瞳。
疾風が熱をともなって奏太の眼前をかすめていった。ビシッ！　と背後の水晶壁に深い亀裂が生じる。突き刺さったのは燃えさかる炎の矢。
かっと両眼を見開き、だが奏太はすぐには口をひらかなかった。
徐々に、大胆な笑みが口元に浮かびあがってくる。不敵な表情が。
「……なるほど。流石だよ」

足音もたてずに『着地』したのは、精悍な若者たちの影。
「再会を祝おうか？　それとも……」
「それとも？　暴虐非道の数々を告白し、罪を悔い改めるとでも？」
風使イオと炎使ガディスを左右に従え、ライエノーツの首席に立つ青年は、静かにそんな問いかけを口にした。

II

「頭数が、一人増えたようじゃないか」
ガディスを見遣り、少年は呟く。
「成り行きでな」
ぞんざいな調子でガディスが言い返した。
「ライエノーツの結束を誇ろうとでもいうのかな……」
「んな虫酸の走ること言ってんじゃねーよ。てめえの不様なカッコを見物しに来てやっただけさ、俺は。ガキの姿になってまでくだらねえ勝負もちこみやがって、こちとら大変な迷惑だぜ！」
「ずいぶん普通のライエスになってしまったんだな、君は」

失望したようにアスヴァルは眉をひそめる。いきなりの言われように、ガディスは呼吸を詰まらせそうになる。――聞き捨てならない台詞ではないのか。今のは。

「俺は俺だぜ、何も変わりゃしねえ!!　つまらん言い方すると惨殺するぞ、てめえ」

「初めから殺しに来ておいて、よく言う……」

「言えた立場か、そっちが!?」

「ディ」

あおりたてて平静を失わせるのは、アスヴァルの常套手段だ。そっと名を呼んでライアは彼の気を引きつけた。ここでガディスに突っ走られるのは得策でない。

それよりもあきらだ。

両腕に彼女を抱えあげたユーマが、身軽に足元を蹴って、仲間たちの背後まで戻ってくる。

「大丈夫。気を失ってるだけだ」

硬い声でユーマはそう報告した。

大丈夫とは言ったが、本当は彼女がひどい目にあわされたことをユーマは察知している。強いショックと体力の消耗。体温の上昇。骨に異状が見られないことだけが救いかもしれない。

サディストか、あの礼神官は!?

これではいつ目覚めるかわからない……。

状態をソフトに言い換えたのは、彼女に何かあっただけで頭の血管をぶち切る人間がすぐ近

くにいるからである。しかしそのこととは別に、あきらの意識がないとなると——考えなければならないことがひとつある。

炯月界に帰るための算段だ。転移にはもう一度、あきらの力を借りなければならない。

そしてアスヴァルの処遇——。

今この瞬間でも、アスヴァルは逃げることができる。彼の転移を妨げる者はない。また一方で、彼はライエノーツに対し攻撃を仕掛けることもできる。ガースを有する彼に、この状況は決して不利ではない。

どう渡りあう？　ライア。

「ガースだ」

前触れもなく、ライアが言った。

「アスヴァル。貴様の持っているガースをもらいうけたい」

「……ほう？」

楽しげにアスヴァルは彼を見る。

「唯々諾々と私が従うとは、まさか思うまいに」

「あのガースは相応しくない……貴様には」

アスヴァルの嘲笑は意に介さぬ様子で、ライアが続けた。

「貴様にわずかでもディシスを思う心があるのなら」

「……」

不穏な色が、その時になってアスヴァルの面をよぎった。怒り、だろう。

「芸のない台詞だな、光使ライア」

「もとより承知。俺は貴様のために忠告しているつもりだが、礼神官アスヴァル」

「君がそこまで陳腐な男だとは知らなかった。君の友人の流儀で言うなら――惨殺したいくらいにね」

「炎使ガディスはエクサール・ディシスによって定められた、正当なガースの守人。神官の位を利用し、邪な手段によって貴様が奪い去ったガースは、貴様とはなんら縁をもたないエクサール・レアのものだ。貴様は正しい主としてガースに認められていない。炎使ガディスが我々に与する以上、貴様の力が我々を凌駕することは決してない」

アスヴァルが保有するのはレアのガース。

その認識は、風使イオにとって最も痛切である。レアの半身が、アスヴァルの手によって汚されてきたという現実。

守るべき時に守れなかったなら、それは罪業。

罪は償われねばならない。たとえ命に代えても。

「それで私を脅したつもりかい？」

冷えきったアスヴァルの声が、イオの耳を打つ。イオは奥歯を噛みしめる。

ライアの言葉など――正論など無意味なのだ。この卑劣な神官が相手では。汚れた者に、今さら理を説いて何になる？

「……試せばいい」

低く力強い声が、イオから発された。

「力でなければ、奴には伝わらない」

「駄目だ！」

ライアの返答は鋭かった。抑えられてはいたが、それは叱責に近いものだった。

「早まっては駄目だ……！」

「何故だ？　彼は賢明だよ、ライア」

挑戦的にアスヴァルが笑う。

「それとも君には何か、困ることでも？」

「舐めてんじゃねーよ、この阿呆が!!」

今度はガディスが話に乱入した。

「ライアは正しいぜ。てめえに勝ち目はねえ！　とっととガースの有り処を明かしな、それからじっくりてめえを裁いてやる」

「そんな資格が君にあるとは信じがたいな、炎使ガディス」

「俺を侮辱する気があんならいい度胸だ、おもしれえっ！　炎使ガディスのどこにケチがつけ

られんのか、きっちり聞かせてもらおうじゃねえかっ!!」
「ディ、乗ってやる必要はない」
「うるせえ、俺は乗せられてやるんじゃねえ……俺の意志でこいつに訊いてんのさ、口出しすんじゃねえっ!!」
その時、ごく一瞬――それもかすかに――ライアが苦しげに唇を噛みしめるのをユーマは見た。ユーマだけが見た。
ライアの期していた何かを、今のイオの一言は、そして続くガディスの独断は、砕いてしまったのではないのか……!?
それはユーマの、寸時の想像にすぎなかった。想念を広げる余地はなかった。
アスヴァルが告げる。
「君はライエスとしては特異な存在だったのだが、炎使……。残念だな、君も所詮、そこにいる光使と大差ない……つまり、たいした役者だったということだ。
主君を鞍替えしたライエスに守護者然とした口を利く資格など、私には認められない。私が言っているのはただそれだけのことさ」
「……」
ガディスの瞳が、まっすぐにアスヴァルへ向けられた。
僕を失ったディシスは気の毒だと、アスヴァルは言いたいのだ。心理的弱点を責め、優位に

立とうとするのが彼の戦法だ。かつてライアに仕向けた方法とまったく同じ――。

「……くっ」

片手で顔を覆い、ガディスは喉を鳴らした。

「くっくっくっ……」

ユーマは目を瞠った。

笑っている？

おかしくて仕方ない様子で、ガディスはしつこく笑っていた。発作でもおこしたようだった。

だが一旦わけのわからない反応に出ておいて、それから本音をぶちかますというのも、ガディスの癖のひとつではある。ユーマは待った。つづく彼の激憤を。

「くくくっ……たまんねえなあ、アスヴァル。かわいそうになあ、おまえ」

涙を流しながら大笑いして、ガディスは服の袖でごしごし顔をこすった。それでもまだおさまらずに、げらげら笑っている。

気でもふれたか、と思わせる頃になって、ぴたりと笑い声が止まった。

「一度も疑わなかったのか？」

アスヴァルに問いかける。真顔で。

「だったら俺と同じだ。お兄さん、同情だけはしてやるが、後のことは知らねえ。自分でケジ


Kaoru

メつけろ。教えてやる――ディシスは生きてる」

誰も、言葉を返しさえしなかった。

それは妄想の域に入るべき発言だった。

やみくもに現実を玩ぶだけの……虚偽でなければ。

「ディシスなのさ」

もう一度、念を押すようにガディスが言った。

「おまえがレアだレアだって思いこんで好き勝手やりやがったエクサールは――生き残ったエクサールはディシスなのさ!!」

「……痴れ言を!」

真っ先に嘲笑おうとしたのはアスヴァルだった。だがすかさず放たれたライアの声に、時は再び静止した。

「事実だ。最後の時に、俺がレアから彼女を預かった。……彼女はエクサール・ディシス本人だ」

III

愕然とする以外に、何が許されただろう？
絆が断ち切られる音を、ユーマは聞いた気がする。両腕に抱いた少女の存在が急に希薄になる。
――それは、嘘だ。
それは嘘だ……それは……何が？
何が真で何が虚となるのか。
アスヴァルの瞳が、憑かれたように彼女を――あきらを求めた。十四歳の年若いエクサール。双生児の乙女。確証がどこにある？
それが虚言である確証がどこにある？
「記憶を封じ、すべてを白紙と化して、新世界へ送りこむ――。実行したのはレアだ。ただひとりの姉のために」
残酷に響くライアの言葉。
「ほら、白状しやがった。初めっからそう言ってりゃよかったのさ」
興奮に乾いた声で、ガディスが呟く。

ガディスはガディスで、なんとしてでもライアからこの証言を引き出さねばならなかったのだ。

黄金のガースを自分に託し、それ以後の消息を絶ったマイラ・エクサール・ディシス。

ライアが正当な守護者であるなら、彼女を捨ててやすやすとレアを受けいれるはずがない。

光使ライアの名に恥じぬライエスであるなら。

「……そうだな、なぜ彼女をエクサール・レアと偽る必要がある？」

渦巻く感情を抑えながら、アスヴァルが問うた。

冷たい琥珀の瞳が、少年の肉体しか有さぬアスヴァルの姿を見下して止まった。

「簡単なこと……。炯月界にて実体化した折、炎使ガディスの在気はどこにも見出されなかった。エクサールを育み守るには、ライエノーツの精鋭を必要とする。ディシスを守るべき炎使ガディスを望めぬなら、レアを守るべき水使と風使を迎えるしかあるまい？」

「……魂を売り渡したか」

四年の間、レアの守護者二人を欺きとおしたというのか。ただ己の目的のためだけに。

「貴様に言われるのであれば本懐だな」

平然とライアが答えた。

「君を甘く見ていたようだ……」

軽く両眼を閉じ、アスヴァルはそう吐き捨てた。

ユーマの腕のなかで、あきらは眠りつづけている。たったひとり、何も知らされず、ただエクサールとしての自覚のみで成立する存在。

では誰なのか、彼女は。

ディシスの記憶を奪い、レアとして育てた？　――それは誰としての生を生きるエクサールなのか。それはディシスなのか。ディシスであり得るのか、彼女は!?

「つまりてめえの企みにも説得力がなくなってくるってわけだ、礼神官アスヴァル」

炎使ガディスはにやりと笑ってみせた。

アスヴァルは鋭い表情を彼に向け、沈黙した。

ガディスを包む空気に堕落の色はない。謀略ではない。虚言ではない。ガディスの抱く確信に揺らぎはない……。

「こうして俺が戻った以上、ディシスのことは俺が守る。てめえに指一本、触れさせやしねえ。それともここで俺と正面からやりあうかい？　さぞ面白いことになるぜ」

「誤解されては困るな」

低く、アスヴァルがそう告げた。

「私の目的は……琅月界の復活だ」

「ディシスがそいつを妨げたらどうなる？」

切りこむようにガディスが問い返す。

「琅月界なんか知ったこっちゃねえ。そう言い出したらどうすんのさ、坊や。敵にまわって戦うことになるんじゃねえのか、てめえは？」

「ディシスがそのような――」

反駁しかけておきながら、アスヴァルは絶句した。

まさに琅月界復活を妨げる者、烱月界を弁護する者――それが来生あきらではなかったのか。

ことごとく相容れぬ世界観の持ち主。いかなる圧力によっても屈することのない、制御不能のエクサール……。

あれがディシスであるはずがない。

ディシスは健在であらねばならない。

彼女がこの計画に同調せぬことはわかっている。

ディシスが我が身に敵対しえぬことをアスヴァルは知っている。

想念は分裂し、暴走する。アスヴァルはその瞬間初めて、己の混乱を自覚した。

感と知の不一致。期待と認識の狭間。

原始の混沌と化した琅月界の姿。……救済不可能？　不可能？

ディシスは生きている。

生きている。目の前にいる。手の届く、同じ空間に。

滅びに突き進む世界。看過するより他にすべを知らぬ、位高き無能者たち。

礼神官なればこそ、エクサールなればこそ、課せられた使命は重くかけがえなきもの。

責は負う。『力』とは、そのためにある正義の指針だ……。

「アスヴァル!?」

不意に、はりつめた少女の声が彼の白昼夢を引き裂いた。彼は両眼を見開き、そして捉えた。

一直線に飛来する炎の塊を。

「無礼だな、炎使……！」

風の加速がはたらいている。アスヴァルはそのことに気づき、舌打ちとともに右の掌で炎矢をつかみとった。身をかわせる速度ではすでにない以上――。

ザッ！　といやな音があがった。片腕の体組織が灼かれた音である。

「無礼だな！」

業火は瞬時に消し去られる。隙をついたガディスの仕掛けように、アスヴァルは怒りの念をにじませた声を放つ。

「目を覚ましてやったまでのこと」
銀の弓を左手に抱き、ガディスが答えた。だが……。
アスヴァルの視線は、ただ一点に留められた。吸い寄せられるように。
水使の腕のなか、力なきその身体を無理に起こし、澄んだ瞳をひらき、まっすぐにひたむきな眼差しを向けるエクサールの乙女……。
「……なぜ」
焼きついた右手を押さえつけ、アスヴァルは尋ねる。
「なぜ私の名を、君は……」
なぜ炎矢の迫ったその瞬間。
「君がなぜ、私の名を呼ばねばならない……？」
「……」
返答はなかった。
あの一言が無意識の産物であることを、ユーマは悟っている。
あきらには今、まだ何もわかっていなかった。自分が叫んだことすら知らずにいるのだ。何が起こり、何が変化し、何が問題の争点となっているのかも。
ただ愕然と瞳をひらき、そこに展開する光景をとらえようとして。
「……あきら」

優しく――静かに、ユーマは彼女に呼びかけた。
「迎えにきたよ」
何も知らない、大切な、無垢の象徴。
かすかに身を震わせてから、あきらはようやく自分を守る腕が水使ユーマのものであることに気づいた。
ユーマとしてではなく……何よりもまず、来生貢として。
「……みっちゃん……」
「遅くなってごめんね」
力をこめ、ユーマは彼女をしっかりと抱きしめる。
母のように、兄のように、愛しあう者のように。
「ずっと独りにしてごめんね」
「みっちゃん……どうしたの？　どうして泣いてるの？」
「なんでもないよ……！　なんでもないんだ、あきらには全然関係ないことなんだ」
関係のないことだ、彼女には、すべてが。
溢れ落ちる涙はそのままに、ユーマは礼神官アスヴァルを振り返る。
なぜ翻弄する？　よってたかるように誰もが彼女を縛りつける。運命という二文字を免罪符とするのか。過去という二文字を。

「ぼくだって同罪だ……!!」

過去からの亡者。そうアスヴァルを呼ぶ資格は、ユーマにはない。

「わかってる、わかってるさ!! だけどもう尋ねたりしないでくれ!! 意味なんて、理由なんてどうでもいいじゃないかっ!!」

なぜ彼女がアスヴァルを呼ぶのか、なぜガディスが現れて自分たちに力を貸したのか、なぜ四年前にライアが来生家へ自分たちを導いたのか——そんなことに意味などいらない。

「なにもいらない……あきらだけいればいい」

水使ユーマという称号さえ。

だが彼女を守るための力を、使鍵の導きを、決して捨て去ることのできない自分の矛盾にユーマは気づいている。

「君は純粋だが……」

ぽつりとアスヴァルが告げた。その面にわずかな同情と、わずかな苛立ちと、そして諦めとも達観とも見える謎めいた表情を浮かべて。

「人には、業というものがあるのさ……。君はそのことを知らない。人の闇も、人の真実も」

「そんなもの……!」

知りたいとも思わない。ユーマはさらに強くあきらを抱きしめ、その肩に濡れた頬を預ける。どうして誰もが、ここにいる誰もが、彼女と同じく過去の全部を捨てて生まれ変われなか

ったのだろう?

「私はとうに、人の道は外れた。私は鬼だ……。彼女が何者であろうと、私を曲げることはできない。それが現実だ」

所詮、先のない命だ。

アスヴァルは毅然として、光使ライアに目を向けた。

「ライア……君はライエノーツの首席としては、致命的な失敗をおかしたな。君は優秀なライエスだが、お喋りな炎使ひとり馭せないとあっては……」

ガディスがムッとして何か言いかけたが、ライアは手をあげてそれを遮った。

「バランスの問題さ、アスヴァル」

謎かけのような、ライアの返答。

「非情なものだ」

アスヴァルは笑う。

「だがいずれにせよ君は間違えた。私を説くことができなかったのは確かだ」

「そうかな?」

ライアもまた微笑した。寸分の隙もない、ポーカーフェイス……その内に冷気をひそませて。

「成果があらわれるのはこれからだ」

「賭けをするつもりかい？」

アスヴァル――奏太は、挑むようにそう尋ねると、炎矢によって炭化寸前まで灼かれた自分の右手に一瞥を与えた。

苦痛は問題ではない。しかし優利な条件とは言えまい。

「では、その賭けに乗ってみよう。見縊らずに布陣をかためたまえ……君にその手勢が残っていればの話だが」

ふっ、と少年のまわりの気配が変化した。

「！　おいっ！」

狙いを悟ったガディスが一歩踏み出したが、何ができるわけでもなかった。

音もなく奏太の姿は水晶塔から消え去った。空間転移、である。

「ちっ」

ガディスは舌打ちすると、銀弓を指先でくるりと回して鎖の姿に変化させた。みすみす逃がしてやるとは、ライアもお優しいことである。ガディスの好む展開ではない。

まあ、最大の目的は、連れ去られた彼女を救出することだったわけだから、この晶月界までわざわざ『出張』したぶんの苦労は報われているのだ。まんまとライアの大嘘を暴くこともできたのだから――収獲は大、か。ソニー・W・エクセルとしては散々なことになっているが。

ソニー・W・エクセルは誰の自由にもならないし誰の命令も聞かないが、しかし……。

とりあえず炯月界に戻ったら国際電話の一本くらいは入れてやらねば、と彼は考える。あの甘ったれの戯けた小僧はなんだかんだと理解のありそうな台詞は並べるくせに、実は小さなことをぐずぐず根にもつ奴でもあるのだ。ガキのご機嫌というものはわからない。

「熱、あるよ。少し……」

ユーマが――いや、あきらに違和感を与えないように姿を戻した貢が、そう囁いた。

「うん……大丈夫」

二本の足で立ってみたが、いきなり倒れたりはしないですみそうな感触だ。あきらは頷いた。

「いろいろバイオレンスしちゃったからさ、少しぐらい疲れても仕方ないよね……。でもあきらって実はけっこう強かったんだよ。知らなかった」

バイオレンスの一語で片づく話ではないのだが、あきらは無理やりそんな台詞でまとめてしまう。あらためて貢は彼女の肩を、背中から静かに抱きしめていた。

「みっちゃーん？　重いよ？」

「嘘つくんじゃありません。あきらの足元が危いから、ぼくが支えてあげてるんじゃないか、失礼だな」

言葉にはならない。どうすればいいのか。

あきらを前にして、言葉になどならない。

「みっちゃん……」

貢の腕に自分の手をのせて、あきらは振り向こうとした。貢の声に隠されている深い悲しみの正体を知るために。彼の涙の理由を。

が……視界で人影が動いた。

名を呼ばれた。そう感じてあきらは前を見た。

その時、誰も、一言たりとも発しはしなかったのだ。なぜそんな気がしたのか、あきらは知らない。

伝えたのは、風だ。

微風。

それまで沈黙と静寂に包まれ、ひっそりと立っていた風使イオが、あきらへ向けて歩を踏み出したところだった。

繊細な彼の美貌が、今、きわだって透明に見えるのはなぜだろうか。

清冽な泉のように。

見守るライアの前を、彼は通りすぎる。何も告げず、何も告げられず。視線すら交わされることなく。

錆色の髪をかきあげながらソニー・W・エクセルもそれを見送る。まあやむをえない成り行きだと思いつつ。

そう……やむをえない、当然の成り行きだ……。

「……イオ」

貢が呼びかけた。

あきらの前で足を止め、まず彼は貢に目をやった。

口にしたのは、短い依頼。

「……俺を許さずにいてほしい」

貢は何か怒鳴ろうとして、結局言葉を選びとることができなかった。

あきらは両の目を見開いてイオのことを見上げていた。

わからない。何が動いているのか。ただ、ひとつだけわかる。彼の悲しみ。彼の底知れぬ悲しみ。深く激しい絶望。どこにも行き場のない、それがゆえに遠く彼方へ叫びつづける絶望。

どうして？

誰が彼の心を裂いたのか。どれほど残酷な方法で？

「あきら」

片手をさしのべ、あきらの左手をとり、美しい風使はかすかに表情をやわらげた。

「せんちゃん……？」

あきらは彼の手首に結ばれた布に目を向ける。

「怪我……？　痛かった？」

「……いいや……何も」
イオは首を横に振り、少し間をおいた。
「何も辛くなかった……それは全部、あきらのためだったから……」
あきらは何も言えなくなってしまった。
怖い。
ひどく澄んだ彼の瞳を見ていると……怖くなる。胸の内側が痛くなってくる。
「静かだ」
イオが呟いた。ところどころ破損した水晶ドームの、上方を仰ぎながら。
「晶月界を訪れる者に、時はその流れを止め、永劫の静寂を与えるという……。望みさえすれば、いつまでも」
「……時を止める？」
「ああ」
あきらの左手を持ちあげ、イオは頷いた。
彼の指先に目をやり、あきらは銀色に輝く指輪を見た。……ディレイ・ザード？
するりと冷ややかに、中指へすべりこんでくる銀の感触。
あきらの指にディレイ・ザードを預け、そっとイオは彼女から手をはなす。
「え……？」

どういう意味？

愕然として、あきらは顔を上げた。金褐色の瞳が、なつかしげにあきらを見つめかえした。

彼が告げる。

「さよなら」

風のように彼はあきらの前を去った。入口も出口もない水晶塔の頂点。その広間の壁へ、彼はごく自然に歩み寄り、そして——消えた。

水晶壁の内側へと。

溶けこむように。

あきらはその一部始終を見ていた。だが何もできなかった。何を言うことも……。

今のは何？

その空白は、わずかな時間だったはずだ。

「そんなのって……!?」

一声叫んで、あきらは水晶壁に駆け寄った。彼が消えた、その場所に。

「そんなのって、何!?　どうして!?」

拳を打ちつけても、壁は美しく静かにきらめくだけ。何も見えない。どんな景色も、たった今いなくなった風使の姿も。

「どうしてっ!?　そんなのわかんないっ!!　ちゃんと言ってくれなくちゃわからないよっ!!」

「あきら！」

貢が叫んだ。あきらには聞こえなかった。

「何もわからないっ……!!　どうして!?　どうしてさよならなんか……なんでそんなこと言うのかわかんないっ……!!」

「あきら……!!　仕方ないんだよ、ぼくらはレアの守護者で！　ぼくはあきらの守護者になれても、イオには……イオには無理だからっ!!」

貢は何を言っているのだろう？

イオがエクサール・レアの守護者だからといってそれが今の別れにどう関わりがあるというのか。あきらにはわからない。何も。

「話すよ」

壁を叩くあきらの拳を、横から受けとめた腕があった。

「俺が話すよ、全部のことを……あきら」

それはライア。

落ちついた声で、けれど……。

「ただ、ひとつだけ先に言っておく」

痛いほどあきらの手首を強くつかみ、ライアは宣告した。

「イオはもう帰らない。二度と……」


Kouki H

「――――」

ぐらりと世界がゆらめくのを、あきらは視た。遠のく色彩を。

「……そんなの……」

涙も出ない。信じていないから。身体の内側が信じていないから。

「そんなの、嫌……」

信じない。みんなが別れてしまうなんて。

信じない。

墜落する。意識が、精神の暗闇に。

誰かが、名前を呼んだ。何と呼んだのだろう。レア？　ディシス？

『私はあきらよ、……』

誰がそこにいるの？

信じない。何もかもが遠ざかってゆく。信じない。こんな現実。

くりかえしながら、あきらは墜落していった。一瞬だけの、安らかな暗闇に。決して終わらない、戦いに支配された宿命のなかに。

――つづく――

【用語解説】

琅月界……球形の閉鎖世界。月斎の地と呼ばれる。多元世界のなかで、もっとも高位に存在し、非常に恵み栄えた。

炯月界……物質と精神の世界。現代の地球社会そのもの。

晶月界……永遠と無限の世界。さまざまな世界の狭間に存在し、高位の神官か、エクサールでなければ立ち入れない。界境とも呼ばれる。

エクサール（界使）……異次元世界への扉をひらき、その二つの世界のあいだに流れるエネルギーを制御する乙女。他の界から因果力をとりこむことで、「奇跡」をおこすことができる。突然変異的に生まれ、不老にして長寿。

エール（因果力）……世界・存在を成立させるためのエネルギー。

エイダ（在気）……存在・人物が発する固有の波動。

ライエノーツ（守護師団）……エクサールを悪用せんとする者から彼女を護衛し、教育し、最も身近な相談相手としても仕える、特殊能力をもった戦闘集団。

ライエス（守護者）……ライエノーツの一員。優れた頭脳、強靱な身体、高潔なる精神、精老から伝授されたディレイ（使鍵）、これらのうちいずれが欠けてもライエスとは呼ばれない。ライエスとなるのは、多くの候補者のうち、厳しい選抜をのりこえて条件を満たした者だけである。直属するエクサールがその座にあるかぎり、彼らも不老である。彼女が世を去り、次代のエクサールが生まれ、ディレイが他の者に譲り渡された時点で、死が訪れる。

ディレイ（使鍵）……自然界と交信する資格のひとつ。ライエスが特殊能力を発揮するための必須条件。象徴として、銀の聖光石に宿っている。

〈付〉
ディレイ・ルナク……光を司る使鍵。頭鎧、あるいは長剣と化す。
ディレイ・ザード……風を司る使鍵。指輪、あるいは指鞘と化す。
ディレイ・ミンス……水を司る使鍵。飾腕輪、あるいは装剣と化す。
ディレイ・ローザ……炎を司る使鍵。鎖、あるいは弓と化す。

精老……生命も肉体ももたぬ、不死の存在。自然のうちに宿る。

神官……精老およびエクサールと交渉をもち、その恵みを人間社会に活用する存在。特に、大神官、主神官、礼神官の地位を高位三官とする。

央界神殿……琅月界の天の中央にある大神殿。ライエノーツの拠点でもある。

ガース（司杖）……黄金色の聖光石でつくられた短刀。エクサールの能力に指向性を与え、増幅する。エクサール以外の者が持っても強力な力を与える。

あとがき

本当にあった怖い話。

担当K氏「エクサールって全部で三冊じゃなかったっけ?」

若木未生「当然、三冊といったからには三冊です!」

K氏「今回のプロット見たけど……これって一巻の『後編』じゃない?」

若木「あっそうだ! ほんとだ! 一巻と二巻ってあわせて一冊になってるっ!」

K氏「じゃあ一巻が前後編になったと考えて……」

若木「そしたら全部で」

K氏「六冊かあ……」

……私は『四冊』と言おうとしたんですけどおおおっ。

お久しぶりです。(と、あえて言う)

先日コバルト編集部に行ったら編集某氏に「若木さーん、久しぶりだねー、最近本が出てないけどどうしたの? ずいぶんゆっくり休養してたんだねー」と言われてしまった。そうっすねー、先月出たのは雑誌発表作品の再録本ですからねー、書きおろしの文庫で皆さんにお目に

かかるのは七か月ぶり（あれっ、『七か月ぶり』って台詞、どこかで聞いたぞ。わかんない人は今年のコバルト四月号をお友達に借りて読みなさい）ですねー。

一応その間に、某スーパーヒーローの話と某機械人間の話を書いたり手刀をつかう人と結界をはる人の話を作ったりしてたんですけど、まあ某S文庫とか雑誌Cとかを読んでいない読者さんにはなんにも関係ないし、まだ世に出てない話なんて誰にも読めないだろうし、のんびり休養してたと思われても、仕事もせずに怠けていたと思われても別に仕方ないですね。いいけどね……仕方ないけど……しかしっ誤解はされたくないなあっ。ちくしょうっ、今に見てろよ。

お手紙で指摘してもらったんですが、若木未生という物書きはシリーズによって人格が変わるそうです。物語の雰囲気、文章の書き方にはじまって、あとがきに出てくる人柄も別人なんだって。そうかー。よく気がつきましたね、実は若木未生っていうのは四人の作家による合同ペンネームだったのだよ。A型の若元さんとB型の木崎さんとO型の未城さんとAB型の桐生さんという、四人の人がバラバラに好き勝手に仕事をしてまして、四人の名前から一文字ずつとって並べたら、ほーら若木未生……なーんてのは嘘にきまっている！（本当だったら楽だったのにー）

まじめな話、私自身も、作品ごとに自分の性格が変わっていると思います。なんたって二重人格の射手座にくわえて正反対のA型だぜっ。などと占いに逃げるんじゃないっ。と突っ込む

あたりがすでに分裂している。なんて分析することで正当化しようとしている。しょせん臆病者なのさ。って、そういうおまえは臆病じゃないのかよ、えっ!?　と追及の矛先をかえることによって言い訳をしている。ってそりゃ揚げ足をとってないか。そこで揚げ足とられるおまえが馬鹿なのだ。そのおまえって誰だよ、そりゃおまえだよ、おまえ！　……とまあ、こんな調子でこの一瞬だけでも錯乱している奴なので、小説なんか書かせた日にはきっともっと錯乱するんでしょう。

（さしずめエクサールを書いている若木は、攻撃的で性格が悪い若木だな……）

それからもうひとつ指摘があって。「若木さんの前世は、十七歳くらいで死んだ男の子じゃないでしょうか」どひゃーっ。こ、これぱかりは、私、自分ではわからんです。

こうもしつこく男の子を書きたがるってことは、本人、前世で男の子だったんじゃないかという。そうかー……そうなのかなあ……。別に私、男の子の気持ちになって書いてたりは……するか……。

でも今回の本でしみじみ感じたことがひとつ。

「ああ……女の子がいなーい」

私、自分の作品のなかで、エクサールは画期的だと思っていたのですよ。ここまでヒロインを中心にすえた物語を書くのは初めてだったから。しかし！　ふたをあけてみたらヒロインのあきらちゃん以外、女の子がひとりも！　本当にただひとりも！　まるっきり出てこない。こ

うも徹底して出てこないとなると画期的だよなー。狙いをすっかりはずしてるけど。

タイトルに『騎士団』という言葉を使っているんですが……どうやら私はこの騎士団＝戦闘集団の姿を描くことに興味があるようですね。

一人の人間に忠誠を誓うっていうのは、決して自然なことではない。日常的な、普通のことではない。それをなしとげているわけだから、ライエノーツの人たちは要するにどこか変なんです。（そう言っちゃ身も蓋もないけど……）

価値観が、世界観がもとから違う。

自分の生命のもっている意味が違う。

それが幸せかどうかなんて私にはわからないんですが、彼らを書いてるとくらくらしてくるんです。嬉しくて。彼らが正しいのか、間違ってるのかなんて知らないし、彼らの思いがあまりに私のいる場所から遠いところにあってつかみとるのに苦労するときもあるけど……でもでも、彼らを書いている私はとても幸せです。

というわけで、今回の執筆作業は楽しかったです。

相変わらず、たった一冊分の原稿を書くために凄じい時間を費やし、編集部の方々をはじめ沢山の皆さんに多大なご迷惑をおかけしたことについてはお詫びの言葉しか出てまいりませんが……。

そういえばいきなり「今、エクサールの二巻書いてるんですけど、私つくづくファンタジー書く人を尊敬してしまった」と言ったら前田珠子先生が「おいおい何を言っているんだい」と呆れていたが（笑。そりゃそうですよね）……でもねえ、ファンタジー書くのって時間がかかるの！　本当にものすごく時間がかかるの！　原稿用紙の升目にへばりつくようにして一文字ずつ必死に書いてしまうもんだから全然すすまないの！　――だって楽しいんだもん。

小説家としての無知をさらけだすような発言をしておりますが。でもこんなに文章を書く楽しさを満喫したのも、珍しいことなんじゃないのかなあ。書きあげた今だからこそ言えることかもしれないけど、楽しかったです。とても楽しかった作品です。（それにしちゃラストが許せないかもしれない……。悪気はないんだが。申し訳ない）

私はあまり自分の作品を「好き」ということはできなくて……（キャラクターを「好き」と言うことならできたりするんですが……『彼ら』は私とは違う人だから）それはもしかすると、好きとか嫌いとかって次元のものではないからかもしれないし、私が単に天邪鬼なだけかもしれないし、わからないけど……でも本当に「好き」という言葉はあんまり出てこないんです。

いつも最初に、書くべき世界と書くべき人たちが目の前にいて、いつもいつも自分の力ではその大切な物語を完全に書いてあげることができなくて、くやしくてあがいているだけだから、そんな自分の力不足がとうてい「好き」にはなれないのかもしれない。

でも私の実質的な第一作（だと思っている。勝手に。デビュー作でも初出版作品でもないけど）を書いたときに、あとがきに書いた言葉があって。

今回も、それをそのまま書きます。てれくさい台詞だけど。

全力投球、手加減なし。手を抜いたという言い訳はしたくない。

ご意見ご感想、ご叱責ご質問、その他もろもろ、お手紙をお待ちしております。

さて、二巻目に至って新キャラが三人。

ソニー・W・エクセル君。……またの名を、遅れて来た男。

でもおかしいなあ、彼はこんなに早く出る予定じゃなかったんだけどな。作者としては、彼とはとても気が合うので嬉しいです。男らしくて（ほんとか？）いいヤツ。しかしとんでもない名前だ。こういうのって姓名判断できるんでしょうか。

クリストファー・ローディン・ジュニアとエドウィン・アーサー以下略（す、すまん）の二人組。この人たちについては、今は何も語らずにおきましょう。ふふふ……。三冊目でドカーンと活躍してくれることを祈る。だいたい三冊目っていつ出るんだ？

姓名判断といえば、前回のあとがきでお願いしたら本当にいろんな占い方を教えていただきました。ありがとうございました。それぞれハマってて面白かったです。私が使った本は『永久保存版　姓名判断』（野末陳平・著　光文社カッパブックス）なんですが……来生の姓を十三

画で数えるのは『来』を八画とするから。それでもって霊数の一はオールの計算には入れないから、前回書いたような計算になるわけでございます。間違ってないはずなんだけど……。

ちなみに若木未生は（『若』を十一画に数えて）二十五画で『偏屈トラブル運』……文字どおり、偏屈でトラブルをおこしやすいんだって。ふはははは。でも全体的にはいい名前なんです。説得力ないけど、いい名前なの！

あと、若木の本名を姓名判断すると三十六画の『義侠波乱運』で、これは義理人情に生きるあまりに波乱にはまる（なんなんだそれは！　いずれにしてもトラブルはあるのか）人の運勢らしいんだけど、偏屈とは関係ないみたい。ここでもやはり二重人格している……。

これはあえて言うようなことじゃないのかもしれないけど、やはり告白します。心配かけた人がいるから。

偏屈な私は、先日までグレておりました。

エクサールの一巻を書いたころが、いちばんグレてた時期だと思う。本人、納得してるつもりだったんだけどやっぱりどこかグレてました。ごめんなさい。

ずっと書いてきて『第一期』がクライマックスの直前まできている、とても大切な物語のつづきを、本当に思いもよらない意外な理由でしばらく（一年くらいは！）休まざるをえなくなって、だけどとにかく小説は休まずに書かなければならなくて、だったらそれはそれで仕方な

いから新しいものを書くわ、書きたいものだったら前から用意してあるのよと言いつつ、まだ私はやっぱりどこかで納得してなかった。だって自分の意志で決めたタイミングじゃなかったから。だからグレてた。

自分の作品に対して、そしてなによりも作品を読んでくれる人に対して、それはとても失礼なことですよね。

一巻を出したら、ものすごい量のお手紙が届きました。それまでにないくらい。

思ったとおり、新しいシリーズを始めたことで激怒してる人もたくさんいた。顔もわからないような人に「馬鹿」とも「大嫌い」とも言われた。そうか、この言葉をうけとめられる奴はこの世に私しかいないんだよな、と思った。

それから、心配してくれた人がすごくたくさんいた。身体のこととか。顔も知らないような人が「だから身体に気をつけろって言ったのに！」と本気で叱ってくれるんです。すごいことだよね。なんでそんなこと言ってもらえるんだろう。若木ってば優しくされて甘えてばっかりじゃだめだよ、と思った。

そして、「面白い」「好き」と言ってくれる人がいて……嬉しかったし、そのままでは申し訳なかったし、ケジメつけようと思った。

まったく、なにをグレているんだ、おまえは！

グレてた私も本当の私だけど、この物語を書かずにいられないのも本当の私だったんです。

この作品世界が「好き」です。私は。

私が書きたい。だから書く。言い訳はしたくない。結果として他のシリーズを書く時間を削ることになっても、私は書きたかったんです。

それは私の我が儘だから、我が儘とおす以上は、書くことを無駄にしない。還元させる。それについては一巻のあとがきで言ったからもうくりかえさないけど。

だれかのために書こうとか、だれかに喜んでもらおうとか、そういう気持ちで小説を書くんじゃない。

（この言い方はまた誤解されるかな、ちゃんとつたわるかな……でもいいや、言っちゃえ！）

待っててくれる人がいるのはありがたいし、喜んでもらえたらもちろん嬉しい。けど、褒められるのが目的で書くんじゃない。小説は、ただとにかく小説でしかなくて。

書かずにいられないものが、自分の目の前に、そこにあるんです。その作品のために私は書くだけです。どうしたらよりよいかたちで書いてあげられるのか……そんなことばっかし考えてる、私なんてただのエゴイストだよ。

だから感謝したい。読んでくれるすべての人に。

逆に……「あなたのために書いた」と思ったら最後、「読んでくれてありがとう」とは言えなくなる。私にはそんな気がするんです。

私は幸せです。書きたいものを書いてる。
この物語を読んでくださって本当にありがとう。
また会えたら嬉しいです。

でも本当にこれからだね。この物語も。
これが全部で四冊になるのか六冊になるのか、もっと長くなるのか、短く終わるのか、そんなこと私にはもうわからないんだけど、じっくりのんびりつきあっていくつもりです。それにしてもこの続き方は非道ではないのか。のんびりって……おーい。
ともかく序盤戦が終盤に近づいている（よくわからん日本語……）例のシリーズに、しばし全力投球してくるんで、その間、待っててやってくださいねっ。
で、その某シリーズだけど、また来月に会え……ればよかったんだけど、それはきっぱり無理！　となりまして（こーの－嘘つきーっ!!　でも九月だって夏だよ、夏!!　とか言って逃げるのか、卑怯者ーっ!!　……錯乱している）では皆様ごきげんよう。

若木未生

SPECIAL THANKS……羽音こうき様!!　感謝感謝大感謝!!　テレカも楽しみだよんっ。

わかぎ・みお
1968年12月２日、埼玉県生まれ。射手座。Ａ型。1989年４月『ＡＧＥ』で、第13回コバルト・ノベル大賞佳作入選。好きなものはマンガと音楽。週刊少年ジャンプをこよなく愛する。苦手なものは料理。コバルトシリーズに『天使はうまく踊れない』『セイレーンの聖母』『十字架の少女』『迷える羊に愛の手を』『炎獄のディアーナ（前編）（後編）』『エクサール騎士団1』『XAZSA Ver. 1』がある。



エクサール騎士団2

COBALT-SERIES

1992年７月10日　第１刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　若木未生

発行者　若菜正

発行所　株式会社集英社
〒101-50
東京都千代田区一ツ橋２－５－10
(3230)６２６８(編集)
電話　東京(3230)６３９３(販売)
(3230)６０８０(制作)

印刷所　株式会社美松堂
中央精版印刷株式会社

© MIO WAKAGI 1992
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本はご面倒でも小社制作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-611657-X C0193

コバルト文庫

〈好評発売中〉



天使はうまく踊れない

高一生の亮介には、見えないはずのものが見える厄介な力がある。ところが、最近奇妙な奴らが出現して…。

セイレーンの聖母

十九郎が狙われた!? とてつもない妖力をもつ女を敵にまわして、総帥の斎加忍はある作戦を。

十字架の少女

夏休み、亮介たちは諒の妹・彩を迎えて、軽井沢で合宿をはじめた。悲惨な過去をもつ彼女は。

迷える羊に愛の手を

転校先での諒の生活、妖の者に闘いを挑む希沙良と十九郎…オムニバス形式でおくる初の番外編。

炎獄のディアーナ〈前編〉〈後編〉

女の子を狙う髪切り事件が続発した。事件に妖の者の気配を感じた亮介たちは、ある作戦を…。

術者VS妖者！
いま大人気の
アクション・
ファンタジー。



若木未生の本

「ハイスクール・オーラバスター」

コバルト文庫
〈好評発売中〉



私はレア、多元界の
因果力を制御する者(エール)—。
アクション・ファンタジー!

エクサール



若木未生

来生(らいせい)あきら、14歳。彼女の真の姿は、異次元の〈琅月界(ろうげつかい)〉からやってきた巫女(エクサール)なのだ…。

コバルト ノベル大賞 募集中！

『COBALT』編集部では、「コバルト・ノベル大賞」を募集しています。この賞は、才能ある作家志望のかたを、新人作家として世に送り出すためばかりではなく、小説を書くことの楽しさ、創作することの喜びを広く若いかたたちにも味わっていただきたい、という願いもこめて設置されたものです。

ロマンの新しい時代を切りひらく、あなたのフレッシュな力作100枚前後（400字詰原稿用紙95枚以上105枚以下）を、お待ちしております。

〈入選作〉 **正賞の盾と副賞100万円**

〈佳　作〉 **正賞の盾と副賞 50万円**

応募要項は隔月刊「COBALT」に毎号掲載されています。

恋を夢みる乙女のための小説誌！

[コバルト] Cobalt

1月、3月、5月、
7月、9月、11月の
18日発売！

隔月刊ですので、お求めになりにくいこともあります。あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

●「コバルト短編小説新人賞」「ショート・ショート」を毎号募集しています。